整理センター国田分館

茨城県教育財団文化財調査報告第155集

中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

中原遺跡 1
(上　巻)

平成12年3月

都市基盤整備公団茨城地域支社
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第155集

中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

中原（なかはら）遺跡 1
（上　巻）

平成12年3月

都市基盤整備公団茨城地域支社
財団法人　茨城県教育財団

中原遺跡遠景

第47号住居跡遺物（漆膜と漆紙）出土状況

序

つくば市は，国際交流の拠点にふさわしい町づくりを進めております。この町づくりの一環として，つくば市と都市基盤整備公団茨城地域支社は，市と東京圏を直結する常磐新線の開発と同時に，沿線開発を一体的に進める土地区画整理事業を計画的に推進しています。

財団法人茨城県教育財団は，都市基盤整備公団茨城地域支社から開発地内の埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，平成８年４月から平成９年７月までは中谷津遺跡の発掘調査を，平成９年８月からは中原遺跡の発掘調査を実施しております。その成果の一部はすでに当財団の文化財調査報告第139集として報告したところであります。

本書は，中原遺跡の平成９年度における調査成果を収録したものであります。本書が，研究資料としてはもとより，郷土の歴史に対する理解を深め，ひいては教育，文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお，発掘調査及び整理を進めるにあたり，委託者である都市基盤整備公団茨城地域支社から賜りました多大なる御協力に対し，心から御礼申し上げます。

また，茨城県教育委員会，つくば市教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位から御指導・御協力を賜りましたことに対し，衷心より感謝の意を表します。

平成12年３月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　齋藤佳郎

例　　言

1　本書は，住宅・都市整備公団つくば開発局の委託により，財団法人茨城県教育財団が，平成９年８月から平成10年３月まで発掘調査を実施した，茨城県つくば市大字東岡（おおあずまおか）に所在する中原（なかはら）遺跡Ⅰ区・ⅡＡ区の発掘調査報告書である。なお，住宅・都市整備公団つくば開発局は，平成９年10月から住宅・都市整備公団茨城地域支社に，平成11年10月から都市基盤整備公団茨城地域支社に名称を変更した。

2　本遺跡の発掘調査期間及び整理期間は，以下のとおりである。

発掘調査　　平成９年８月１日～平成10年３月31日

整　　理　　平成10年４月１日～平成11年９月30日

3　本遺跡の発掘調査は，調査課第２課長和田雄次の指揮のもと，調査課第１班長鶴見貞雄，主任調査員池田晃一，成島一也が担当した。

4　本遺跡の整理及び本書の執筆・編集は整理課長川井正一，首席調査員荻野谷悟の指揮のもと，主任調査員成島一也が担当した。

5　本書の作成にあたり，旧石器時代の石器の器種の判定と石材の鑑定については千葉県立中央博物館上席研究員の橋本勝雄氏に，墨書・刻書土器の判読については国立歴史民俗博物館教授の平川南氏に御指導いただいた。

6　本遺跡から出土した鉄製品の金属学的保存処理業務は財団法人岩手県文化振興事業団に，漆膜と漆紙の化学的保存処理・鑑定業務は吉田生物研究所に，炭化材・炭化種子の樹種同定と土壌分析業務はパリノ・サーヴェイ株式会社に，一部の石器の実測業務は株式会社アルカに委託した。

7　発掘調査及び整理に際して，御指導，御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し，深く感謝の意を表します。

凡　　例

1　当遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し，Ｘ軸＝＋10,480m，Ｙ軸＝＋26,040mの交点を基準点（Ａ１a1）とした。

大調査区は，この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西，南北に各々10等分し，４m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へＡ，Ｂ，Ｃ‥‥，西から東へ１，２，３‥‥とし，「Ａ１区」，「Ｂ２区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は，北から南へa，b，c‥‥j，西から東へ1，2，3‥‥0とし，名称は，大調査区の名称を冠し，「Ａ１a1区」，「Ｂ２b2区」のように呼称した。

その他，道路等による調査区割りについては，第１図に示した。

2　遺構，遺物，土層に使用した記号は，次のとおりである。

遺構　住居跡－SI　掘立柱建物跡－SB　堀・溝－SD　土坑－SK

遺物　土器・陶磁器－Ｐ　拓本記録土器－ＴＰ　土製品－ＤＰ　石製品－Ｑ　金属製品－Ｍ　瓦－Ｔ

自然遺物－Ｎ

土層　撹乱－K

3　遺構・遺物実測図中の表示は，次のとおりである。

粘土　焼土　炭化物　柱痕　貼床　黒色処理　施釉

●土器・瓦　■石器・石製品　▲土製品　△金属製品　□自然遺物　○拓本記録土器　---一---硬化面

4　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

5　遺構及び遺物についての実測図版の作成方法及び遺構一覧表・遺物観察表の記載方法については，次のとおりである。

(1)　遺跡の全体図は縮尺400分の1，遺構の平面図は原則的に60分の1に縮尺して掲載した。

(2)　遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もある。

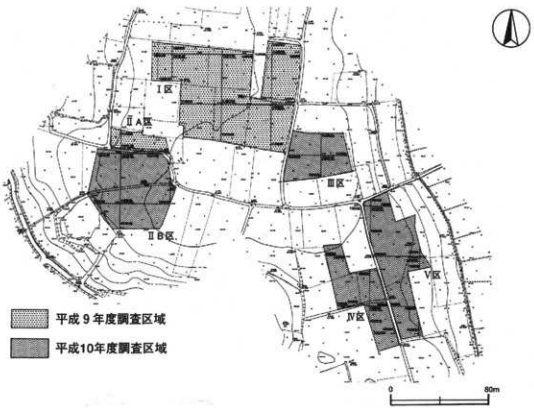
(3)　「主軸方向」は，竈を持つ竪穴住居跡については竈を通る軸線とし，その主軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。（例　N－10°－E，　N－10°－W）

他の遺構については，長軸（径）方向とみなした。なお，［　］を付したものは推定である。

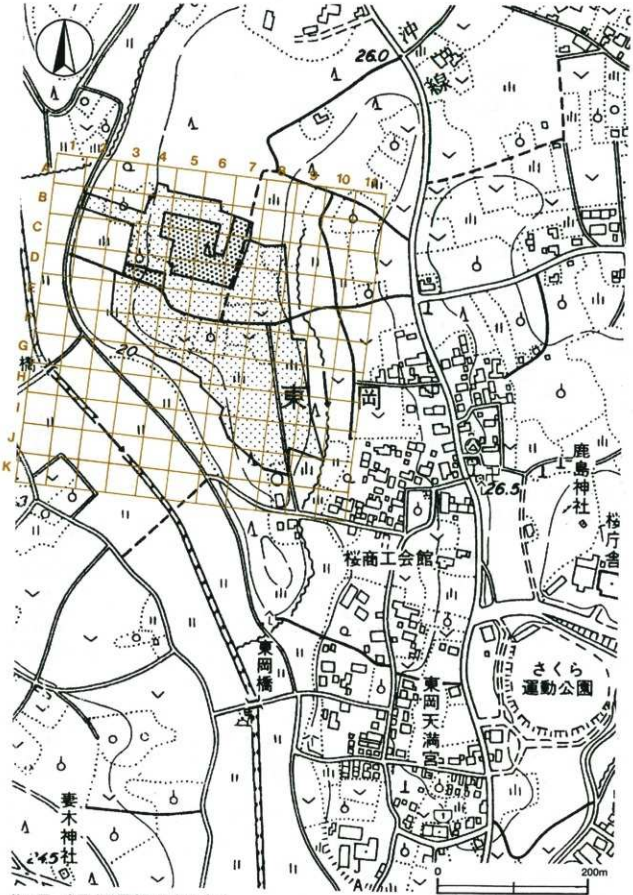
(4)　土器の計測値は，A－口径，B－器高，C－底径，D－高台（脚）径，E－高台（脚）高，F－つまみ径，G－つまみ高とし，単位はcmである。

(5)　遺構及び遺物の計測値は，現存値は（　）で，推定値は［　］を付して示した。

(6)　遺物観察表の備考の欄は，残存率，実測番号（P，Qほか），出土位置，その他必要と思われる事項を記した。



第１図　中原遺跡調査区設定図（１）



第２図　中原遺跡調査区設定図（２）

抄　　録

ふ り が な	なかねこんだいとくていとちくかくせいりじぎょうちないまいそうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書　　名	中根・金山台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書
副 著 名	中原遺跡1
巻　　次	Ⅱ
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第155集
著 者 名	成 尚 一 也
編 集 機 関	財団法人　茨城県教育財団
所　在　地	〒310－0911　茨城県水戸市見和1丁H356番地の2　TEL029－225－6587
発 行 機 関	財団法人　茨城県教育財団
所　在　地	〒310－0911　茨城県水戸市見和1丁H356番地の2　TEL029－225－6587
発　行　日	2000（平成12）年3月21日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
中原遺跡（なかはらいせき）	茨城県（いばらきけん）つくば市（つくばし）大字（おおあざ）東岡字（ひがしおかあざ）中原（なかはら）187番地（ばんち）ほか	08220－222	36度5分38秒	140度7分29秒	23.4m～25.3m	19970801～19980331	7,472㎡	中根・金田台特定土地区画整理事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中原遺跡	集落跡	旧石器	石器集中地点　4か所	ナイフ形石器，彫刻刀形石器，掻器，抉入石器，石核，剥片	奈良時代から平安時代前期の集落跡が中心。ほとんどの住居跡が北壁に竈を持ち，竈の両側に棚を持つものもある。掘立柱建物跡は調査区南側に集中し，堀によって区画された地域に並んで確認されている。河内郡衙跡（推定地）や郡寺との関連性が高い集落跡と思われる。
		縄文	陥し穴　3基	縄文土器片，石鏃，剥片	
		奈良・平安	竪穴住居跡　74軒 掘立柱建物跡　27棟 堀　1条 土坑　73基	土師器（黒書土器） 須恵器（墨書土器，刻書土器，円面硯） 灰釉・緑釉陶器 瓦 土製品（紡錘車，支脚） 石製品（砥石） 石器（紡錘車，支脚） 鉄製品（鉄鏃，刀子，鉄斧，釘，火打金，金鋌，金床，手鎌，鬥） 鍛冶関連遺物（羽口，椀状滓，鉄滓） 漆膜と漆紙（曲げ物に詰められていた漆の皮膜と蓋として使われた紙）	
		中・近世	掘立柱建物跡　3棟 土坑　41基 溝　4条	土師質土器，陶器片，煙管，古銭	
	その他	時期不明	土坑　227基	土師質土器	

目　　次

―上　巻―

序
例　言
凡　例
抄　録
第１章　調査経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査経過 …… 1
第２章　位置と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 4
第３章　調査の成果 …… 9
　第１節　遺跡の概要 …… 9
　第２節　基本層序 …… 9
　第３節　遺構と遺物 …… 12
　　1　旧石器時代の遺構と遺物 …… 12
　　(1)　調査の概要と方法 …… 12
　　(2)　出土遺物 …… 13
　　ア　第１調査区の出土遺物 …… 13
　　イ　第２調査区の出土遺物 …… 14
　　ウ　その他の出土遺物 …… 18
　　2　縄文時代の遺構と遺物 …… 30
　　(1)　陥し穴 …… 30
　　(2)　遺構に伴わない遺物 …… 32
　　3　奈良・平安時代の遺構と遺物 …… 34
　　(1)　竪穴住居跡 …… 34

―下　巻―

　　(2)　掘立柱建物跡 …… 285
　　(3)　堀 …… 342
　　(4)　土坑 …… 353
　　(5)　遺構に伴わない遺物 …… 380
　　4　その他の遺構と遺物 …… 382
　　(1)　掘立柱建物跡 …… 382
　　(2)　土坑 …… 386
　　(3)　溝 …… 411

(4) 遺構に伴わない遺物 ……413
第4節 まとめ ……415
中原遺跡遺構一覧 ……425
付章 中原遺跡の自然科学分析 ……パリノ・サーヴェイ株式会社
1 ローム層の層序確立のための火山ガラス比分析および重鉱物分析
2 中原遺跡から出土した炭化材・種実遺体の同定
茨城県中原遺跡出土の漆膜について ……吉田生物研究所
写真図版

挿図目次

第1図 中原遺跡調査区設定図（1）
第2図 中原遺跡調査区設定図（2）
第3図 周辺遺跡位置図 ……8
第4図 基本土層図（1）……10
第5図 基本土層図（2）……11
第6図 旧石器調査区設定図 ……13
第7図 第1調査区遺物出土分布図 ……13
第8図 第2調査区遺物出土分布図（器種）……15
第9図 第2調査区遺物出土分布図（石材）……17
第10図 旧石器時代の遺物実測図（1）……20
第11図 旧石器時代の遺物実測図（2）……21
第12図 旧石器時代の遺物実測図（3）……22
第13図 旧石器時代の遺物実測図（4）……23
第14図 旧石器時代の遺物実測図（5）……24
第15図 旧石器時代の遺物実測図（6）……25
第16図 第1号陥し穴実測図 ……30
第17図 第2号陥し穴実測図 ……31
第18図 第3号陥し穴実測図 ……32
第19図 縄文時代の遺物実測図（土器・石器）……32
第20図 第1号住居跡実測図 ……35
第21図 第1号住居跡出土遺物実測図 ……36
第22図 第2号住居跡実測図 ……38
第23図 第2号住居跡出土遺物実測図 ……39
第24図 第3号住居跡実測図 ……41
第25図 第3号住居跡出土遺物実測図 ……42
第26図 第4号住居跡実測図 ……44
第27図 第4号住居跡出土遺物実測図 ……45
第28図 第5号住居跡実測図 ……47
第29図 第5号住居跡掘り方実測図 ……48
第30図 第5号住居跡出土遺物実測図（1）……49
第31図 第5号住居跡出土遺物実測図（2）……50
第32図 第5号住居跡出土遺物実測図（3）……52
第33図 第6号住居跡実測図 ……54
第34図 第6号住居跡出土遺物実測図（1）……56
第35図 第6号住居跡出土遺物実測図（2）……57
第36図 第7号住居跡実測図 ……59
第37図 第7号住居跡出土遺物実測図（1）……61
第38図 第7号住居跡出土遺物実測図（2）……62
第39図 第7号住居跡出土遺物実測図（3）……63
第40図 第8号住居跡実測図 ……65
第41図 第8号住居跡出土遺物実測図（1）……67
第42図 第8号住居跡出土遺物実測図（2）……69
第43図 第9号住居跡実測図 ……71
第44図 第9号住居跡出土遺物実測図 ……73
第45図 第11号住居跡実測図 ……75
第46図 第11号住居跡出土遺物実測図 ……76
第47図 第13号住居跡実測図 ……78
第48図 第13号住居跡出土遺物実測図 ……80
第49図 第14号住居跡実測図 ……82
第50図 第14号住居跡出土遺物実測図 ……84
第51図 第15号住居跡実測図 ……85
第52図 第15号住居跡出土遺物実測図 ……87

第53図　第16号住居跡実測図 ……89
第54図　第16号住居跡出土遺物実測図（1）……91
第55図　第16号住居跡出土遺物実測図（2）……92
第56図　第16号住居跡出土遺物実測図（3）……93
第57図　第17号住居跡実測図 ……95
第58図　第17号住居跡出土遺物実測図 ……96
第59図　第19号住居跡実測図 ……98
第60図　第19号住居跡出土遺物実測図 ……100
第61図　第20号住居跡実測図 ……102
第62図　第20号住居跡出土遺物実測図 ……103
第63図　第21号住居跡実測図 ……105
第64図　第21号住居跡出土遺物実測図（1）……107
第65図　第21号住居跡出土遺物実測図（2）……108
第66図　第22号住居跡実測図 ……110
第67図　第22号住居跡出土遺物実測図（1）……112
第68図　第22号住居跡出土遺物実測図（2）……113
第69図　第23号住居跡実測図 ……116
第70図　第23号住居跡出土遺物実測図 ……117
第71図　第24号住居跡実測図 ……120
第72図　第24号住居跡出土遺物実測図 ……121
第73図　第25号住居跡実測図 ……122
第74図　第25号住居跡出土遺物実測図 ……122
第75図　第26・27号住居跡実測図 ……123
第76図　第26号住居跡出土遺物実測図 ……124
第77図　第27号住居跡出土遺物実測図 ……124
第78図　第28号住居跡実測図 ……126
第79図　第28号住居跡出土遺物実測図 ……127
第80図　第29号住居跡実測図 ……128
第81図　第29号住居跡出土遺物実測図 ……129
第82図　第30号住居跡実測図 ……131
第83図　第30号住居跡出土遺物実測図 ……131
第84図　第31号住居跡実測図 ……133
第85図　第31号住居跡出土遺物実測図 ……134
第86図　第32号住居跡実測図（1）……137
第87図　第32号住居跡実測図（2）……138
第88図　第32号住居跡出土遺物実測図（1）……140
第89図　第32号住居跡出土遺物実測図（2）……141
第90図　第35号住居跡実測図 ……143
第91図　第35号住居跡出土遺物実測図 ……144
第92図　第36号住居跡実測図 ……146
第93図　第36号住居跡出土遺物実測図 ……147
第94図　第38号住居跡実測図 ……150
第95図　第38号住居跡出土遺物実測図 ……151
第96図　第39A・39B号住居跡実測図 ……154
第97図　第39A号住居跡出土遺物実測図（1）…156
第98図　第39A号住居跡出土遺物実測図（2）…157
第99図　第39A号住居跡出土遺物実測図（3）…158
第100図　第39A号住居跡出土遺物実測図（4）…159
第101図　第41号住居跡実測図 ……163
第102図　第41号住居跡竈実測図 ……164
第103図　第41号住居跡出土遺物実測図（1）……165
第104図　第41号住居跡出土遺物実測図（2）……166
第105図　第44号住居跡実測図 ……168
第106図　第44号住居跡竈実測図 ……169
第107図　第44号住居跡出土遺物実測図 ……171
第108図　第45号住居跡実測図 ……173
第109図　第45号住居跡出土遺物実測図 ……174
第110図　第46号住居跡実測図 ……175
第111図　第46号住居跡出土遺物実測図 ……176
第112図　第47号住居跡実測図 ……178
第113図　第47号住居跡竈実測図 ……179
第114図　第47号住居跡出土遺物実測図 ……180
第115図　第48号住居跡実測図 ……182
第116図　第48号住居跡出土遺物実測図（1）……183
第117図　第48号住居跡出土遺物実測図（2）……184
第118図　第49号住居跡実測図 ……186
第119図　第49号住居跡出土遺物実測図 ……186
第120図　第50号住居跡実測図 ……188
第121図　第50号住居跡出土遺物実測図 ……189
第122図　第51号住居跡実測図 ……190
第123図　第51号住居跡出土遺物実測図 ……190
第124図　第53号住居跡実測図 ……192
第125図　第53号住居跡出土遺物実測図 ……193
第126図　第54号住居跡実測図（1）……196
第127図　第54号住居跡実測図（2）……197
第128図　第54号住居跡出土遺物実測図 ……198

第129図　第56号住居跡実測図 ……200
第130図　第56号住居跡竈実測図 ……201
第131図　第56号住居跡出土遺物実測図（1）……204
第132図　第56号住居跡出土遺物実測図（2）……206
第133図　第56号住居跡出土遺物実測図（3）……207
第134図　第58号住居跡実測図（1）……210
第135図　第58号住居跡実測図（2）……211
第136図　第58号住居跡出土遺物実測図（1）……213
第137図　第58号住居跡出土遺物実測図（2）……214
第138図　第62号住居跡実測図 ……215
第139図　第62号住居跡出土遺物実測図 ……216
第140図　第63号住居跡実測図 ……217
第141図　第63号住居跡出土遺物実測図 ……218
第142図　第64号住居跡実測図 ……220
第143図　第64号住居跡出土遺物実測図 ……221
第144図　第65号住居跡実測図 ……222
第145図　第65号住居跡出土遺物実測図（1）……224
第146図　第65号住居跡出土遺物実測図（2）……225
第147図　第66号住居跡実測図 ……227
第148図　第66号住居跡出土遺物実測図 ……228
第149図　第67号住居跡実測図 ……229
第150図　第67号住居跡出土遺物実測図（1）……231
第151図　第67号住居跡出土遺物実測図（2）……232
第152図　第68・69号住居跡実測図 ……233
第153図　第68号住居跡出土遺物実測図 ……235
第154図　第69号住居跡出土遺物実測図 ……236
第155図　第70号住居跡実測図 ……238
第156図　第70号住居跡出土遺物実測図 ……239
第157図　第71号住居跡実測図 ……240
第158図　第71号住居跡出土遺物実測図 ……241
第159図　第72号住居跡実測図 ……242
第160図　第72号住居跡出土遺物実測図 ……243
第161図　第73号住居跡実測図 ……244
第162図　第73号住居跡出土遺物実測図 ……244
第163図　第74号住居跡実測図 ……246
第164図　第74号住居跡出土遺物実測図 ……248
第165図　第75号住居跡実測図 ……250
第166図　第75号住居跡出土遺物実測図 ……251
第167図　第76号住居跡実測図 ……252
第168図　第76号住居跡出土遺物実測図 ……254
第169図　第79号住居跡実測図 ……256
第170図　第79号住居跡出土遺物実測図（1）……257
第171図　第79号住居跡出土遺物実測図（2）……258
第172図　第80号住居跡実測図 ……260
第173図　第80号住居跡出土遺物実測図 ……260
第174図　第81号住居跡実測図 ……262
第175図　第81号住居跡出土遺物実測図 ……263
第176図　第82号住居跡実測図 ……265
第177図　第82号住居跡出土遺物実測図 ……266
第178図　第84A・84B号住居跡実測図 ……268
第179図　第84A号住居跡出土遺物実測図 ……268
第180図　第84B号住居跡出土遺物実測図……269
第181図　第85号住居跡実測図 ……271
第182図　第85号住居跡出土遺物実測図 ……272
第183図　第86号住居跡実測図 ……274
第184図　第86号住居跡出土遺物実測図 ……275
第185図　第87号住居跡実測図 ……277
第186図　第87号住居跡出土遺物実測図 ……278
第187図　第88・89号住居跡実測図 ……279
第188図　第88号住居跡出土遺物実測図 ……280
第189図　第89号住居跡出土遺物実測図 ……280
第190図　第90号住居跡実測図 ……282
第191図　第90号住居跡出土遺物実測図 ……283

表　目　次

表1　周辺遺跡一覧表 ……7
表2　遺構に伴わない旧石器時代の遺物 ……12
表3　第2調査区出土遺物 ……14
表4　第2調査区出土遺物(第1号石器集中地点)…16
表5　第2調査区出土遺物(第2号石器集中地点)…16
表6　第2調査区出土遺物(第3号石器集中地点)…18
表7　第2調査区出土遺物(第4号石器集中地点)…19

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経過

茨城県では，世界に開かれた国際交流の中心，世界の科学技術をリードする研究開発の拠点として，21世紀の新しい町づくりをつくば市において進めている。その一環として取り組んでいるのが，西暦2005年開業をめざした常磐新線の建設とそれに伴う沿線開発で，中根・金田台地区については，住宅・都市整備公団つくば開発局（平成9年10月から住宅・都市整備公団茨城地域支社に，平成11年10月から都市基盤整備公団茨城地域支社に名称を変更している。）を事業主体として，土地区画整理事業が進められている。

平成6年11月18日，住宅・都市整備公団つくば開発局は茨城県教育委員会あてに，中根・金田台特定土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これに対して茨城県教育委員会は平成7年5月15日から6月8日にかけて現地踏査を，平成7年10月9日から13日にかけて試掘調査を行い，金田台地区において中原遺跡の存在を確認し，平成7年12月28日，住宅・都市整備公団つくば開発局あてに，その旨回答した。平成9年3月11日，住宅・都市整備公団つくば開発局から茨城県教育委員会あてに，中原遺跡（17,861㎡）の取り扱いについて協議があり，文化財保護の立場から再三協議を行った。その結果，平成9年3月17日，茨城県教育委員会は住宅・都市整備公団つくば開発局あてに，中原遺跡を記録保存とする旨回答し，埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。そこで，住宅・都市整備公団つくば開発局から財団法人茨城県教育財団に中原遺跡の発掘調査の依頼があり，茨城県教育財団は発掘調査の委託契約を結び，平成9年8月1日から発掘調査を実施することとなった。平成9年12月1日，茨城県教育財団から茨城県教育委員会あてに，中原遺跡の発掘調査計画の変更協議があり，平成9年12月8日，茨城県教育委員会から住宅・都市整備公団茨城地域支社あてに，発掘調査計画の変更について協議した結果，中原遺跡の調査面積を10,389㎡減じ，7,472㎡に変更した。同日，茨城県教育委員会から茨城県教育財団あてに，中原遺跡の発掘調査計画変更について回答があった。

第2節　調査経過

中原遺跡の発掘調査はつくば中根事務所が担当した。平成9年度のつくば中根事務所においては，平成8年度からの調査が継続していた中谷津遺跡（中根地区）と，新規の中原遺跡（金田台地区）の2遺跡の調査を行う予定であったため，4月から7月までは中谷津遺跡の遺構調査と中原遺跡の諸準備を並行して行った。中原遺跡の調査経過について，準備段階を含めて，その概要を記述する。

4月　発掘調査を開始するための諸準備を行う。8日に調査区内の現地踏査を行う。10日に住宅・都市整備公団と平成9年度調査区について打ち合わせを行う。10，14，24日に調査器材を搬入する。

5月　29日に住宅・都市整備公団の立ち会いのもと，調査区域を確認する。

6月　19日に伐開区域の縄張りを行い，23日から業者による伐開作業が始まる。

7月　7日に伐開作業が終了する。同日から14日まで補助員を投入して試掘を行う。17日に表土除去のための搬送路について，地権者と交渉する。23日に方眼杭打ち測量の打ち合わせを行う。

8月　1日と2日に補助員休憩所の設置を行う。同日から補助員を投入して，調査区域の除草と杭打ちを行

う。18日に調査区の西側から重機による表土除去及び遺構確認作業を行う。

9月　26日に調査区の表土除去と遺構確認作業が終了し，竪穴住居跡256軒，掘立柱建物跡17棟，溝36条，土坑1526基を確認した。29日に方眼杭打ち作業を行う。同日に遺構確認状況の写真撮影を行う。

10月　1日から調査Ⅰ区の遺構調査に入り，北側から調査を開始した。貼床を施した竪穴住居跡の掘り方の調査や棚を持った竪穴住居跡の調査も進められ，30日までに竪穴住居跡15軒の調査を終了した。

11月　住宅・都市整備公団との話し合いで，今年度は調査Ⅰ区と調査ⅡA区を調査対象地区とし，竪穴住居跡97軒，掘立柱建物跡6棟，土坑454基，溝18条の調査を行うことになる。27日までに竪穴住居跡10軒，土坑25基，溝1条の調査を終了した。

12月　24日までに竪穴住居跡24軒，土坑6基，溝1条の調査を終了した。

1月　6日から調査Ⅰ区と調査ⅡA区の遺構調査を並行して行った。30日までに竪穴住居跡20軒，掘立柱建物跡4棟，土坑10基，溝1条の調査を終了した。

2月　12日に国立歴史民俗博物館の平川南教授を招き，つくば島名事務所と合同で班内研修会を開く。23日に隣接する芝畑への砂埃対策として，防塵工事を行う。26日までに竪穴住居跡3軒，掘立柱建物跡14棟，堀1条，土坑159基，溝1条の調査を終了した。

3月　4日の午前中に航空写真撮影を実施し，午後から報道関係者への公開を行った。7日に現地説明会を開催し，遺構と遺物を一般に公開した。9日から遺構調査と並行して，調査Ⅰ区とⅡA区の旧石器の遺物が数多く出土した地点を中心に，グリッド法による調査を行った。19日までに調査Ⅰ区と調査ⅡA区の遺構調査を終了し，竪穴住居跡2軒，掘立柱建物跡12棟，土坑200基，旧石器遺物集中地点4か所の調査を終了した。最終的な調査遺構数は，竪穴住居跡74軒，掘立柱建物跡30棟，堀1条，陥し穴3基，土坑341基，溝4条となった。当初の確認数と差ができた原因は，重複していると考えられた竪穴住居跡が大形の竪穴住居跡であったり，土坑として調査したものが掘立柱建物跡になったためである。20日に出土遺物を整理センター国田分館へ搬出し，事務所並びに休憩所等の整理，簡単な埋め戻しなどの安全対策を行い，平成9年度の現地調査を終了した。

第2章 位 置 と 環 境

第1節 地理的環境

中原遺跡は，茨城県つくば市大字東岡字中原187番地ほかに所在する。

つくば市は，茨城県の南西部に位置し，北は真壁郡明野町，同郡真壁町，新治郡八郷町に，東は新治郡新治村，土浦市に，南は牛久市，稲敷郡茎崎町，筑波郡伊奈町，同郡谷和原村に，西は水海道市，結城郡石下町，同郡千代川村，下妻市に接している。

つくば市は，昭和62年11月に，筑波郡谷田部町，同郡豊里町，同郡大穂町，新治郡桜村が合併して誕生した。当遺跡は旧桜村に属していた。この地域は昔から自然に恵まれ，産業の中心は農業であったが，昭和40年代以降に，国際的な研究機関の中心である「研究学園都市」として，大きな発展を遂げた。現在も常磐新線や周辺地域の開発と整備が進められ，首都圏との結びつきはますます強くなっている。

つくば市は，東方約5kmには霞ヶ浦が，北端には筑波山が位置しており，筑波山の南西端を南下する桜川と，市の西側を南下する小貝川によって挟まれた台地上に位置している。この台地は，筑波・稲敷台地と呼ばれ，標高25m～26mで，ほぼ平坦である。この台地の両端を流れる桜川と小貝川によって大きく開析された流域は，標高約5mほどの沖積低地になっており，台地との標高差は約20mになっている。また，この二つの河川の間を花室川，蓮沼川，東谷田川，西谷田川などの中小規模の河川が流れており，台地の浅い開析が進み，谷津や低地が細長く入り込んでいる。遺跡の北側と西側（花室川対岸）には標高約25mの舌状台地が南に延び，南側は花室川の標高約20mほどの沖積低地で，遺跡とは約5mの標高差がある。

筑波・稲敷台地は，千葉県北部から茨城県南部に広がる常総台地の一部であるが，地質的には，新生代第四紀洪積世に作られた地層が見られる。下層は竜ヶ崎層と呼ばれる砂層・砂礫層が主体をなし，その上に板橋層または常総粘土層と呼ばれる灰白色粘土層（0.3～5.0m），その上に関東ローム層（0.5～2.5m）が堆積し，最上部は腐植土層となっている。特に，関東ローム層全体から見ると，新期ロームに属し，武蔵野ローム，立川ロームなどが堆積しており，軽石層の分布をみると，富士・箱根火山群の活動に由来するものと考えられる。

当遺跡は，つくば市の東部，常磐自動車道の桜上浦インターチェンジから北西に約5.2km，土浦北インターチェンジから南西に約6.1kmの地点に所在し，つくば市立桜中学校から西に約700m離れた，花室川の低地を望む左岸の舌状台地上，標高23.4～25.3mに立地している。この舌状台地は，南北に約950m，東西に約305mあって，南側に向かって張り出している。そして，遺跡の西側と東側には谷津が細長く入り込んでいる（第2図）。今回調査した調査Ⅰ区は平坦な台地の中央部にあたり，調査ⅡA区は調査Ⅰ区から花室川に向かって緩やかに低くなっていく台地の西側にあたる（第1図）。

当遺跡と周辺の土地利用の現状は，台地上は主として畑地及び平地林となっており，花室川流域の沖積低地は水田として利用されている。

参考文献

・大山年次，蜂須紀夫『茨城県　地学のガイド』　コロナ社　1986年11月

・蜂須紀夫，大森昌衛　『茨城の地質をめぐって』　築地書館　1979年9月

第２節　歴史的環境

つくば市には，縄文時代から近世にかけての遺跡が数多く存在し，現在220か所以上の遺跡が確認されている。また，当遺跡と桜川を挟んで隣接する新治郡新治村にも現在106か所以上の遺跡が確認されている。桜川，花室川，蓮沼川，東谷田川，西谷田川，小貝川などの河川流域は，古代から人々が生活を営む場としては絶好の舞台となってきたようである。特に，中原遺跡周辺に目を向けると，桜川左岸（つくば市北東部，新治村）の台地上には50か所以上の遺跡が，桜川右岸（つくば市東部）の台地上には40か所以上の遺跡が所在しており，遺跡が集中していることがわかる。ここでは，中原遺跡周辺（つくば市の北東部から南東部，新治村，土浦市北西部）の主な遺跡について，時代を追って述べることにする（第３図，表１）。

人類の誕生は今から300万年以上前といわれるが，当地域での人類の痕跡が明らかになるのは，関東ローム層と呼ばれる火山灰の降灰時期（今から約５万年前から１万５千年前）以降である。これまでの発掘調査で，旧石器時代の遺構は発見例がないものの，生活の道具である石器は数多く出土している。桜川左岸の高岡根遺跡〈14〉から尖頭器と剥片が，大畑本田遺跡〈33〉から有舌尖頭器，スクレイパー，剥片が出土している。どちらも１万３千年前から１万２千年前のものと考えられる。つくば市北条の中台遺跡からは頁岩のナイフ形石器，頁岩と安山岩の剥片が出土している。このナイフ形石器は杉久保型ナイフ形石器に近いもので，後期旧石器時代のナイフ形石器文化第Ⅲ期以降のものとみられている。土浦市今泉の原出口遺跡からは112点の石器が出土している。安山岩の尖頭器が３点，チャートのナイフ形石器が１点，４点の石核は安山岩が２点，瑪瑙が１点，頁岩が１点である。残り95％は安山岩や頁岩，瑪瑙の剥片であった。尖頭器を中心とした石器制作遺跡と考えられている。桜川右岸では，つくば市前野の前野遺跡から７点の尖頭器が出土している。内訳は安山岩が４点，黒曜石が２点，チャートが１点である。花室川左岸の柴崎遺跡〈18〉からは６点の石器が出土している。頁岩のナイフ形石器が１点，黒曜石と安山岩と瑪瑙の剥片が１点ずつ，チャートの有舌尖頭器と石核がそれぞれ１点である。蓮沼川左岸の神田遺跡〈25〉からはナイフ形石器６点，スクレイパー１点，尖頭器３点，剥片12点の合計22点が出土している。材質は頁岩が多く，ナイフ形石器５点，剥片９点が頁岩である。他はナイフ形石器１点がチャート，スクレイパー１点が黒曜石，尖頭器３点が安山岩，剥片３点が黒曜石である。遺物の出土例は，近年の発掘調査によって年々増加しており，表採や表土中からのものが多いが，貴重な資料がみられる。

縄文時代になると，各河川流域で遺跡の存在が確認されている。縄文早期から前期にかけて，地球の温暖化によって海面が上昇していったことから，海岸線が後退し（海進），内陸深く入り込むこととなった。そのために桜川と花室川流域では多くの縄文時代の遺跡が存在するようになり，現在約40遺跡が判明している。桜川左岸には，小田田向遺跡（後期）〈１〉，小高天神遺跡（早期）〈７〉，田宮梶の宮遺跡（中期～後期）〈12〉，大畑新田遺跡（前期～後期）〈15〉，大畑本田遺跡（中期），大畑本田貝塚（中期～後期）〈34〉，藤沢東町遺跡（前期～中期）〈37〉，北坂田北部貝塚（前期）〈40〉，上坂田寺裏貝塚（前期）〈41〉などが確認されている。桜川の右岸には，谷田部才十郎遺跡（中期）〈47〉，大山遺跡（早期）〈16〉，天神遺跡（中期）〈17〉，柴崎遺跡（早期～前期，後期），旭台貝塚（後期～晩期）〈49〉，中谷津遺跡（後期～晩期）〈19〉，西坪遺跡（中期～後期）〈21〉，花室遺跡（中期～後期）〈52〉などが確認されている。特に，桜川と花室川流域の台地には貝塚が多く所在しており，国指定史跡の上高津貝塚〈57〉もその一つである。上高津貝塚は縄文時代後期から晩期を中心とした遺跡で，堀之内２式，加曽利Ｂ１～３式，安行１～３ｂ式といった型式の土器が出土している。貝の種類は，ヤマトシジミ，ハマグリ，アカニシ等汽水性の貝と鹹水性の貝が一緒に出土している。これらの遺跡の中には湮滅した遺跡もあるが，まだ学術調査が行われていない遺跡も多く，今後の調査が待たれる。

弥生時代の遺跡は確認されている遺跡が少ないのが現状である。桜川流域では10遺跡以上が確認されているが，発掘調査が実施されていないものがほとんどである。当時の生活の様子を解き明かすためにも，より多くの資料収集が今後の課題であろう。桜川左岸の藤沢山後遺跡〈35〉，藤沢北斗遺跡〈36〉，藤沢南原遺跡〈39〉などで表採ではあるが弥生土器片が採集されている。中台遺跡において後期後半の竪穴住居跡10軒が，原出口遺跡をはじめとする原田北遺跡群において竪穴住居跡183軒が確認されている。これらの多くが洪積台地上に立地しており，縄文時代の遺跡と複合している。

当遺跡周辺で数多く確認されているのが，古墳時代の遺跡である。特に，花室川と桜川流域では約80遺跡が確認されている。当時，この地方にも力を持った豪族が出現したことを示すと同時に，多くの集落が形成され，人々が生活していたことを表している。桜川左岸では，中台遺跡で100軒の竪穴住居跡，65基の古墳，2基の方形周溝墓が検出されたのを始め，円墳1基と横穴式石室が露出していた小田古墳群〈30〉，6世紀初めから7世紀末までの竪穴住居跡9軒を検出した小出橋遺跡〈2〉，前方後円墳1基と円墳9基からなり，彩色人物埴輪・円筒埴輪が出土した高崎山古墳群〈31〉，前方後円墳1基と円墳6基からなり，人物埴輪が出土した田宮古墳群遺跡〈13〉，桜川を望む台地上6㎞にわたり一大古墳群を形成している上坂田古墳群〈43〉と直圏文鏡が出土した坂田古墳群〈44〉などが確認されている。特に，1983年に調査された武者塚古墳〈42〉では，石室内から大刀，青銅製の杓，銀製の帯状透彫金具，頭髪，鬢が出土している。桜川右岸では，玉取古墳群〈46〉をはじめ，円筒埴輪・人物埴輪・動物埴輪が出土した滝の台古墳群〈48〉，円墳2基から埴輪片・石棺破片が出土している被甸古墳群〈50〉，前方後円墳2基と円墳1基からなる松塚古墳群〈55〉，古墳時代後期の方墳1基と楕円形の古墳1基からなる東古墳群〈56〉などがある。また，蓮沼川左岸の神田遺跡は古墳時代前期から後期までの竪穴住居跡18軒が確認され，前期の南関東系の土師器甕が出土している。

奈良・平安時代になると，律令制度の確立に伴い，桜地区は河内郡菅田郷に所属するようになり，のち12世紀にかけて，田中庄と呼ばれることになる。この時代の遺跡としては，花室川と桜川流域において32遺跡が確認されている。注目したいのは，当遺跡に隣接していた九重廃寺跡（東岡遺跡）〈20〉と西坪遺跡である。九重廃寺は昔から礎石，瓦塔，蔵骨器などが出土しており，旧河内郡の郡寺として知られていた。1984年には桜村教育委員会から委託された筑波大学によって部分的な発掘調査がなされ，東岡遺跡として報告されている。検出された遺構は，基壇の一部とその周溝，井戸であり，出土した遺物は，土師器片，須恵器片，軒丸瓦，軒平瓦，丸瓦，平瓦などで，瓦は筑波廃寺系と結城廃寺系のものと考えられる。西坪遺跡では，1959年に中学校校庭の拡張工事に伴い表土を除去したところ，倉庫跡と考えられる3間4間の総柱の掘立柱建物跡3棟と炭化米が多量に出土している。九重廃寺が隣接し，立地している台地の下に条里遺跡も存在することから，旧河内郡の郡衙跡と推定されている。このような環境の中，この地域は当時の地方政治・文化の中心として栄えていたことが推測される。両遺跡とも詳しい発掘調査は行われておらず，今後の調査研究が待たれるところである。桜川左岸には，つくば市平沢の筑波郡衙及び郡寺とされる平沢官衙遺跡や筑波廃寺（中台廃寺）跡が所在している。律令政治が実施され，地方に国・郡・里制が成立した当時の様子を知るための大きな手がかりになっている。他にも2軒の竪穴住居跡から手鎌が検出した小出橋遺跡，8世紀代の九重廃寺系の軒平瓦と筑波廃寺系の軒丸瓦が出土した下大島遺跡〈11〉などが確認されている。桜川右岸では，条里遺跡で既に湮滅した本田遺跡〈22〉と上ノ宮条里遺跡〈23〉，947年に平将門の次男将氏の娘安寿姫が建立したと伝えられている般若寺跡〈24〉などがあげられる。花室川左岸では，160軒以上の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出された柴崎遺跡がある。また，当遺跡から出土しているたくさんの須恵器の中には，新治村の小高，東城寺，小野地区に広がっている須恵器窯から供給されたと考えられるものが多い。小野須恵器窯跡〈3〉，東城寺須恵器遺跡〈4〉，

東城寺桑木須恵器窯跡〈5〉，東城寺寄居前須恵器窯跡〈6〉，小高須恵器窯跡〈8〉，小高村内須恵器窯跡〈9〉，田宮須恵器窯跡〈10〉など，常陸国における一大窯業地として栄えていたこれらの窯跡と，官衙や寺院，その周辺集落との供給関係の解明は，今後の調査の進展にかかっている。

中世以降の遺跡としては約20遺跡が所在している。その多くが城館跡であり，他は寺院遺跡が3遺跡，中世から近世にかけての墓城跡などが2遺跡で確認されている。鎌倉幕府の成立後に築かれた多くの城跡は，小田氏とその勢力によるものである。小田氏の支配下となった近隣一帯には，小田城跡〈29〉を中心に，桜川左岸では，田土部城跡〈32〉，藤沢城跡〈38〉などが，桜川右岸には，方穂故城跡〈45〉，金田城跡〈51〉，花室城跡〈53〉，上ノ室城跡〈54〉などがある。また，筑波山の南，三村山麓一帯には中世寺院群があり，尼寺入廃寺跡〈26〉，三村山清冷院極楽寺跡〈27〉，常願寺廃寺跡〈28〉の調査によって土器，陶磁器，銅製の香炉蓋，三巴文軒瓦などが出土している。特に，ロストル式の瓦焼窯や石組遺構が検出され，瓦葺建物が多く存在したことを示していると同時に，中世的宗教思想と技術様式を表す貴重な資料となっている。戦国の世から江戸時代において，当地域は佐竹氏の支配下を経て，多くが土浦藩に属すことになる。特に金田台地区は明治4年（1871年）の廃藩置県に至るまでその支配下に属した。

参考文献

・茨城県教育庁文化課　「茨城県遺跡地図」　茨城県教育委員会　1990年3月
・桜村史編さん委員会　『桜村史　上巻』　桜村教育委員会　1982年3月
・大穂町史編纂委員会　「大穂町史」　つくば市大穂地区教育事務所　1989年3月
・筑波町史編纂専門委員会　「筑波町史　上巻」　つくば市　1988年9月
・中山信名　『新編常陸国誌（宮崎報恩会版）』　崙書房　1969年11月
・茨城県史編集委員会　『茨城県史　原始古代編』　茨城県　1985年3月
・茨城県史編さん第一部会　原始古代専門委員会　『茨城県史料　考古資料編　先土器・縄文時代』
茨城県　1979年3月
・茨城県史編集会　茨城県立歴史館　『茨城県史料　考古資料編　奈良・平安時代』　茨城県
1995年3月
・佐久間好雄　他　『図説　茨城県の歴史』　河出書房新社　1995年11月
・茨城県教育財団　「研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅰ）
柴崎遺跡Ⅰ・Ⅱ－1区」　『茨城県教育財団文化財調査報告第54集』　1989年9月
・茨城県教育財団　「研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅱ）
柴崎遺跡Ⅱ区　中塚遺跡」　『茨城県教育財団文化財調査報告第63集』　1991年3月
・茨城県教育財団　「研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅳ）
柴崎遺跡Ⅱ区・Ⅲ区」　『茨城県教育財団文化財調査報告第93集』　1994年9月
・茨城県教育財団　「土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　原出口遺跡」
『茨城県教育財団文化財調査報告第94集』　1995年3月
・茨城県教育財団　「（仮称）北条住宅団地建設工事地内埋蔵文化財調査報告書　中台遺跡」
『茨城県教育財団文化財調査報告第102集』　1997年12月
・茨城県教育財団　「（仮称）葛城地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　神田遺跡」
『茨城県教育財団文化財調査報告第121集』　1997年3月
・茨城県教育財団　「（仮称）葛城地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　神田遺跡」
『茨城県教育財団文化財調査報告第134集』　1998年3月

表1　周辺遺跡一覧表（●は奈良・平安時代を含む遺跡を，■はその他の時代の遺跡を示す。）

番号	遺跡名	遺跡番号	時代						番号	遺跡名	遺跡番号	時代					
			旧	縄	弥	古	奈・平	中近				旧	縄	弥	古	奈平	中近
◉	中原遺跡	222	○	○			○	○	■29	小田城跡	2151						○
●1	小田田向遺跡	2999		○			○		■30	小田古墳群	2981				○		
●2	小田横遺跡	5862				○	○		■31	高崎山古墳群	2066				○		
●3	小野須恵器窯跡	2057					○		■32	田土部館跡	5779						○
●4	東城寺須恵器遺跡	5775					○		■33	大畑本田遺跡	2073	○	○	○	○		
●5	東城寺桑木須恵器窯跡	5776					○		■34	大畑本田貝塚	2072		○				
●6	東城寺壽居前須恵器窯	5777					○		■35	藤沢山後遺跡	5798		○	○	○		
●7	小高天神遺跡	2064		○	○	○	○		■36	藤沢北斗遺跡	5796		○	○			
●8	小高須恵器窯跡	2065					○		■37	藤沢東町遺跡	2075		○				
●9	小高村内須恵器窯跡	5778					○		■38	藤沢城跡	4010						○
●10	田宮須恵器窯跡	5803					○		■39	藤沢南原遺跡	2077		○	○			
●11	下大島遺跡	5858					○		■40	北坂田北部貝塚	2078		○	○	○		
●12	田宮梶の宮遺跡	2067		○	○	○	○		■41	上坂田寺裏貝塚	2079		○	○			
●13	田宮古墳群遺跡	2068				○	○		■42	武者塚古墳	5795				○		
●14	高岡根遺跡	2070	○	○	○	○	○		■43	上坂田古墳群	2080				○		
●15	大畑新田遺跡	5807		○	○	○	○		■44	坂田古墳群	2082				○		
●16	大山遺跡	2877		○		○	○		■45	方穂故城	5866						○
●17	天神遺跡	2878		○		○	○		■46	玉取古墳群	2163				○		
●18	柴崎遺跡	2897	○	○		○	○	○	■47	台坪才十郎遺跡	2876		○				
●19	中谷津遺跡	221	○	○		○	○	○	■48	滝の台古墳群	2090				○		
●20	九重廃寺跡（東岡遺跡）	2890					○		■49	旭台貝塚	2084		○				
●21	西坪遺跡	2085		○	○	○	○		■50	横町古墳群	2091				○		
●22	本田遺跡	2097					○		■51	金田城跡	2891						○
●23	上ノ室条里遺跡	2896					○		■52	花室遺跡	2880		○				
●24	般若寺跡	5285					○	○	■53	花室城跡	2893						○
●25	神田遺跡	5841	○	○	○	○	○	○	■54	上ノ室城跡	2892						○
■26	尼寺入廃寺跡	2990						○	■55	松塚古墳群	2094				○		
■27	三村山清冷院極楽寺跡	2991						○	■56	東古墳群	5837				○		
■28	常願寺廃寺跡	2989						○	■57	上高津貝塚	1787	○	○				

第3図　周辺遺跡位置図

第3章　調査の成果

第1節　遺跡の概要

中原遺跡は，つくば市の東部に位置し，花室川左岸の標高23.4～25.3mの舌状台地上に立地している。現況は畑地，平地林である。平成9年度は北部の調査Ⅰ区と西部の調査ⅡA区の調査を行い，調査面積は7,472㎡であった（第1図）。

当遺跡は，奈良時代から平安時代前期を中心とする，旧石器時代から中・近世までの複合遺跡である。今回の調査によって，竪穴住居跡74軒，掘立柱建物跡30棟，堀1条，陥し穴3基，土坑341基，溝4条，石器集中地点4か所を検出した。時代別にみてみると，旧石器時代では石器集中地点4か所などから114点の石器が出土した。縄文時代の遺構は陥し穴3基である。奈良・平安時代の遺構は，竪穴住居跡74軒，掘立柱建物跡27棟，堀1条，土坑73基である。中・近世の遺構は，掘立柱建物跡3棟，溝4条，土坑41基である。その他として時期不明の土坑227基が検出している。

特に，奈良・平安時代の遺構は，8世紀前葉から9世紀中葉までの竪穴住居跡が中心である。北壁に竈を持った住居跡がほとんどで，竈の両側や片側に棚を持つものも確認された。掘立柱建物跡は総柱の建物跡が10棟，側柱の建物跡が17棟である。これらは調査区南部に集中し，規則的に配置されている。調査区東部にある堀は，南北方向に延び，長さが約44m，深さが約60cmあり，覆土上層から多量の遺物が出土している。

遺物は，遺物コンテナ（60×40×20cm）に119箱出土している。遺物の大部分は奈良時代から平安時代にかけての土師器，須恵器である。その他の遺物としては，旧石器時代のナイフ形石器，彫刻刀形石器，掻器，抉入石器，剥片，縄文時代の縄文土器，石鏃，奈良・平安時代の灰釉陶器，緑釉陶器，瓮石，紡錘車，円面硯，瓦，支脚，鉄鏃，鉄斧，鉄床，金鎚，刀子，火打金，手鎌，釘，羽口，椀状滓，漆膜と漆紙（曲げ物の内側に詰められていた漆と，蓋として使用されていた紙），中世から近世にかけての陶器，煙管，古銭等が出土している。

隣接している旧河内郡の郡寺とみられる九重廃寺や，旧河内郡の郡衙跡と考えられている西坪遺跡との関連性が高い，奈良・平安時代前期の集落跡と考えられる。

第2節　基本層序

平成9年度の調査では，2か所にテストピットを設定して，基本土層の観察を行った。ローム層の層序区分については，武蔵野台地での層序区分を参考に，ローマ数字で示すことにする。テストピットを設定した位置は，調査Ⅰ区のC6h7区と調査ⅡB区（平成10年度調査）のF3e8区である。

まず，調査Ⅰ区のテストピット（第4図）について述べる。

Ⅰ層は，灰褐色の表土層で，ローム粒子を多量，ローム小ブロック・焼土粒子中量，炭化物少量を含んでいる。粘性は弱く，硬く締まっている。層厚は30～50cmである。

Ⅱ層は，暗褐色の腐植土で，ローム粒子を多量に含んでいる。表土とローム層の間層と考えられ，ブロック状の堆積を呈している。層厚は10～15cmである。

Ⅲ～Ⅳ層は，褐色のソフトローム層で，黒色スコリア粒子を微量含んでいる。層厚は3～24cmで，クラックが入っているが，締まっている。Ⅲ層とⅣ層は分層することができなかった。この層は，約12,000年～20,000

年前に比定できる。

Ⅴ～Ⅵ層は，褐色のハードローム層で，白色粒子を少量，黒色スコリア粒子を微量含んで，締まっている。この層はハードロームの上部に堆積する層であるが，Ⅴ層にあたる第一黒色帯（第１ブラックバンド，ＢＢⅠ）は層位が不安定で確認できず，分層できなかった。中位から次層にかけて火山ガラスを含んでいることから，ＡＴ（姶良Ｔｎ火山灰）を含む層と考えられる。層厚は６～29㎝である。この層は，約20,000年～25,000年前に比定できる。

Ⅸ層は，暗褐色のハードローム層で，黒色スコリア粒子を少量，焼土粒子・白色粒子・赤色スコリア粒子を微量含んでいる。Ⅵ層の下に確認された暗褐色層であることから，第二黒色帯（第２ブラックバンド，ＢＢⅡ）と考えられる。Ⅶ層とⅧ層は明確に確認できなかったが，上位の色調がⅥ層に近いことから，Ⅶ層がブロック状に堆積していることも考えられる。層厚は20～30㎝である。この層は，約25,000年～28,000年前に比定できる。

Ⅹ層は，褐色ローム層で，白色粒子を少量，黒色スコリア粒子・赤色スコリア粒子を微量含んでいる。この層までが立川ローム層に比定されると考えられる。層厚は22～39㎝である。

ⅩⅠ層は，にぶい黄褐色ローム層で，黒色スコリア粒子を微量含み，強い粘性を帯びて，締まっている。上位に若干の赤色スコリア粒子が見られる。この層以下が武蔵野ローム層に比定される。層厚は17～32㎝である。

ⅩⅡ層は，明褐色ローム層で，黒色スコリア粒子と灰白色粘土ブロックを少量，炭化物を微量含んでいる。強い粘性を帯びて，硬く締まっている。層厚は６～15㎝である。

ⅩⅢ層は，明褐色ローム層で，黒色スコリア粒子を微量含んでいる。強い粘性を帯びて，締まっている。層厚は３～33㎝である。

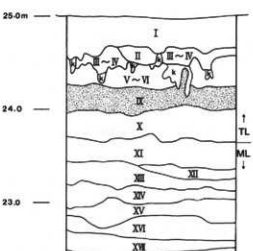
ⅩⅣ層は，明褐色ローム層で，炭化粒子・黒色スコリア粒子・灰白色粘土ブロックを少量含んでいる。強い粘性を帯びて，締まっている。層厚は６～30㎝である。

ⅩⅤ層は，にぶい黄褐色ローム層で，灰白色粘土ブロックを中量，黒色スコリア粒子を少量含んでいる。強い粘性を帯びて，締まっている。層厚は６～32㎝である。

ⅩⅥ層は，褐色ローム層で，灰白色粘土ブロックと細かい砂粒子を中量，黒色スコリア粒子を微量含んでいる。強い粘性を帯びて，硬く締まっている。層厚は４～25㎝である。

ⅩⅦ層は，にぶい黄橙色ローム層で，灰白色粘土ブロックと細かい砂粒子を多量，赤色スコリア粒子を微量含んでいる。強い粘性を帯びて，締まっている。層厚は４～25㎝である。ＴＰ（箱根－東京軽石，東京パミス）は確認されなかった。

ⅩⅧ層以下は，黄灰色の常総粘土層である。



第４図　基本土層図（１）

次に，調査ⅡＢ区のテストピット（第５図）について述べる。

Ⅰ層は，灰褐色の表土層，Ⅱ層は，暗褐色の表土とローム層の間層である腐食土層で，ともに遺構確認のために除去されている。

Ⅲ～Ⅳ層は，褐色のソフトローム層で，ローム粒子を微量含み，締まっている。層厚は９～14㎝である。この層は，約12,000年～20,000年前に比定できる。

Ⅴ層の第一黒色帯（ＢＢⅠ）は，層位が安定せず，確認できなかった。

Ⅵ層は，褐色のハードローム層で，ローム粒子を微量含み，締まっている。若干のガラス質粒子を含むことから，ＡＴ（姶良Ｔｎ火山灰）を含む層と考えられる。層厚は11～14cmである。

Ⅶ層は，褐色のハードローム層で，締まっている。第二黒色帯（ＢＢⅡ）の最上層と考えられ，層厚は３～７cmである。Ⅷ層は，明確に確認することができなかった。この層は，約20,000年～25,000年前に比定できる。

Ⅸ－ａ層は，黒褐色のハードローム層で，白色粒子・赤色スコリア粒子を微量含み，硬く締まっている。第二黒色帯（ＢＢⅡ）の中間層と考えられる。層厚は２～６cmである。

Ⅸ－ｃ層は，黒褐色のハードローム層で，灰白色粘土粒子・白色粒子・赤色スコリア粒子を少量含み，硬く締まっている。第二黒色帯（ＢＢⅡ）の最下層と考えられる。層厚は７～15cmである。Ⅸ－ａ層からｃ層は，約25,000年～28,000年前に比定できる。

Ⅹ層は，暗褐色のローム層で，白色粒子・赤色スコリア粒子を少量，灰白色粘土粒子・鉄分を微量含み，硬く締まっている。層厚は４～13cmである。ここまでが立川ローム層に比定されると考えられる。

ⅩⅠ層は，暗褐色のローム層で，白色粒子・灰白色粘土粒子・鉄分を微量含み，粘性が強く，硬く締まっている。上位で赤色スコリア粒子を微量認められた。層厚は４～10cmである。この層以下が，武蔵野ローム層に比定されると考えられる。

ⅩⅡ層は，暗褐色のローム層で，白色粒子を少量，灰白色粘土粒子・黒色スコリア粒子を微量含み，粘性が強く，締まっている。層厚は３～10cmである。

ⅩⅢ層は，暗褐色のローム層で，白色粒子・灰白色粘土粒子を少量含み，粘性が強く，締まっている。層厚は４～12cmである。

ⅩⅣ層は，オリーブ褐色のローム層で，白色粒子を少量，灰白色粘土粒子・鉄分の黒色粒子を微量含み，粘性が強く，締まっている。層厚は５～10cmである。

ⅩⅤ層は，オリーブ褐色のローム層で，白色粒子・鉄分の黒色粒子を少量，灰白色粘土粒子を微量含み，粘性が強く，締まっている。層厚は３～７cmである。

ⅩⅥ層は，オリーブ褐色のローム層で，鉄分の黒色粒子を少量，灰白色粘土粒子を微量含み，粘性が非常に強く，締まっている。層厚は４～９cmである。

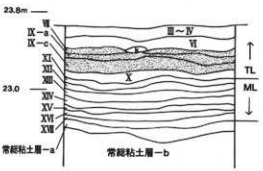
ⅩⅦ層のＴＰ（東京パミス）は，確認できなかつた。

ⅩⅧ層は，オリーブ褐色のローム層で，鉄分の黒色粒子を中量，灰白色粘土粒子を少量含み，粘性が非常に強く，締まっている。層厚は４～11cmである。

これ以下は，常総粘土層で，ａ層とｂ層に分層することができる。ａ層は，明緑灰色の粘土層で，鉄分の黒色粒子を多量含み，粘性が非常に強く，締まっている。層厚は６～16cmである。

ｂ層は，明緑灰色の粘土層で，粘性が非常に強い。

なお，当遺跡の遺構のほとんどは，Ⅱ層の上面で確認され，Ⅱ層からⅩ層にかけて掘り込まれている。



第５図　基本土層図（２）

第3節　遺構と遺物

1　旧石器時代の遺構と遺物

(1)　調査の概要と方法

発掘調査当初の遺構確認時に，調査Ⅰ区の確認面からナイフ形石器1点と剥片2点が，調査ⅡA区の中央部から西側にかけてナイフ形石器の基部1点，剥片9点などが出土した。また，調査が進行するにしたがって，第4号住居跡の覆土中から黒曜石のナイフ形石器1点，第36号住居跡の覆土中から黒曜石の掻器1点が出土した。これら遺構の覆土中や表土中から出土した旧石器時代の遺物は，ナイフ形石器5点，掻器1点，剥片17点，石核1点，石核素材1点で，合計25点にのぼった（表2）。

そこで，竪穴住居跡等の遺構調査終了後に，最も石器が出土しており，文化層が確認できると思われる地点に調査区を設定して，ローム層の掘り下げを行った（第6図）。

調査区は大きく2か所に分けられる。第1調査区は，調査Ⅰ区の第36号竪穴住居跡東側から南側にかけての範囲（D5f5・6，D5g5・6）である。第2調査区は，調査ⅡA区の中央部から西部にかけての範囲（D3f9・0，D4f1～4，D3g9・0，D4g1～4，D3h9・0，D4h1～4，D3i9・0，D4i1～4）である。地形的には，第1調査区は標高25mの台地上の平坦部，第2調査区は標高24mの台地縁辺部から，西側の低地に向かう緩斜面である。面積は，第1調査区が約64㎡，第2調査区が約330㎡で，総面積約394㎡となり，全調査面積の約5.3%となった。

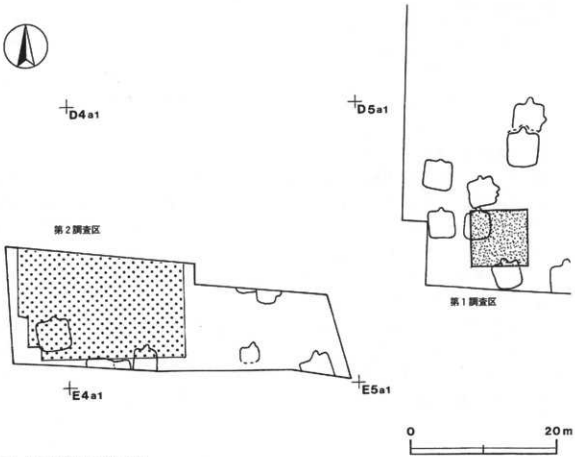
調査の過程で出土した石器などは原位置を保持し，柱状に残したまま，旧石器時代の遺構などにも注意して掘り下げ，出土状況の写真撮影及び位置と標高の計測を行った。土層の観察は，各調査区の南側に土層観察用ベルトを設定して行い，層位はテフラ分析を行って，その結果を踏まえて基本層序を確定することとした（第3章第2節を参照）。

その結果，第1調査区ではナイフ形石器1点が出土したが，他には遺物は出土しなかった。また，第2調査区では，4か所の石器集中地点が確認され，ナイフ形石器・彫刻刀形石器・抉入石器・石核・剥片・砕片など88点が出土した。

以下，各調査区の出土遺物について解説する。

表2　遺構に伴わない旧石器時代の遺構

石材＼器種	ナイフ形石器	彫刻刀形石器	掻器	抉入石器	石核	剥片	砕片	礫	合計
珪質頁岩						3			3
硬質頁岩						1			1
瑪瑙					1	2			3
チャート					1	3			4
黒曜石	5		1			8			14
安山岩（ガラス質黒色安山岩とトロトロ石を含む）									
雲母片岩									
粘板岩									
花崗岩									
砂岩									
片岩									
合計	5		1		2	17			25

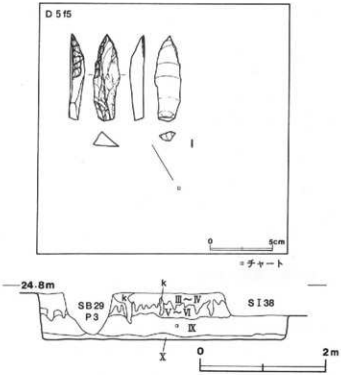


第6図　旧石器調査区設定図

(2)　出土遺物

ア　第1調査区の出土遺物（第7図）

前述した通り，第1調査区では，第7図1のチャートのナイフ形石器1点が出土したのみで，遺物の集中地点は確認できなかった。1は，両端が尖り，刃部先端がわずかに内彎している。縦長剥片を素材としており，打面付近を両側から斜めに折断して，2側辺に刃潰し加工を施している。出土層位はローム層第Ⅸ層中部で，約25,000年前に比定できる（註：絶対年代については橋本勝雄「茨城の旧石器時代」『茨城県考古学協会誌』第7号，1995による）。他に遺物が確認されていないことから，製作跡等の遺構に伴う可能性は低いと考えられる。



第7図　第1調査区遺物出土分布図

旧石器時代石器一覧表（第１調査区）

図版番号	器種	石材	計測値 長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	出土地区(標高m)	備考（調整・癒合状況など）	遺物番号
第７図 1	ナイフ形石器	チャート	45.1	14.1	8.1	3.30	第1調査区 D５５ (24.184)	縦長剥片を素材として打面を残している。左辺はハンマーによる押圧剥離。右辺は微細な剥離が連続しており,使用痕の可能性がある。	Q29

イ　第２調査区の出土遺物（第８～13図，表３）

第２調査区から出土した遺物の器種は，ナイフ形石器８点，彫刻刀形石器１点，抉入石器１点，石核２点，剥片53点など，合計88点である。また，石材は88点中，黒曜石が38点，珪質頁岩が17点，瑪瑙が16点，安山岩（ガラス質黒色安山岩，トロトロ石を含む）が７点，硬質頁岩とチャート，粘板岩が各２点などである。黒曜石が全体の約43%を占めている。石材の多くが遠隔地から搬入されたものと考えられ，当時の交流・流通が広域にわたることを物語っている。出土層位は，２点を除いてローム層第Ⅵ層下部から第Ⅹ層上部までに相当すると考えられ，確認された４か所の石器集中地点から出土した遺物は，第Ⅸ層の上部から下部で，約25,000年前から28,000年前に比定できる。第１号石器集中地点と第３号石器集中地点から出土したナイフ形石器は，ともに瀬戸内型の特徴をもつものであり，時期的に幅があるとされている。よって，各地点によって組成の違いが認められるものの，明確に時期を分離する遺物は確認されていないことから，文化層は１層と考えられる。

ここでは，各集中地点の石器を中心に掲載する。

表３　第２調査区出土遺物

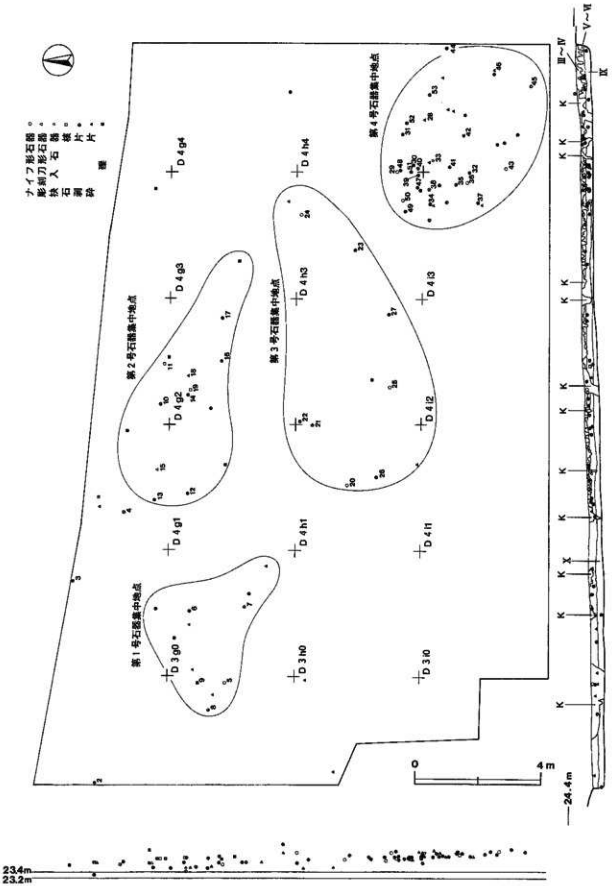
石材＼器種	ナイフ形石器	彫刻刀形石器	掻器	抉入石器	石核	剥片	砕片	礫	合計
珪質頁岩						16	1		17
硬質頁岩	1					1			2
瑪瑙	1	1				12	2		16
チャート						1		1	2
黒曜石	6			1		20	11		38
安山岩（ガラス質黒色安山岩とトロトロ石を含む）					2	2	2	1	7
雲母片岩						1			1
粘板岩							2		2
花崗岩								1	1
砂岩								1	1
片岩								1	1
合計	8	1		1	2	53	18	5	88

第１号石器集中地点（第10図，表４）

位置　Ｄ３g0区を中心に位置している。

出土状況　南北約4.0m，東西約4.8mの範囲内に存在するが，遺物は北西部に集中している。標高23.406～23.721mにかけて出土している。ローム層第Ⅸ層中部から下部に相当すると思われる。

遺物　ナイフ形石器１点，剥片７点，砕片４点の合計12点が出土している。石材は，黒曜石11点，粘板岩１点である。第10図５の黒曜石のナイフ形石器は，小さな横長剥片を素材にして，打面側の１側辺に加工を施す



第8図　第2調査区遺物出土分布図（器種）

「瀬戸内技法」と，主要剥離面側に加工を施す「台形様石器の技法」が折衷されている。ＡＴ層下部より上層から出土するタイプで，時期的な幅の広いナイフ形石器である。

所見　当集中地点は，黒曜石の剥片が主体である。接合する遺物はなく，石核などは確認されなかった。遺物の出土状況から，同一時期の可能性が高いと思われる。性格の詳細は不明であるが，黒曜石のナイフ形石器１点と剥片が出土していることから，石器製作跡の可能性も考えられる。

表４　第２調査区出土遺物（第１号石器出土地点）

器種 / 石材	石器 ナイフ形	石器 彫刻刀形	掻器	石抉器入	石核	剥片	砕片	礫	合計
珪質頁岩									
硬質頁岩									
瑪瑙									
チャート									
黒曜石	1					7	3		11
安山岩（ガラス質黒色安山岩とトロトロ石を含む）									
雲母片岩									
粘板岩							1		1
花崗岩									
砂岩									
片岩									
合計	1					7	4		12

第２号石器集中地点（第10・11図，表５）

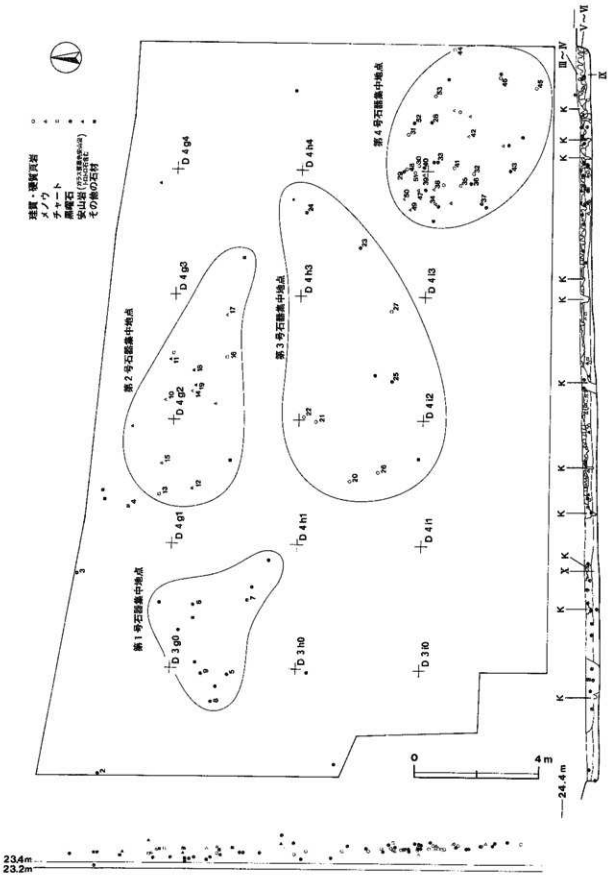
位置　Ｄ４f1，Ｄ４f2，Ｄ４g1，Ｄ４g2区を中心に位置している。

出土状況　南北約3.6m，東西約7.4mの範囲内に存在するが，遺物は全体的に散在している。標高23.678～23.927mにかけて出土している。ローム層第Ⅵ層下部から第Ⅸ層下部に相当すると思われる。

遺物　彫刻刀形石器１点，石核２点，剥片８点，砕片１点，礫３点の合計15点が出土している。石材は，瑪瑙

表５　第２調査区出土遺物（第２号石器出土地点）

器種 / 石材	石器 ナイフ形	石器 彫刻刀形	掻器	石抉器入	石核	剥片	砕片	礫	合計
珪質頁岩									
硬質頁岩						1			1
瑪瑙		1				4			5
チャート						1		1	2
黒曜石									
安山岩（ガラス質黒色安山岩とトロトロ石を含む）					2	2	1		5
雲母片岩									
粘板岩									
花崗岩								1	1
砂岩								1	1
片岩									
合計		1			2	8	1	3	15



第9図　第2調査区遺物出土分布図（石材）

5点，安山岩5点（ガラス質黒色安山岩4点，トロトロ石1点），チャート2点，硬質頁岩1点，砂岩1点，花崗岩1点である。第11図15の瑪瑙の彫刻刀形石器は，分厚い剥片を素材に，右側辺に上方から右斜の樋状剥離が施されている。11のトロトロ石の石核は，瀬戸内型のもので，分厚い剥片を素材としている。石核の素材剥片の主要剥離面を底面に，剥離角120度前後で正面と側面に作業面を展開している。19のガラス質黒色安山岩の石核は，横長剥片の瀬戸内型のもので，縦折れを生じた分厚い剥片を素材としている。縦折れの面を作業面にし，石核の素材剥片の主要剥離面を底面にしている。

所見　当集中地点は，剥片と砕片がほとんどであり，石材は瑪瑙とガラス質黒色安山岩を主体としている。接合する遺物は確認されなかった。遺物の出土状況から，同一時期の可能性が高いと思われる。性格は不明であるが，瑪瑙の彫刻刀形石器1点と，トロトロ石とガラス質黒色安山岩の石核2点と剥片が出土していることから，石器製作跡の可能性が考えられる。

第3号石器集中地点（第11・12図，表6）

位置　D4h1，D4h2，D4h3区を中心に位置している。

出土状況　南北約4.2m，東西約9.0mの範囲内に存在する。標高23.734～24.053mにかけて出土している。ローム層第Ⅶ層下部から第Ⅸ層上部に相当すると思われる。

遺物　ナイフ形石器3点，剥片6点，砕片2点の合計11点が出土している。石材は，黒曜石5点，珪質頁岩4点，硬質頁岩1点，ガラス質黒色安山岩1点である。第11図20は，硬質頁岩のナイフ形石器の基部である。右辺は微細な押圧剥離が，左辺は尖った工具による押圧剥離の二次加工が施されている。24の黒曜石のナイフ形石器は，1側辺加工の瀬戸内型のもので，二次加工は真上から軽く叩く直接打撃と，その打点近くにハンマーによる撫りが施されている。25の黒曜石のナイフ形石器は，部分的に加工されたもので，左側辺に硬質ハンマーによる押圧剥離の二次加工がみられる。右側辺の打面近くの急角度剥離は事故剥離と考えられる。

所見　当集中地点は，剥片と砕片がほとんどであり，石材は黒曜石と珪質頁岩を主体としている。接合する遺物は確認されなかった。遺物の出土状況から，同一時期の可能性が高いと思われる。第1・2号石器集中地点よりも上位で確認されているものが多い。黒曜石のナイフ形石器2点，硬質頁岩のナイフ形石器1点と剥片が出土していることから，石器製作跡の可能性が考えられる。

表6　第2調査区出土遺物（第3石器出土地点）

石材＼器種	石ナイフ形器	石彫刻刀形器	掻器	石抉器入	石核	剥片	砕片	礫	合計
珪質頁岩						4			4
硬質頁岩	1								1
瑪瑙									
チャート									
黒曜石	2					2	1		5
安山岩（ガラス質黒色安山岩とトロトロ石を含む）							1		1
雲母片岩									
粘板岩									
花崗岩									
砂岩									
片岩									
合計	3					6	2		11

第４号石器集中地点（第12・13図，表７）

位置　Ｄ４i4区を中心に位置している。

出土状況　南北約4.1ｍ，東西約5.2ｍの範囲内に存在するが，遺物は北西部に集中している。標高23.845～24.106ｍにかけて出土している。ローム層第Ⅵ層から第Ⅸ層下部に相当すると思われる。

遺物　ナイフ形石器４点，抉入石器１点，剥片28点，砕片８点の合計41点が出土している。石材は，黒曜石17点，珪質頁岩13点，瑪瑙11点である。第12図29は，黒曜石のナイフ形石器の未製品である。左側辺の打面側にハンマーストーンの押圧による二次加工が施されている。左側辺には新しい剥離がみられる。33の黒曜石の抉入石器は，右側辺の中央にハンマーの直接打撃による急角度剥離のノッチ（抉入部）がみられる。剥離角は110度である。36の黒曜石のナイフ形石器は，左側辺にハンマーの押圧剥離による二次加工が施されている。上辺と右辺は折れである。第13図43は，黒曜石のナイフ形石器の先端部である。小形の横長剥片を用い，その打面側をハンマーで軽く叩いて，急角度の二次加工を施している。左辺はハンマーによる擦りと考えられる。50の瑪瑙のナイフ形石器は，瀬戸内型のもので，打面側の側辺にハンマーを上から軽く叩く剥離による二次加工が施されている。

所見　当集中地点は，剥片と砕片が主体であり，石材は黒曜石，珪質頁岩，瑪瑙の比率が多い。接合する遺物はなく，石核などは確認されなかった。遺物の出土状況から，同一時期の可能性が高いと思われる。黒曜石のナイフ形石器が３点，瑪瑙のナイフ形石器１点，黒曜石の抉入石器１点と剥片が出土したことから，石器製作跡の可能性が考えられる。

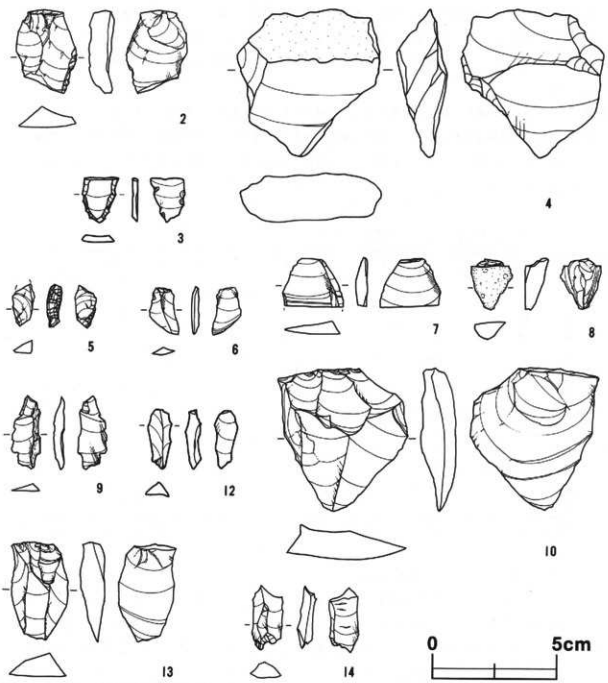
表７　第２調査区出土遺物（第４号石器出土地点）

石材＼器種	ナイフ形石器	彫刻刀形石器	掻器	抉入石器	石核	剥片	砕片	礫	合計
珪質頁岩						12	1		13
硬質頁岩									
瑪瑙	1					8	2		11
チャート									
黒曜石	3			1		8	5		17
安山岩（ガラス質黒色安山岩とトロトロ石を含む）									
雲母片岩									
粘板岩									
花崗岩									
砂岩									
片岩									
合計	4			1		28	8		41

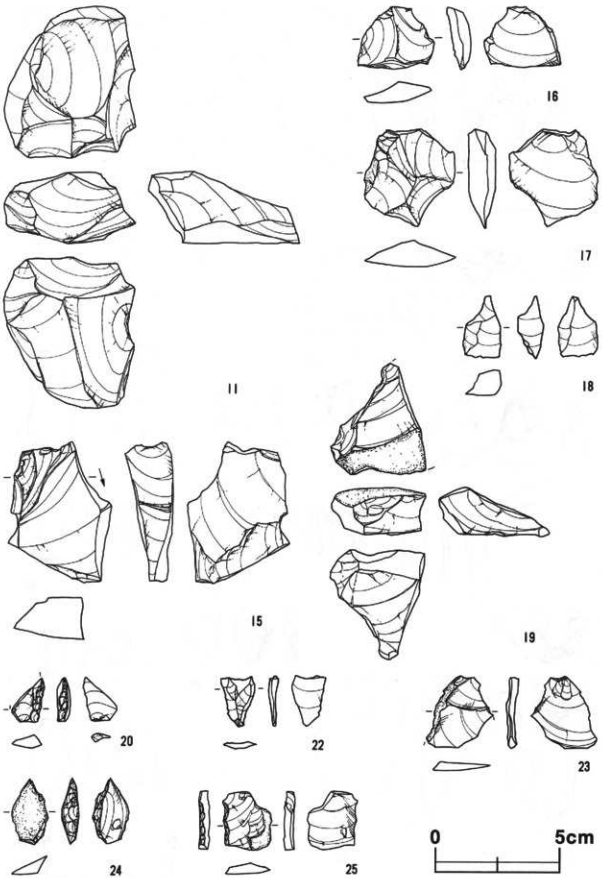
ウ　その他の出土遺物（第13～15図，表25）

４か所の集中地点以外から出土した遺物については，表面採集したものも含めて一括し，石器を中心に図示する。第11図54の黒曜石のナイフ形石器は，基部に二次加工が施されている。左辺は背面側に向けて正方向と後上反方向の押圧剥離が施され，右辺は主要剥離面側に向けて尖った工具の間接打撃による反方向の剥離が施されている。左辺基部付近に事故剥離がみられる。石材は，長野県和田峠産の黒曜石を用いたものと考えられる。技法的には台形様石器と基部加工ナイフ形石器の特徴を折衷したものである。ＡＴ層よりも下層の第Ⅸ層

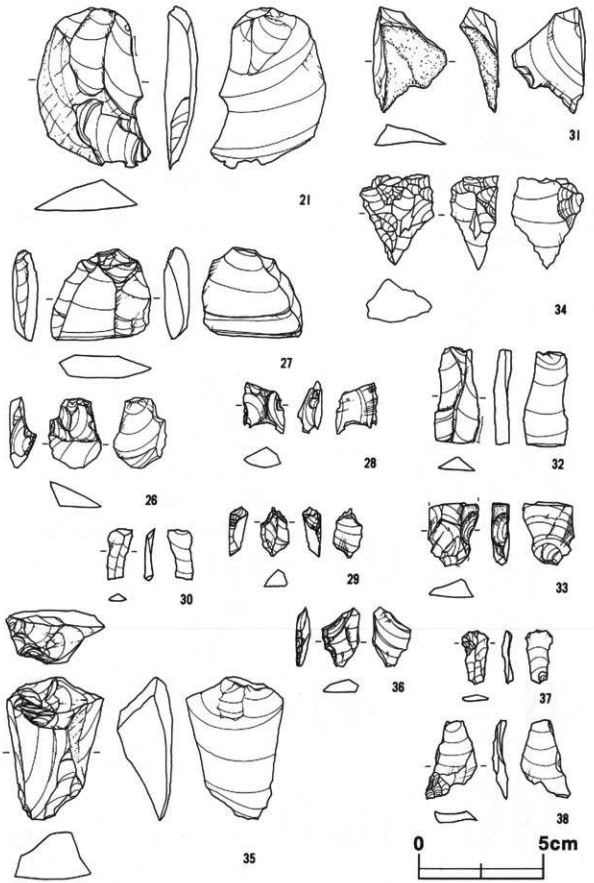
下部にみられるタイプのナイフ形石器である。55の黒曜石のナイフ形石器は，小形の縦長剥片を素材にしたもので，２側辺にハンマーの押圧剥離による刃潰し加工をしたものである。石材は，長野県和田峠産の黒曜石を用いたものと考えられる。ＡＴ層よりも下層から出土するタイプのナイフ形石器である。56は，黒曜石のナイフ形石器の基部で，小さな剥片を素材に，微細な押圧剥離で両側辺を加工してある。57も黒曜石のナイフ形石器の基部で，素材は打面調整のある石刃状の剥片である。基部の両側辺に刃潰し加工がみられる。59の黒曜石のナイフ形石器は，左辺に押圧剥離の平らな二次加工が，右辺に急角度の間接打撃による加工が施されている。裏面には押圧剥離による加工がみられる。62の瑪瑙の石核は，正面に数回の垂直打ちの打撃痕がみられる。素材は両極打撃により分割された剥片と考えられる。



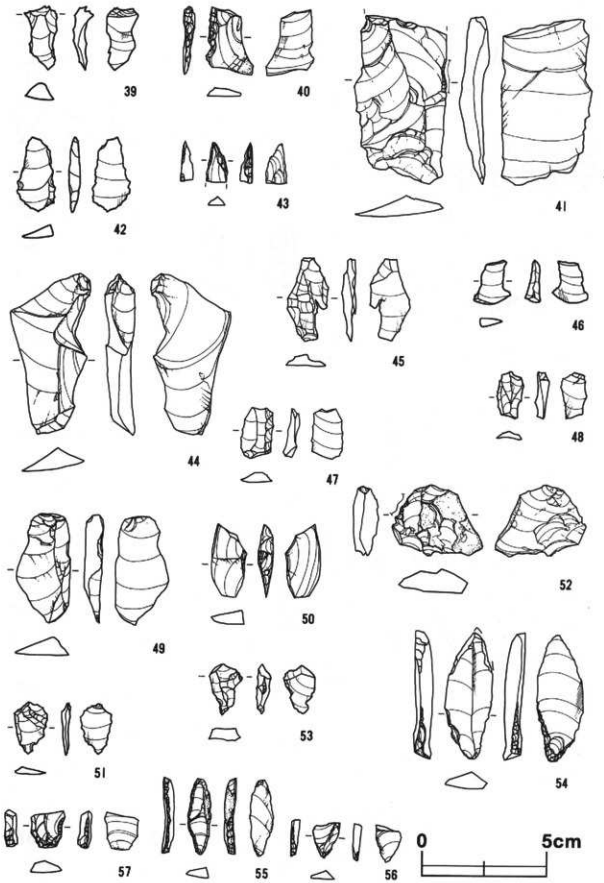
第10図　旧石器時代の遺物実測図（１）



第11図　旧石器時代の遺物実測図（２）

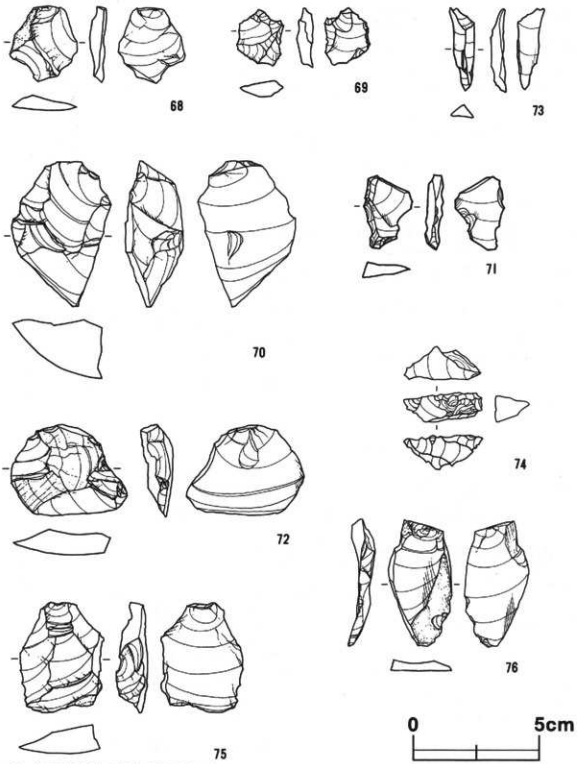


第12図　旧石器時代の遺物実測図（3）



第13図　旧石器時代の遺物実測図（4）

第14図　旧石器時代の遺物実測図（５）



第15図　旧石器時代の遺物実測図（６）

旧石器時代石器一覧表（第２調査区・集中地点外出土遺物）

図版番号	器種	石材	計測値 長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	出土地区（標高m）	備考（調整・接合状況など）	遺物番号
第10図 2	剥片	黒曜石	34.0	21.8	8.2	6.15	第2調査区 D３f9 (23.306)	上方からの打撃による剥離。打面に右から左方向に樋状剥離が観察され、石核の打面と考えられる。	Q45
3	剥片	黒曜石	17.5	14.0	2.0	0.63	第2調査区 D３f0 (23.629)		Q99
4	剥片	雲母片岩	59.0	58.0	21.0	66.00	第2調査区 D４f1 (23.613)		Q81

旧石器時代石器一覧表（第２調査区・第１号石器集中地点）

図版番号	器種	石材	計測値 長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	出土地区（標高m）	備考（調整・接合状況など）	遺物番号
第10図 5	ナイフ形石器	黒曜石	(17.5)	8.0	4.8	(0.65)	第2調査区 D３g9 (23.625)	ナイフ形石器の基部。先端が欠損している。厚い横長剥片の末端近に対向剥離の後、押圧剥離の二次加工が施されている。	Q42
6	剥片	黒曜石	19.0	9.0	3.0	0.38	第2調査区 D３g0 (23.406)		Q46
7	剥片	黒曜石	19.8	21.5	5.0	2.00	第2調査区 D３g0 (23.721)	打面欠損。	Q47
8	剥片	黒曜石	21.0	16.9	10.0	2.10	第2調査区 D３g9 (23.481)		Q43
9	剥片	黒曜石	30.0	11.0	3.5	0.94	第2調査区 D３g9 (23.594)	両極打撃による剥離で、ハンマーを石核にこすりつけた可能性もある。	Q44

旧石器時代石器一覧表（第２調査区・第２号石器集中地点）

図版番号	器種	石材	計測値 長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	出土地区（標高m）	備考（調整・接合状況など）	遺物番号
第10図 10	剥片	瑪瑙	57.1	52.2	14.8	35.00	第2調査区 D４f2 (23.825)	平坦打面。剥離角は105度。	Q56
第11図 11	石核	トロトロ石	28.5	51.8	59.9	74.00	第2調査区 D４f2 (23.847)	横長剥片の縁ト内型右核。分厚い剥片が素材。石核の素材剥片の主要剥離面を底面に剥離角120度前後で正面と側面に作業面を展開する。	Q55
第10図 12	剥片	ガラス質黒色安山岩	24.0	9.0	6.0	0.87	第2調査区 D４g1 (23.711)		Q100
13	剥片	チャート	39.8	22.9	10.2	8.10	第2調査区 D４f1 (23.678)	平坦打面。剥離角は90度。	Q50
14	剥片	瑪瑙	25.0	12.0	8.0	1.56	第2調査区 D４g2 (23.871)		Q83
第11図 15	彫器剥片	瑪瑙	56.4	41.6	20.1	38.00	第2調査区 D４f1 (23.754)	厚い剥片の右側辺に樋状剥離が施されている。	Q51
16	剥片	硬質頁岩	25.0	31.0	9.8	5.15	第2調査区 D４g2 (23.750)	平坦打面。剥離角74度。左辺は図示していないが、打点の残る剥離面が確認されることから、打面転位された石核が推定できる。	Q52

第11図 17	剥　片	瑪　瑙	39.5	36.3	11.6	12.00	第2調査区 D 4 g2 (23.927)	切り子打面。	Q53
18	砕　片	ガラス質 黒色安山岩	25.0	19.0	10.0	2.88	第2調査区 D 4 g2 (23.744)		Q82
19	石　核	ガラス質 黒色安山岩	19.7	38.1	40.2	25.00	第2調査区 D 4 g2 (23.872)	横長剥片の剥ぎ内型石核。縦折れを生じた分厚い剥片が素材。縦折れの面を作業面にし、石核の素材剥片の主要剥離面を底面にしている。	Q54

旧石器時代石器一覧表（第２調査区・第３号石器集中地点）

図版番号	器　種	石　材	計　測　値				出土地区 (標高m)	備　考（調整・接合状況など）	遺物番号
			長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)			
第11図 20	ナイフ形石器	硬質頁岩	(18.0)	11.7	5.0	(1.02)	第2調査区 D 4 h1 (23.809)	ナイフ形石器の基部。右辺は微細な押圧剥離。左辺は失った工具で形成される押圧剥離の二次加工。	Q48
第12図 21	剥　片	珪質頁岩	64.5	46.5	13.4	28.00	第2調査区 D 4 h1 (23.802)	平坦打面。剥離角は110度。	Q49
第11図 22	剥　片	珪質頁岩	20.0	14.0	4.0	0.48	第2調査区 D 4 h2 (23.734)	平坦打面。	Q80
23	調　片	黒曜石	29.8	22.9	3.5	2.18	第2調査区 D 4 h3 (23.971)	打面欠損。	Q57
24	ナイフ形石器	黒曜石	26.8	13.9	7.0	1.52	第2調査区 D 4 h3 (24.053)	1側辺加工の剥ぎ内型のナイフ形石器。二次加工は真上から軽く叩く直接打撃と、その打点近くに見られるハンマーの痕り。	Q58
25	ナイフ形石器	黒曜石	24.0	18.5	4.0	1.96	第2調査区 D 4 h2 (23.794)	部分的に加工されたナイフ形石器。左側辺に硬質ハンマーによる押圧剥離の二次加工がみられる。右側辺打面近くの急角度剥離は事故剥離。	Q62
第12図 26	剥　片	珪質頁岩	29.0	20.9	10.0	4.28	第2調査区 D 4 h1 (23.817)	上方からの打撃による剥離。左側辺に打点が残る剥離面が残存。剥離角は110度。打点再生剥片か、打面転位のために残った剥離面。	Q60
27	剥　片	珪質頁岩	37.0	40.5	10.2	14.00	第2調査区 D 4 h2 (23.892)	左側辺に階状剥離がみられる。剥片剥離時に形成された事故剥離と考えられる。打面欠損。	Q61

旧石器時代石器一覧表（第２調査区・第４号石器集中地点）

図版番号	器　種	石　材	計　測　値				出土地区 (標高m)	備　考（調整・接合状況など）	遺物番号
			長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)			
第12図 28	砕　片	黒曜石	21.2	14.8	8.0	2.24	第2調査区 D 4 i1 (24.106)	硬いハンマーの強い衝撃によって飛び散った石片。石鏃辺に不規則な剥離がみられるが、加工したものではない。	Q39
29	ナイフ形石器	黒曜石	20.5	9.0	6.0	1.12	第2調査区 D 4 h3 (24.046)	左側辺の打面側にハンマーストーンの押圧による二次加工が施されている。左側辺には新しい剥離がみられる。ナイフ形石器の未製品。	Q63
30	剥　片	珪質頁岩	20.0	10.0	4.0	0.40	第2調査区 D 4 h4 (23.386)	石刃状の剥片。	Q84
31	剥　片	珪質頁岩	42.3	29.6	16.2	7.25	第2調査区 D 4 h4 (24.083)	縦折れの剥片。剥離角は120度。	Q64
32	剥　片	珪質頁岩	38.8	18.3	7.4	3.28	第2調査区 D 4 i4 (24.031)	石刃状の剥片。打面調整を持つ。剥離角は105度。	Q65

第12図 33	挟入石器	黒曜石	26.0	17.6	7.0	3.54	第2調査区 D 4 i 4 (24.043)	右側辺の中央にハンマーの直接打撃による急角度剥離のノッチ（挟入部）がみられる。	Q66
34	剥片	瑪瑙	36.0	30.0	20.0	14.00	第2調査区 D 4 i 3 (23.965)		Q85
35	剥片	珪質頁岩	57.1	39.5	22.5	35.00	第2調査区 D 4 i 3 (23.951)	分厚い剥片で，背面に細かい調整剥離がみられる。左側辺に打面調整痕がみられる。	Q67
36	ナイフ形石器	黒曜石	24.0	14.0	4.8	1.54	第2調査区 D 4 i 4 (23.975)	左側辺にハンマーの押圧剥離による二次加工が施されている。上辺と右辺は折れである。	Q68
37	剥片	黒曜石	21.0	11.0	5.0	0.39	第2調査区 D 4 i 3 (23.943)		Q86
38	剥片	瑪瑙	31.0	21.0	6.0	1.88	第2調査区 D 4 i 3 (23.901)		Q87
第13図 39	剥片	瑪瑙	26.0	13.0	8.0	1.52	第2調査区 D 4 h3 (23.880)		Q88
40	剥片	黒曜石	17.8	13.6	3.7	1.66	第2調査区 D 4 h4 (23.900)	左側辺にハンマーの押圧剥離による二次加工が施されている。	Q69
41	剥片	珪質頁岩	67.3	37.0	11.6	20.00	第2調査区 D 4 i 4 (23.920)	石刃状の剥片。やや大形で，打面が剥片剥離時に折れている。右側辺に不規則で微細な剥離があり，使用痕と考えられる。刃先角128度。	Q70
42	剥片	瑪瑙	30.0	15.0	5.0	1.76	第2調査区 D 4 i 4 (24.010)		Q89
43	ナイフ形石器	黒曜石	(16.0)	6.5	3.8	(0.44)	第2調査区 D 4 i 4 (24.074)	ナイフ形石器の先端小形の横長剥片を用い，その打面側にハンマーを軽く叩く加工で，急角度の二次加工を施す。左辺はハンマーの擦り。	Q71
44	剥片	珪質頁岩	64.5	32.8	13.4	14.00	第2調査区 D 4 i 4 (24.035)	瀬戸内型の横長剥片。背面に素材剥片の主要剥離面を残し，同一打面上の剥離も残る。右側辺は剥片の打面側で，事故剥離がみられる。	Q72
45	剥片	珪質頁岩	33.0	16.0	5.0	1.32	第2調査区 D 4 i 4 (24.089)		Q90
46	剥片	珪質頁岩	17.0	15.0	6.0	0.75	第2調査区 D 4 i 4 (24.030)		Q101
47	剥片	瑪瑙	20.0	13.0	6.0	1.14	第2調査区 D 4 h3 (23.879)		Q91
48	剥片	珪質頁岩	19.0	10.0	6.0	0.59	第2調査区 D 4 h4 (23.943)		Q102
49	剥片	瑪瑙	43.7	21.5	8.1	5.60	第2調査区 D 4 h3 (23.845)	頭部調整を持つ石刃状の剥片。剥離角95度。	Q73
50	ナイフ形石器	瑪瑙	29.9	15.2	6.0	2.42	第2調査区 D 4 h3 (23.849)	瀬戸内型のナイフ形石器。打面側の1側辺に二次加工。ハンマーを上から軽く叩く剥離。先端側2枚が正方向，手前が反方向の剥離。	Q74
51	剥片	珪質頁岩	20.0	13.0	4.0	0.48	第2調査区 D 4 h4 (23.868)		Q103
52	剥片	黒曜石	229.0	27.0	9.8	8.00	第2調査区 D 4 h4 (23.897)	自然面打面の剥片。左側辺に急角度の不規則剥離が付く。事故剥離と考えられる。	Q75

第13図 53	剥	片	珪質頁岩	19.0	13.0	6.0	0.76	第2調査区 D 4 i 4 (23.937)		Q104

旧石器時代石器一覧表（調査区外出土遺物）

図版番号	器	種	石	材	計測値 長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	出土地区	備 考（調整・接合状況など）	遺物番号
第13図 54	ナイフ形石器		黒 曜	石	51.2	17.0	6.6	4.84	調査Ⅰ区 表土・表採	基部に二次加工。左辺に正方向と棒状反方向の押圧剥離。右辺は尖った工具の面接打撃による反方向の剥離。左辺に事故剥離がみられる。	Q30
55	ナイフ形石器		黒 曜	石	31.0	8.8	4.0	1.08	調査Ⅰ区 表土・表採	両側辺を押圧剥離で加工したナイフ形石器。	Q31
56	ナイフ形石器		黒 曜	石	(15.0)	9.0	3.0	(0.36)	調査Ⅰ区 表土・表採	ナイフ形石器の基部。小さな剥片を素材に，微細な押圧剥離で両側辺を加工してある。	Q32
57	ナイフ形石器		黒 曜	石	(15.5)	15.8	4.9	(1.00)	調査Ⅱ A区 表土・表採	ナイフ形石器の基部。素材は打面調整のある石刃。基部の両側辺に刃潰し加工による二次加工がみられる。	Q76
第14図 58	掻	器	黒 曜	石	24.4	13.9	4.5	2.12	調査Ⅰ区 表土・表採	素材剥片の端部にやや平坦な押圧剥離で刃部を形成している。	Q33
59	ナイフ形石器		黒 曜	石	26.0	16.0	6.0	2.62	調査Ⅰ区 表土・表採	左辺に押圧剥離の半らな二次加工。右辺に急角度の間接打撃による加工が施され，裏面は押圧剥離。	Q34
60	剥	片	チャート		26.8	38.4	12.3	9.85	調査Ⅰ区 表土・表採	打面欠損の剥片。	Q35
61	剥	片	黒 曜	石	28.0	14.0	5.0	1.00	調査Ⅱ A区 表土・表採	上方からの打撃による剥離。	Q92
62	石	核	瑪	瑙	64.2	38.4	27.5	49.00	調査Ⅰ区 表土・表採	石核素材は両極打撃により分割された剥片。正面に敲面の垂直打ちの打撃がみられる。	Q36
63	石核素材		チャート		59.6	47.9	73.3	184.00	調査Ⅰ区 表土・表採	円礫を硬いハンマーで叩き砕している。石核に形成する以前のもの。	Q37
64	剥	片	黒 曜	石	47.2	21.1	10.2	7.30	調査Ⅰ区 表土・表採	調整打面を持つ。裏面左辺手前の剥離は事故剥離または使用痕。石刃状の剥片。	Q38
65	剥	片	硬質頁岩		39.8	28.9	11.9	12.00	調査Ⅰ区 表土・表採	上方からの打撃による剥離。平坦打面を持つ。	Q39
66	剥	片	黒 曜	石	19.0	18.0	9.0	1.92	調査Ⅰ区 表土・表採	平坦打面。	Q93
67	剥	片	珪質頁岩		36.9	18.0	3.0	3.06	調査Ⅰ区 表土・表採	両極剥離もしくは事故剥離によって形成されたもの。背面に変質による傷あり。	Q40
第15図 68	剥	片	瑪	瑙	31.0	25.8	5.9	3.68	調査Ⅱ A区 表土・表採	切り子打面の剥片。剥離角110度。	Q77
69	剥	片	黒 曜	石	23.0	19.0	7.0	1.74	調査Ⅱ A区 表土・表採	上方からの打撃による剥離。剥離角90度。	Q94
70	剥	片	珪質頁岩		58.2	39.8	23.9	32.00	調査Ⅱ A区 表土・表採	打面を再生した剥片。右側辺に急作業面が残っている。	Q78
71	剥	片	黒 曜	石	20.0	29.0	7.0	2.18	調査Ⅱ A区 表土・表採	上方からの打撃による剥離。	Q95
72	剥	片	珪質頁岩		36.3	46.5	13.4	16.00	調査Ⅱ A区 表土・表採	打面側は山形になる大きな切り子打面。瓶形内形の石核の可能性がある。剥離角が小さく，底面まで抜けていない。	Q79

第15図 73	剥片	瑪瑙	32.0	11.0	6.0	1.28	調査ⅡA区 表土・表採	上方からの打撃による剥離。	Q96
74	剥片	チャート	32.0	16.0	13.0	3.58	調査Ⅰ区 表土・表採	上方からの打撃による剥離。	Q97
75	剥片	チャート	44.0	32.8	12.7	14.00	調査Ⅰ区 表土・表採	平坦打面。	Q41
76	剥片	黒曜石	50.8	25.4	10.5	6.20	調査ⅡA区 表土・表採	左側辺に使用痕と思われる微細で不規則な剥離がある。使用痕のつく刃角は65度。石刃状の剥片。	Q98

2　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構として，調査Ⅰ区の北東部，中央部，西部からそれぞれ１基ずつ，計３基の陥し穴を検出した。３基の陥し穴から遺物は出土していないが，その形態から縄文時代の遺構と判断した。直接的な関連や配置上の特徴は見られなかったが，規模が同程度であり，同時代に構築されたと考えられる。

調査Ⅰ区から出土した縄文時代の遺物は，縄文土器片50点，石器６点である。これらはすべて表土や後の時代の竪穴住居跡の覆土中から出土したものである。縄文土器の型式別では，前期後葉の浮島Ⅱ式６点，中期の阿玉台式１点，中期中葉の加曽利ＥⅠ式１点，加曽利ＥⅡ式２点，中期の加曽利Ｅ式と思われるもの４点，中期から後期の加曽利式と思われるもの19点，中期と思われるもの２点，時期不明なもの15点である。土器片はほとんどが深鉢形土器胴部または底部の小片で，接合・復元できるものはなかった。また，石器は，石鏃４点，石鏃の未製品１点，剥片１点である。石鏃の石材はチャート３点，黒曜石１点である。石鏃の未製品は珪質頁岩，剥片は黒曜石である。

ⅡＡ区から出土した縄文時代の遺物は，石器３点である。これらはすべて表土や後の時代の竪穴住居跡の覆土中から出土したものである。石器は，石鏃３点で，その石材はチャート２点，珪質頁岩１点である。

以下，それぞれの陥し穴の特徴について記述し，遺構に伴わない遺物については，時期不明なものを除いて，第19図と一覧表にて掲載する。

(1)　陥し穴

第１号陥し穴（第16図）

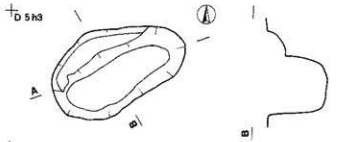
位置　調査Ⅰ区西部，Ｃ５h3区。

立地　標高25mの平坦な台地上に立地している。

規模と形状　平面形は長径2.26m，短径1.31mの楕円形で，深さ92cmである。底面は平坦で，楕円形を呈している。壁はほぼ垂直に立ち上がり，北西側は深さ30cmのところから緩やかに開く。

長径方向　Ｎ－64°－Ｅ

覆土　７層からなり，１～４層は自然堆積，５～７層はブロック状の堆積状況から，人為堆積と考えられる。



第16図　第１号陥し穴実測図

土層解説

1 黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
2 黒　褐　色　ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
3 暗　褐　色　ローム粒子を少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
4 暗　褐　色　ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まっている。
5 褐　　色　ローム粒子を中量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
6 褐　　色　ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まっている。
7 褐　　色　ローム中ブロック・粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘土質で，締まりがない。

所見　遺構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。詳しい時期は，出土遺物がないことから不明である。

第２号陥し穴（第17図）

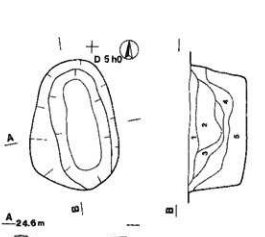
位置　調査Ⅰ区中央部，Ｃ５a9区。

立地　標高25mの平坦な台地上に立地している。

規模と形状　平面形は長径2.10m，短径1.40mの楕円形で，深さ95cmである。底面は平坦で，楕円形を呈している。壁はほぼ垂直に立ち上がり，南西側は深さ23cmのところから緩やかに開く。

長径方向　N－10°－W

覆土　５層からなり，自然堆積と考えられる。



第17図　第２号陥し穴実測図

土層解説

1 暗　褐　色　ローム粒子を少量含み，締まっている。
2 黒　褐　色　ローム粒子を少量含み，締まっている。
3 暗　褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，締まっている。
4 極暗褐色　ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み，締まっている。
5 褐　　色　ローム粒子を多量，ローム大ブロック・ローム小ブロックを少量含み，締まっている。

所見　遺構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。詳しい時期は，出土遺物がないことから不明である。

第３号陥し穴（第18図）

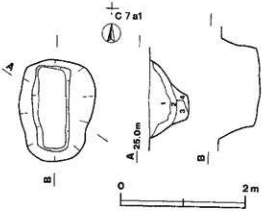
位置　調査Ⅰ区北東部，Ｃ６a0区。

立地　標高約25mの平坦な台地上に立地している。

規模と形状　平面形は長径1.62m，短径1.24mの楕円形で，深さ64cmである。底面は平坦で，楕円形を呈している。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

長径方向　N－0°

覆土　４層からなり，ロームを多く含み，人為堆積と考えられる。

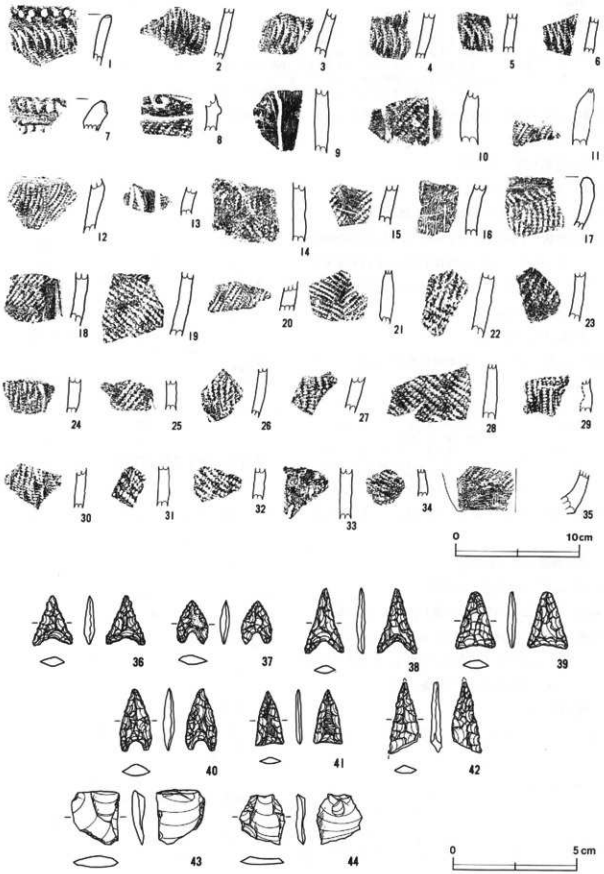


第18図　第３号陥し穴実測図

土層解説

1 暗　褐　色　ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量，炭化粒子を微量含み，粘性は弱い。
2 暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロックを少量含み，粘性は弱い。
3 暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み，粘性は弱い。
4 暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子を多量，ローム中ブロックを中量含み，粘性は弱い。

所見　遺構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。詳しい時期は，出土遺物がないことから不明である。



第19図　縄文時代の遺物実測図（土器・石器）

(2) 遺構に伴わない遺物（第19図）

縄文土器一覧表

群	時期	型式	図版番号	器種	器形の特徴及び文様	備考（TP）
Ⅰ	前期 後葉	浮島Ⅱ	第19図 1	深鉢形土器口縁部	口唇部に半截竹管による押捺文が，直下に貝殻波状文が施されている。	54
			2～6	深鉢形土器胴部	2～6は，貝殻波状文が施されている。	50, 51, 53, 56, 57
Ⅱ	中期	阿玉台	7	深鉢形土器口縁部	口唇部に斜位の爪形文が，直下に刺突文が施されている。	68
Ⅲ	中期	加曽利E Ⅰ	8	深鉢形土器口縁部	口縁部は隆帯及び沈線で渦巻文を描き，直下にＲＬの単節縄文が施されている。	74
Ⅳ		加曽利E Ⅱ	9，10	深鉢形土器胴部	9と10は，単節縄文を地文とし，垂下する沈線間を擦り消している。	79，84
Ⅴ	後葉	加曽利E	11	深鉢形土器口縁部	ＲＬの単節縄文が施されている。	70
			12～14	深鉢形土器胴部	12は，単節縄文が斜位に施されている。13は，単節縄文を地文とし，垂下する沈線間を擦り消している。14は，ＬＲの単節縄文が斜位に施されている。	65，69，81
Ⅵ	中期	不明	15，16	深鉢形土器胴部	15と16は，単節縄文を地文とし，渦消部に縦やかな条線文が施されている。	52，55
Ⅶ	中期 または 後期	加曽利E または 加曽利B	17	深鉢形土器口縁部	ＬＲの単節縄文が施されている。	60
			18～34	深鉢形土器胴部	18は，ＬＲの単節縄文が施され，沈線で区画された内を擦り消されている。19～34は，単節縄文が施されている。	58,59,61～64, 66,71～73,80, 75～78,82,83
			35	深鉢形土器 胴部～底部	ＲＬの単節縄文を地文とし，胴部下端は横位の磨きが施されている。	67

石器一覧表

図版番号	器種	石材	計測値 長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	出土地区（標高m）	備考（調整・接合状況など）	遺物番号
第19図 36	石鏃	チャート	21.8	17.6	4.5	1.00	調査Ⅰ区表土・表採	両面押圧剥離の左右対称形。側縁は直線的。基部の抉りは浅い「U」字状。縁部は鋸歯状を呈する。	Q20
37	石鏃	頁岩	19.9	13.0	4.0	0.71	調査Ⅰ区表土・表採	両面押圧剥離の左右対称形。上半部の側縁は直線的，下半部の側縁は湾曲している。基部の抉りは深い「U」字状。縁部は鋸歯状を呈する。	Q21
38	石鏃	チャート	28.9	17.9	4.9	0.99	調査Ⅰ区表土・表採	両面押圧剥離の左右対称形。側縁は直線的。基部の抉りは深い「U」字状。縁部は鋸歯状を呈する。	Q22
39	石鏃	チャート	25.4	17.9	3.8	1.28	調査Ⅰ区表土・表採	両面押圧剥離の左右対称形。側縁は直線的。基部の抉りは極めて浅い「U」字状。縁部は鋸歯状を呈する。	Q23
40	石鏃	チャート	27.8	14.1	4.9	0.72	調査Ⅰ区表土・表採	両面押圧剥離の左右対称形。上半部の側縁は直線的，下半部の側縁は湾曲している。基部の抉りは深い「U」字状。縁部は鋸歯状を呈する。	Q24
41	石鏃	珪質頁岩	24.3	13.0	2.8	1.28	調査ⅡA区表土	両面押圧剥離の左右対称形。側縁は直線的。基部の抉りは極めて浅い「U」字状。縁部は鋸歯状を呈する。	Q25
42	石鏃	チャート	31.7	13.7	4.2	1.54	調査ⅡA区表土・表採	両面押圧剥離の左右対称形。側縁は直線的。基部の欠損。縁部は鋸歯状を呈する。	Q26
43	石鏃未製品	珪質頁岩	24.3	21.8	5.9	2.92	調査Ⅰ区表土・表採	加工は押圧剥離。両面を加工しようとした未製品。	Q27
44	剥片	黒曜石	22.8	19.5	3.8	1.22	調査Ⅰ区表土・表採	上方からの打撃による剥離。平坦打面。	Q28

3　奈良・平安時代の遺構と遺物

当遺跡からは、奈良・平安時代の住居跡74軒，掘立柱建物跡27棟，堀１条，土坑73基が検出されている。これらの遺構は，機能的・規則的に配置され，集落としての役割を担っていることがうかがわれる。以下，それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について，記述していくことにする。

(1)　竪穴住居跡

当遺跡の竪穴住居跡は，Ⅰ区に66軒，ⅡＡ区に８軒が検出した。時期では奈良時代の住居跡が36軒，平安時代の住居跡が35軒，奈良・平安時代と考えられる住居跡が１軒である。古墳時代や10世紀代のものは確認されていない。

第１号住居跡（第20図）

位置　調査Ⅰ区北西部，Ｃ４e7区。

規模と平面形　本跡の西半分は調査区域外であることから，東西軸(1.17)ｍ，南北軸(3.30)ｍで，長方形または方形と推定される。

主軸方向　Ｎ－８°－Ｅ

壁　壁高は８～20cmで，外傾して立ち上がる。

床　全面が平坦で，締まっている。特に中央部が踏み固められている。

竈　北壁中央に砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部，煙道部と北壁面上部に貼られた粘土の一部が残存している。袖部は，掘り込まれた壁の角に貼り付けられた若干の粘土が残っている程度で，極めて残存状態が悪い。規模は，焚口部から煙道部まで67cm，最大幅(56)cm，壁外への掘り込み67cmである。火床部は，床面を２cmほど掘りくぼめており，火熱を受けて赤変しているが，あまり硬化していない。焚口部から奥45cmに第21図３の雲母片岩を立てて，埋め込んでいる。この雲母片岩は，火熱を受け，赤変していることから，支脚として利用されたものと思われる。煙道部は外傾して，緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

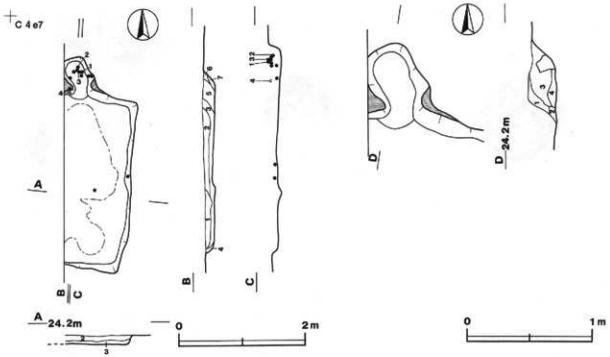
1	明　褐　色	焼土粒子を中量，ローム粒子・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
2	明赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子を多量，ローム粒子・炭化粒子・焼土大ブロック・焼土中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
3	黒　褐　色	ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
4	明　褐　色	ローム粒子・焼土粒子を多量，炭化粒子・焼土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。

覆土　７層からなり，自然堆積と思われる。

土層解説

1	暗　褐　色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
2	明　褐　色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
3	暗　褐　色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
4	褐　　色	ローム粒子を微量含み，粘性を帯び，締まっている。
5	明　褐　色	ローム粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
6	暗　褐　色	ローム粒子を少量，炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
7	暗　褐　色	ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量，焼土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。

遺物　土師器片189点，須恵器片198点，鉄製品１点（鉄鎌），石１点（支脚として利用されたと思われる雲母片岩）が出土している。遺物は，竈と住居跡全体の覆土中から出土しているが，竈内から出土したものは約17％，北半分から出土したものが約65％，南半分から出土したものが約11％で，その他のものが約７％である。特に竈付近の東壁寄りに約38％が集中している。また，竈を除いた遺物の出土層位は，覆土上層が約36％，覆土下層が約57％で，その他のものが約７％である。覆土が浅いこともあり，多くが細片で，ほとんど実測する



第20図　第１号住居跡実測図

ことができなかった。第21図１の土師器坏，２の須恵器高台付坏，５の須恵器甕が竈内と竈付近の覆土上層から，３の雲母片岩が焚口部から奥45cmの竈中央部から，４の鉄鏃が焚口部西側の壁際から，６の須恵器甕が東壁寄りの覆土上層からそれぞれ出土している。また，竈内から出土した１の土師器坏，２の須恵器高台付坏，５の須恵器甕などの土器片は竈奥に集中していることから，竈の補強材として利用されたと考えられるが，これらと接合した土器片が竈外の覆土上層から出土していることなどから，住居廃絶後に混入した可能性もある。

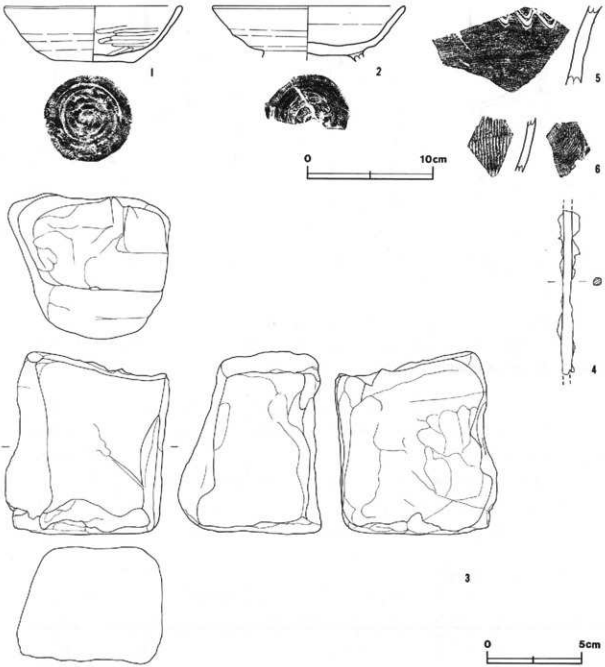
所見　時期は，遺構の形態や出土遺物から，平安時代前期（９世紀中葉）と考えられる。

第１号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第21図 1	坏 土師器	A 14.0 B 4.7 C 6.8	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ切り。	雲母 砂粒 にぶい橙色 普通	65%　P1 二次焼成 竈内 覆土上層（竈付近）
2	高台付坏 須恵器	A 15.2 B（4.5） E（0.7）	高台部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，直線的に立ち上がる。中位と下位に不明瞭な稜を持つ。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	長石 砂粒 にぶい橙色 普通	50%　P2 竈内 覆土上層 （竈付近）

図版番号	種　別	計測値				石　質	出土地点	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
3	石	14.5	13.0	11.5	3040	雲母片岩	竈火床部	Q1　支脚転用

図版番号	種　別	計測値				出土地点	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
4	鉄　鏃	8.8	0.6	0.4	5.80	竈焚口部西側の壁際	M1



第21図　第１号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器　種	部　分	器形・手法の特徴	備考(台帳番号，出土位置，色調など)
第21図 5	甕 須恵器	頸　部	内外面横ナデ，外面に2本撚曲による横走波状文が施されている。	TP1 竈内，覆土上層(竈付近) にぶい橙色
6	甕 須恵器	体　部	内外面ロクロナデ。外面平行タタキ，内面同心円状のアテ具痕有り。	TP2 覆土上層(東壁) 内面　黄灰色，外面　にぶい赤褐色

第２号住居跡（第22図）

位置　調査Ⅰ区北西部，Ｃ４c9区。

重複関係　本跡は第１号溝，第１号土坑と重複している。第１号溝が本跡の中央部覆土上層を，第１号土坑が

本跡の南壁寄りの覆土上層を掘り込んでいることから，いずれよりも本跡が古い。

規模と平面形　長軸3.50m，短軸3.25mの方形である。

主軸方向　N－12°－W

壁　壁高は60～70cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　南壁周辺の一部を除き，巡っている。上幅14～36cm，下幅４～11cm，深さ４～８cmで，断面形はU字状である。

床　全面が平坦である。全面に貼床が施されており，締まっている。特に，中央部が踏み固められている。

竈　北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落し，西袖の一部が攪乱を受けており，火床部，煙道部，東袖部，西袖部の前半部が残存している。規模は，焚口部から煙道部まで104cm，最大幅98cm，壁外への掘り込み73cmである。火床部は，床面を５cmほど掘りくぼめており，火熱を受け赤変しているが，あまり硬化していない。焚口部から45cmの竈奥に土製支脚を埋め込んでいる。煙道部は外傾して，緩やかな階段状に立ち上がる。

竈土層解説

1	褐　色	ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
2	暗褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロック・焼土粒子・粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
3	暗褐色	ローム粒子・粘土粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
4	暗褐色	ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を多量，焼土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
5	褐　色	灰褐色粘土粒子を多量，ローム粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。
6	黒褐色	炭化物・焼土粒子を多量，ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロックを中量，焼土中ブロック・灰を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
7	にぶい褐色	粘土ブロック層で，粘性を帯び，硬く締まっている。上面が赤化しているため，支脚の一部の可能性がある。
8	褐　色	ローム粒子を多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。

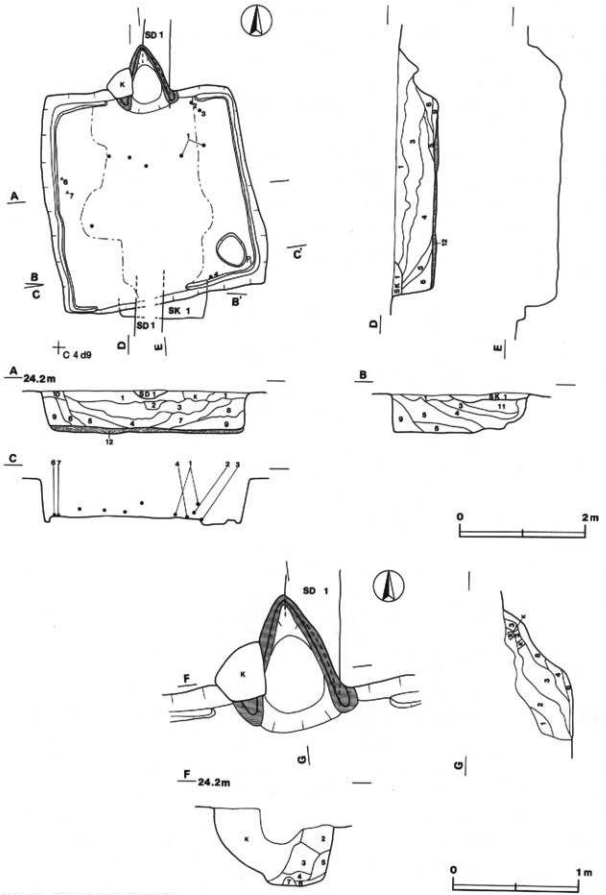
ピット　P1は南東コーナー部寄りに位置し，長径55cm，短径44cmの不整楕円形で，深さ11cmである。性格は不明である。

覆土　11層からなり，自然堆積と思われる。また，12層は貼床の層である。

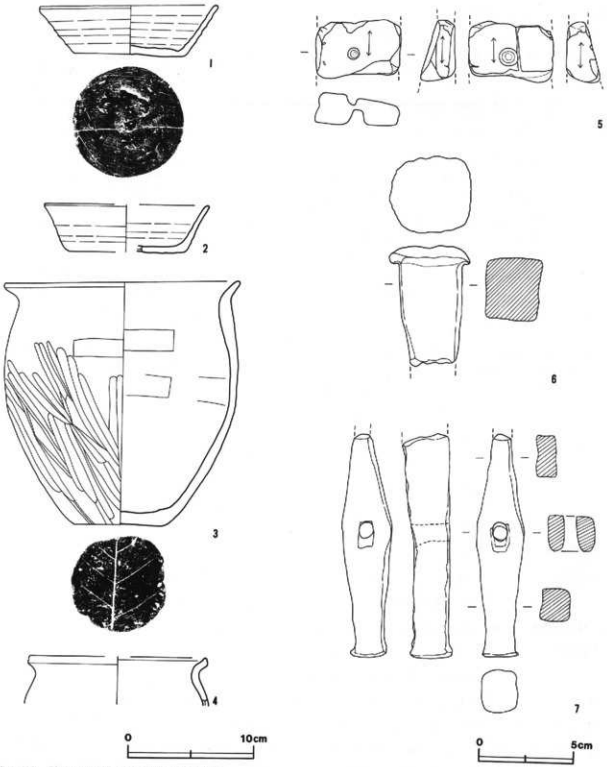
土層解説

1	黒褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロック・白色粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
2	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・黒褐色土を中量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
4	暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量，焼土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
5	褐　色	ローム粒子を中量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
6	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まりはない。
7	黒褐色	ローム粒子・黒褐色土小ブロックを中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
8	暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
9	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まりはない。
10	黒褐色	ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
11	褐　色	ローム粒子を少量，ローム小ブロック・焼土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
12	褐　色	ローム粒子・暗褐色土を微量含み，粘性は弱く，締まっている。

遺物　土師器片69点，須恵器片27点，土製品１点（支脚），石器１点（砥石），鉄製品２点（金床，金槌）が出土している。遺物は，竈と住居跡全体の覆土中から出土しているが，竈内から出土したものは約15%，北半分から出土したものが約62%，南半分から出土したものが約23%である。特に竈付近に集中している。また，竈を除いた遺物の出土層位は，覆土上層が約82%，覆土中層が約11%，覆土下層と床面直上が約７%である。ほとんどが床面から40cm以上の覆土上層からの出土で，細片である。竈内から出土した土製支脚は，大変脆くて崩れやすいため，計測不能である。第23図１の須恵器坏が東壁寄りの覆土中層から下層にかけて，２の須恵器坏が北東コーナー部寄りの覆土下層と竈内から，３の土師器小形甕の完形が北東コーナー部寄りの床直上から逆位で，４の土師器小形甕が南壁寄りの床面直上から，５の砥石が西壁寄りの覆土上層から，６の金床と７の金槌が西壁寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。



第22図　第２号住居跡実測図



第23図　第２号住居跡出土遺物実測図

所見　金床と金槌が出土しているが，その他の鉄製品は出土していない。また，鍛冶炉は確認されておらず，床面や覆土から多量の焼土や炭化材も出土していないことから，鍛冶関連の施設としての本跡の性格については不明である。しかし，当遺跡から多くの鉄製品（刀子，釘，鉄鏃，鎌など）や鉄滓，椀状滓が出土していることからも，本跡と鍛冶の関連性は高いと考えられる。時期は，遺構の形態や出土遺物から，奈良時代中期（8世紀中葉）と考えられる。

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第23図 1	坏 須恵器	A 14.1 B 4.1 C 8.8	体部から口縁部一部欠損。 平底。体部から口縁部にかけ，直線的に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。 底部回転ヘラ切り後，ヘラ削り。	雲母 砂粒 灰白色 普通	95% P3 覆土中層～下層 (東壁寄り)
2	坏 須恵器	A (13.0) B 3.8 C (9.4)	底部から口縁部の破片。平底。 体部から口縁部にかけ，直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。 底部回転ヘラ削り。	長石 砂粒 褐灰色 普通	30% P4 竈内覆土下層 (北東コーナー)
3	小形甕 土師器	A 18.7 B 19.5 C 7.4	体部から口縁部一部欠損。 平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁端部は外反する。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ，一部ヘラナデ。体部外面上位から下位へヘラ磨き。底部内外面ナデ。外面本葉痕有り。	長石 石英 雲母 砂粒 にぶい橙色 普通	95% P5 床面直上 (北東コーナー) 遺位
4	小形甕 土師器	A (14.0) B (3.8)	頸部から口縁部の破片。 口縁部は外反し，中位に明瞭な稜を持つ。口縁端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。	雲母 スコリア 褐色 普通	5% P6 床面直上 (南壁寄り)

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	出土地点	備考
5	砥石	(3.2)	4.5	1.7	(28)	凝灰岩	覆土上層(西壁寄り)	Q2 両面穿孔(孔径1cmと0.6cm)，未貫通

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	出土地点	備考
6	鉄 床	(6.4)	4.4	3.3	(337)	覆土下層(西壁寄り)	M2
7	金 鏃	(11.8)	2.5	2.6	(232)	覆土下層(西壁寄り)	M3

第3号住居跡（第24図）

位置 調査Ⅰ区北西部，C 4 e9区。

重複関係 本跡は第4号住居跡，第1号溝と重複している。第4号住居跡が本跡の東壁から南壁の覆土を，第1号溝が本跡の西壁の覆土上層を掘り込んでいることから，いずれよりも本跡が古い。

規模と平面形 長軸4.14m，短軸3.60mの長方形である。

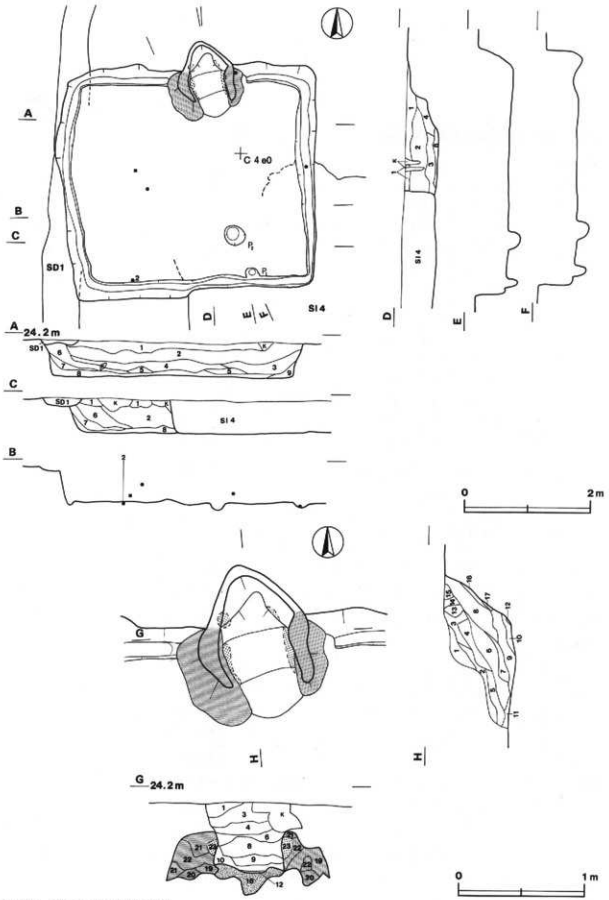
主軸方向 N－16°－W

壁 壁高は56～60cmで，垂直に立ち上がる。一部は外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅24～34cm，下幅5～14cm，深さ4～8cmで，断面形はU字状である。

床 全面が平坦で，締まっている。特に踏み固められた部分は確認されていない。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部，煙道部と両側の袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部まで123cm，最大幅118cm，壁外への掘り込み44cmである。火床部は，床面を22cmほど掘りくぼめた後，上に黒褐色土で貼床を施して，深さ5cmほどの火床面が作られている。その上面は火熱を受け，両袖部にかけて一部が赤変し，硬化している。袖部は，床面を3～6cmほど掘りくぼめた後，灰褐色粘土を壁際に貼り付けており，高さ28～35cmで，内側が火熱を受け赤変硬化している。煙道部は外傾して立ち上がる。土層は23層に分けられた。そのうち，1～17層は天井部や袖部の崩落土など，18層は火床部の貼床層，19～23層は袖部の上層である。



第24図　第３号住居跡実測図

第25図　第３号住居跡出土遺物実測図

竈土層解説

1	暗　褐　色	焼土小ブロックを中量，ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
2	褐　色	灰褐色粘土粒子を中量，ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，硬く締まっている。
3	褐　色	ローム粒子・焼土粒子を中量，焼土中ブロック・焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量，炭化粒子を微量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
4	暗　褐　色	焼土大ブロック・焼土中ブロックを多量，焼土小ブロック・焼土粒子を中量，ローム粒子・炭化物・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性を帯び，硬く締まっている。
5	暗　褐　色	焼土粒子を多量，焼土大ブロックを中量，ローム粒子・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性を帯び，硬く締まっている。
6	暗　褐　色	灰褐色粘土粒子を多量，焼土小ブロック・焼土粒子を中量，ローム粒子・炭化粒子・焼土中ブロックを少量含み，粘性を帯び，硬く締まっている。
7	暗赤褐色	焼土大ブロックを多量，焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を中量，ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量，炭化粒子を微量含み，粘性を帯び，締まっている。
8	暗赤褐色	焼土大ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を多量，ローム粒子・炭化物・炭化粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。天井部または袖部の崩落土と思われる。
9	にぶい赤褐色	焼土粒子・灰を中量，ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
10	黒　褐　色	炭化物を多量，ローム粒子・焼土小ブロック・灰を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。燃焼部の層と思われる。
11	暗　褐　色	ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
12	灰　褐　色	ローム粒子・灰褐色粘土粒子・砂を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
13	にぶい赤褐色	焼土粒子を中量，ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
14	灰　褐　色	砂を中量，ローム粒子・焼土粒子を少量，焼土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
15	にぶい赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子を中量，ローム粒子・灰褐色粘土粒子・砂を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
16	灰　褐　色	ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量，焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
17	暗　褐　色	ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性を帯び，締まっている。
18	黒　褐　色	ローム粒子を中量含み，粘性を帯び，締まりはない。
19	褐暗褐色	ローム粒子を少量含み，粘性を帯び，締まりはない。
20	褐　色	黒褐色土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
21	赤　灰　色	灰褐色粘土を多量，焼土粒子を少量，ローム粒子を微量含み，強い粘性を帯び，締まっている。
22	赤　灰　色	灰褐色粘土を多量，ローム粒子を微量含み，強い粘性を帯び，硬く締まっている。
23	赤　褐　色	焼土粒子を多量，灰褐色粘土を中量，灰を少量含み，粘性は弱く，締まっている。

ピット　２か所（P1・P2）。P1・P2ともに南東コーナー部寄りに位置し，P1は長径35cm，短径24cmの不整楕円形，P2は長径21cm，短径15cmの不整楕円形で，深さはいずれも20cmである。性格は不明である。

覆土　９層からなり，ブロック状の堆積状況がみられることから，人為堆積と思われる。

土層解説

1	黒　褐　色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
2	暗　褐　色	ローム粒子を中量，ローム小ブロック・黒色土小ブロックを少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
3	黒　褐　色	ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
4	灰　褐　色	灰褐色粘土を多量，ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性を帯び，締まっている。
5	灰　褐　色	灰褐色粘土・ローム粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み，粘性を帯び，締まっている。
6	暗　褐　色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，黒色土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
7	黒　褐　色	ローム小ブロック・ローム粒子・黒色土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
8	暗　褐　色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
9	褐　色	ローム小ブロックを中量，ローム粒子を少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性を帯び，締まっている。

遺物　土師器片66点，須恵器片31点が出土している。遺物は，住居跡全体の覆土中から出土しているが，ほとんど細片である。北西部から出土したものが約52%で一番多く，続いて南東部から出土したものが約19%，南西部から出土したものが約14%，北東部から出土したものが約７%で，その他が約８%である。竈からの出土はなかった。また，遺物の出土層位は，覆土上層が約76%と多く，覆土中層が約８%，覆土下層が約16%である。第25図１の須恵器高台付坏が覆土上層から，２の須恵器鉢が南壁寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。

所見　時期は，遺構の形態や出土遺物から，奈良時代中期（８世紀中葉）と考えられる。

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第25図 1	高台付坏 須恵器	B（2.5） D [13.2] E 12	高台部から底部の破片。平底。高台部は長く，「ハ」の字状に開く。	底部回転ヘラ削り後，ヘラナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	長石 石英 砂粒 褐灰色 普通	20% P7 覆土上層
2	鉢 須恵器	B（5.6） C [16.4]	底部から体部の破片。平底。体部は斜線的に立ち上がる。	体部外面平行タタキ，下位一方向のヘラ削り。底部ナデ。	雲母 砂粒 灰白色 普通	10% P8 覆土下層 （掘壁寄り）

第4号住居跡（第26図）

位置　調査I区北西部，C4e0区。

重複関係　本跡は第3号住居跡と重複している。本跡が第3号住居跡の南東コーナー部寄りの覆土を掘り込んでいることから，本跡が新しい。

規模と平面形　長軸3.75m，短軸3.20mの長方形である。

主軸方向　N－5°－W

壁　壁高は52～55cmで，垂直に立ち上がる。

壁溝　北西コーナー部周辺の一部を除き，巡っている。上幅4～20cm，下幅1～8cm，深さ2～13cmで，断面形はU字状である。

床　全面が平坦で，締まっている。特に踏み固められた部分は確認されていない。

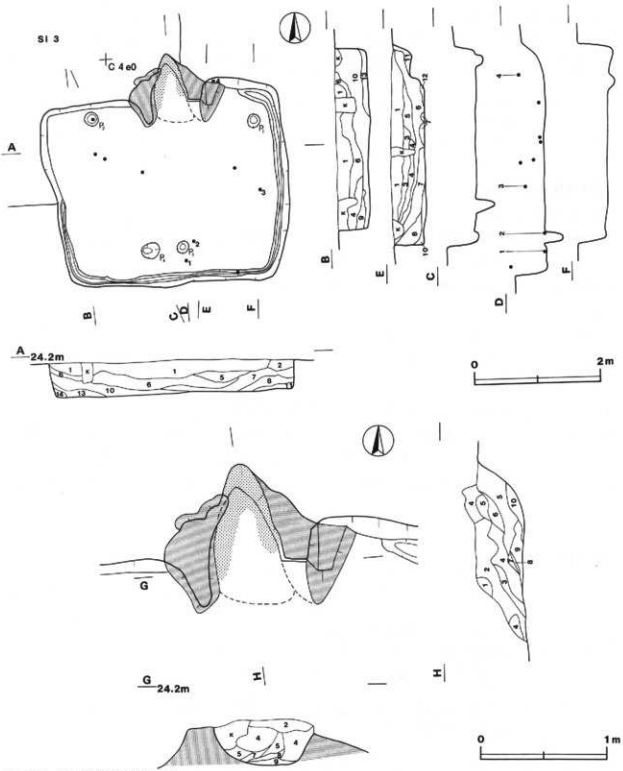
竈　北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落し，東側の袖部は攪乱を受けており，火床部，煙道部，西側の袖部と東側の袖部の半分が残存している。規模は，焚口部から煙道部まで112cm，最大幅152cm，壁外への掘り込み63cmである。火床部は，床面を8cmほど掘りくぼめており，火熱を受けて，中央部を除いた袖部との際から竈奥にかけて赤変しているが，硬化していない。煙道部は外傾して，緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

1	にぶい褐色	灰褐色粘土を多量，灰褐色粘土粒子を中量，ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。天井部の崩落土と思われる。
2	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，炭化粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量，焼土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。天井部の崩落土と思われる。
3	極暗褐色	ローム粒子を中量，炭化粒子・焼土大ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。天井部の崩落土と思われる。
4	にぶい褐色	灰褐色粘土を多量，ローム粒子・炭化物を少量，焼土小ブロックを微量含み，粘性を帯び，締まっている。天井部の崩落土と思われる。
5	暗赤褐色	焼土大ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を多量，灰褐色粘土粒子を中量，ローム粒子・炭化物を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
6	黒褐色	灰褐色粘土粒子を中量，焼土粒子を少量，焼土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
7	にぶい褐色	灰褐色粘土粒子を多量，焼土粒子を中量，ローム粒子・炭化物・焼土大ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
8	暗赤褐色	焼土大ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を多量，炭化物を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
9	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。
10	黒褐色	灰褐色粘土粒子を少量，ローム粒子・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。

ピット　4か所（P1～P4）。P1とP2は径20～22cmの円形で，深さ11～15cmである。P1は北東コーナー部に，P2は北西コーナー部に位置し，いずれも主柱穴と考えられる。P3は長径22cm，短径17cmの楕円形，P4は長径27cm，短径24cmの不整楕円形で，いずれも深さ30cmである。ともに南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　14層からなり，ブロック状の堆積状況がみられることから，人為堆積と思われる。



第26図　第４号住居跡実測図

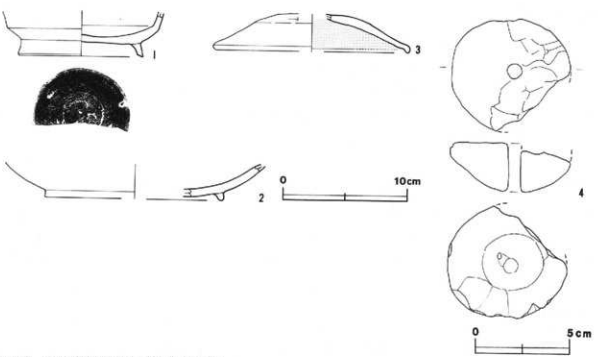
土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子を中量，ローム小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
2　褐　　色　ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まっている。
3　黒　褐　色　ローム粒子を中量，ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
4　黒　　色　ローム粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりがない。
5　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子を中量，焼土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
6　暗　褐　色　ローム小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量，ローム粒子・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
7　褐　　色　ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
8　暗　褐　色　ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量，炭化粒子・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。

9　暗　褐　色　　ローム粒子を中量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
10　極暗褐色　　ローム粒子を中量，灰褐色粘土粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
11　灰　褐　色　　砂混じりの灰褐色粘土を多量，ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
12　黒　　色　　ローム粒子を中量，炭化粒子・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
13　暗　褐　色　　ローム粒子を多量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。
14　黒　　色　　ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，ローム中ブロックを少量，炭化物を微量含み，粘性を帯び，締まっている。

遺物　土師器片81点，須恵器片57点，石製品１点（紡錘車）が出土している。遺物はほとんど細片で，竈と住居跡全体の覆土中から出土している。竈内から出土したものは約10%，北半分から出土したものが約21%，南半分から出土したものが多く，約62%で，その他が約７%である。特に，南西コーナー部寄りに約36%が集中している。また，竈を除いた遺物の出土層位は，覆土上層が約46%，覆土中層が約18%，覆土下層と床面直上が約32%で，その他が約４%である。第27図１の須恵器高台付坏が南壁寄りの床面直上から，２の須恵器盤が覆土下層から，３の須恵器蓋が東壁寄りの覆土中層から，４の紡錘車が竈東側の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見　第３号住居跡と床面の高さが同じであることから，廃絶した住居跡の床の一部を利用して構築された可能性がある。時期は，遺構の形態や出土遺物から，奈良時代後期（８世紀後葉）と考えられる。



第27図　第４号住居跡出土遺物実測図

第４号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第27図 1	高台付坏 須恵器	B〈3.5) D 9.9 E 1.2	高台部から体部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ロクロナデ，外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	砂粒 黄灰色 普通	30%　P9 床面直上 (南壁寄り)
2	盤 須恵器	B〈3.0) D [14.4] E 0.6	高台部から体部の破片。高台部は短く，直線的に開く。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	石英　雲母　砂粒 灰色 普通	20%　P10 覆土下層 (南壁寄り)

第27図 3	壺 須恵器	A［15.4］ B（3.1）	天井部から口縁部の破片。天井部は平坦で，中位に稜を持ち，緩やかに開く。口縁端部は屈曲して垂下する。	天井部内外面・口縁部内外面ロクロナデ。底部外周回転ヘラ削り，内面一部自然釉。	石英　砂粒 黄灰色 普通	10%　P11 覆土中層 (東壁寄り)

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	石質	出土地点	備考
4	紡錘車	(6.1)	6.4	2.6	0.8	(85)	凝灰岩	覆土上層(竈東脇)	Q3

第5号住居跡（第28・29図）

位置　調査Ⅰ区北西部，B 4 i0区。

重複関係　本跡は第20号掘立柱建物跡，第2号溝，第2・170号土坑と重複している。本跡が，第2号土坑と第170号土坑の覆土を掘り込んでいることから，本跡が新しい。また，第20号掘立柱建物跡が本跡の東南コーナー部寄りの覆土上層を，第2号溝が北部の覆土上層を掘り込んでいることから，いずれよりも本跡が古い。

規模と平面形　長軸4.10m，短軸4.05mの方形である。竈の両側2か所に棚部が付設されている。東側の棚は，長さ156cm，幅27～41cmの長方形で，床面からの高さは30cmである。西側の棚は，長さ143cm，幅52～64cmの不定形で，床面からの高さは32cmである。棚部を除いた規模は，長軸4.05m，短軸3.46mの長方形である。

主軸方向　N－0°

壁　壁高は49～59cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　全周している。上幅24～38cm，下幅5～15cm，深さ5～9cmで，断面形はU字状である。

床　全面が平坦である。中央部を残し，竈手前と四隅，出入口付近を掘り下げた後，黒褐色土と褐色土により貼床が施されている。特に，中央部が踏み固められ，締まっている。また，竈西側から西壁際にかけての床面に焼土塊が認められる。

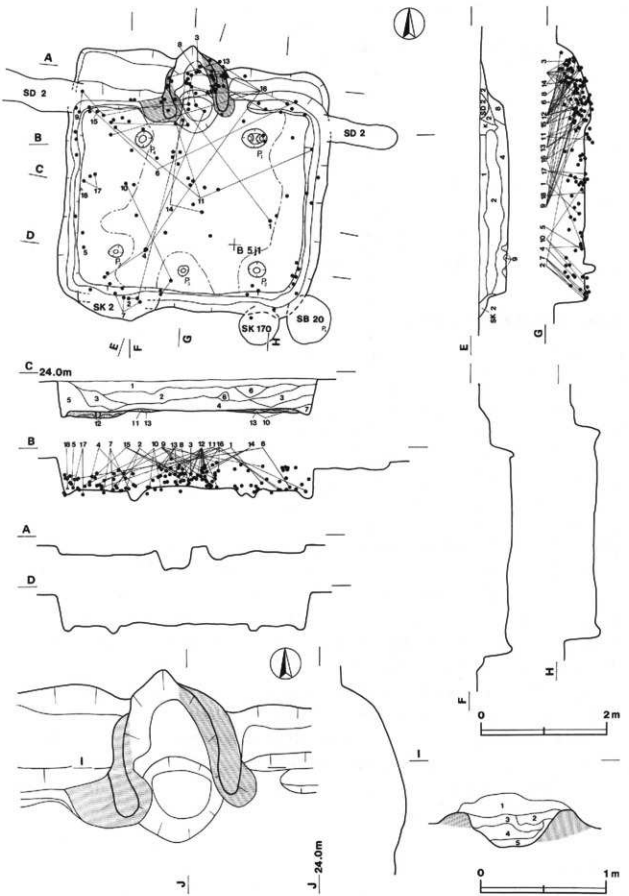
竈　北壁中央に砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部，煙道部と両側の袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部まで149cm，最大幅148cm，壁外への掘り込み15cmである。火床部は，床面を15cm掘りくぼめた後，黒褐色土を貼り，深さ9cmほどの火床面が作られている。その上面は火熱を受け，赤変しているが，あまり硬化していない。焚口部から98cm奥の火床部に第30図8の土師器鉢が逆位で埋め込まれている。あまり火熱を受けていないが，竈奥の中央に備えられていることから，支脚として利用されたと考えられる。煙道部は外傾して，緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

1	暗赤褐色	ローム粒子を中量，焼土粒子・褐色粘土粒子を少量，ローム小ブロック・炭化粒子・焼土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
2	暗赤褐色	ローム粒子・褐色粘土粒子を少量，炭化粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
3	暗赤褐色	焼土小ブロックを中量，炭化物・焼土粒子を少量，褐色粘土粒子を微量含み，粘性を帯び，締まりはない。
4	極暗赤褐色	焼土粒子・灰を中量，焼土小ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まりはない。
5	暗赤褐色	焼土粒子・灰を中量，炭化粒子を少量，焼土小ブロックを微量含み，粘性を帯び，締まりはない。

ピット　5か所（P1～P5）。P1～P4は長径24～41cm，短径19～29cmの楕円形で，深さ10～16cmである。各コーナー部寄りに位置し，いずれも主柱穴と考えられる。P5は径16cmの円形で，深さ21cmである。南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　9層からなり，ブロック状の堆積状況がみられることから，人為堆積と思われる。10層以下は貼床の層である。



第28図　第５号住居跡実測図

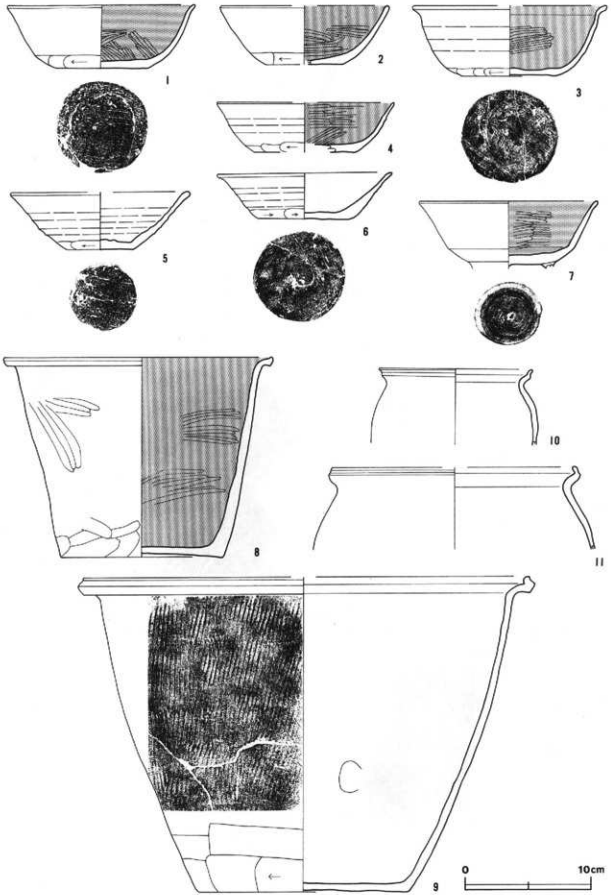
第29図　第5号住居跡掘り方実測図

土層解説

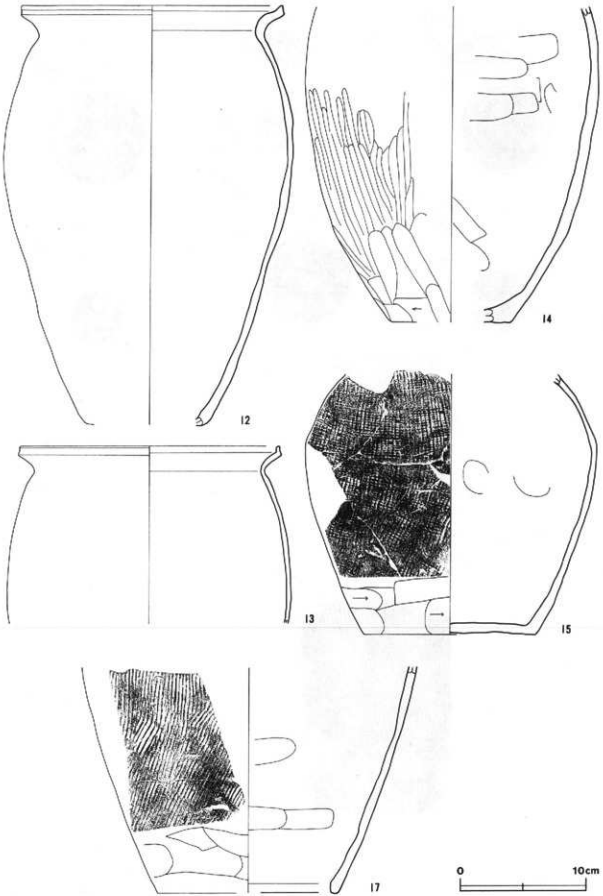
1	黒　褐　色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
2	極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
3	極暗褐色	焼土粒子を中量，ローム粒子・焼土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
4	極暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロック・焼土粒子を少量，焼土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
5	暗　褐　色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量，焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
6	黒　褐　色	焼土粒子を少量，ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
7	褐　　色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
8	灰　褐　色	褐色粘土粒子を中量，ローム粒子・焼土小ブロックを少量，焼土粒子を微量含み，粘性を帯び，締まっている。
9	褐　　色	ローム小ブロックを中量，褐色粘土小ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。
10	黒　褐　色	ローム粒子を少量，炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性を帯び，締まりはない。
11	褐　　色	ローム小ブロックを中量，ローム粒子・黒褐色土小ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。
12	褐　　色	黒褐色土小ブロックを微量含み，粘性を帯び，締まりはない。
13	褐　　色	ローム粒子を少量，ハードロームブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。

遺物　土師器片528点，須恵器片355点，鉄製品１点（刀子），礫２点が出土している。遺物は，竈と住居跡全体の覆土中から出土しているが，竈内から出土したものは約22%，北東部から出土したものが約23%，南東部から出土したものが約21%，南西部から出土したものが約14%，北西部から出土したものが約11%，その他が約９%である。特に，東壁寄りに約44%が集中している。また，竈を除いた遺物の出土層位は，覆土上層が約22%，覆土中層が約11%，覆土下層と床面直上が約54%で一番多く，その他が約13%である。特に顕著なことは，実測可能であった遺物の多くが竈内から出土しており，そのすべてが住居跡の覆土中から出土した土器片と接合していることである。竈内から出土した遺物の接合関係をみてみると，第30図１の土師器坏が東壁寄りの覆土下層から，３の土師器坏が東壁寄りの覆土下層，西壁寄りの覆土上層から，９の須恵器鉢が竈東側の覆土下層と竈西側の覆土中層から，第31図12の土師器甕が竈手前と南壁寄りの覆土中層から，13の土師器甕が竈西脇と西壁寄りの覆土中層から，14の土師器甕が中央部の覆土中層から，15の須恵器甕が西壁寄りの覆土下層から，第32図16の須恵器瓶が南壁寄りの覆土中層，西壁寄りと東壁寄りの覆土下層から，第31図17の須恵器瓶が西壁寄りの覆土下層，東壁寄りの覆土中層から出土している破片とそれぞれ接合している。また，竈内から出土した多くの土器片は，火熱を受けておらず，住居の覆土中から出土した破片と多くが接合することから，竈の補強材として利用されたものではなく，住居廃絶後に廃棄されたものと考えられる。

所見　時期は，遺構の形態や出土遺物から，平安時代前期（９世紀中葉）と考えられる。



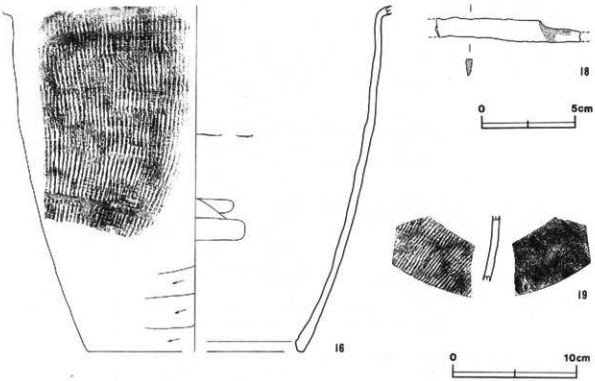
第30図　第５号住居跡出土遺物実測図（１）



第31図　第５号住居跡出土遺物実測図（２）

第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第30図 1	坏 土師器	A 14.9 B 5.2 C 7.5	体部・口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁端部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部外面回転ヘラ削り後，一方向のヘラ削り。	砂粒 内面　黒褐色 外面　にぶい褐色 普通	80%　P12 内面黒色処理 竈内（竈西補） 覆土下層 （東壁寄り）
2	坏 土師器	A [13.4] B 4.7 C [6.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部外面回転ヘラ削り後，一方向のヘラ削り。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	50%　P13 内面黒色処理 覆土下層 （南壁寄り）
3	坏 土師器	A [15.5] B 5.6 C 7.5	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がり，中位に不明瞭な稜を持つ。口縁端部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部外面回転ヘラ削り後，一方向のヘラ削り。	スコリア　砂粒 内面　黒褐色 外面　にぶい褐色 普通	40%　P14 内面黒色処理 竈内 覆土下層（東壁寄り） 覆土上層（南壁寄り）
4	坏 土師器	A [14.4] B 4.0 C [8.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がり，中位に不明瞭な稜を持つ。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部外面回転ヘラ削り後，ナデ。	雲母　スコリア 砂粒 内面　黒色 外面　にぶい褐色 普通	35%　P16 内面黒色処理 覆土下層 （南西コーナー）
5	坏 須恵器	A [14.4] B 4.6 C 5.3	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。底部外面回転ヘラ削り後，一方向のヘラ削り。	長石　石英　雲母 砂粒 灰黄色 普通	50%　P15 覆土中層 （西壁寄り）
6	坏 須恵器	A 13.9 B 3.8 C 7.4	体部・口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部外面回転ヘラ削り後，一方向のヘラ削り。	長石　石英　雲母 砂粒 灰色 普通	80%　P17 覆土上層（西壁寄り） 覆土中層（東壁寄り） 覆土下層（南東コーナー北西コーナー）
7	高台付坏 土師器	A 14.2 B (5.3) E (0.5)	高台部から口縁部の破片。高台部は短く，直線的に開く。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がり，下位に明瞭な稜を持つ。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部外面回転ヘラ切り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	砂粒 内面　黒褐色 外面　橙色 普通	50%　P18 内面黒色処理 覆土下層 （南壁寄り）
8	鉢 土師器	A [21.4] B 15.9 C 12.9	体部から口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，直線的に立ち上がる。口縁部は垂直に外反して，端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部外面横ナデ，一部上位ヘラ磨き。下位ヘラ削り。内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部外面ナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	60%　P19 内面黒色処理 竈内（中央部）
9	鉢 須恵器	A [35.4] B 25.1 C 16.8	体部・口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は垂直に外反して，中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられた後，上に折り返される。	口縁部内外面ロクロナデ。体部外面平行タタキ，下位ヘラ削り。内面アテ具痕有り，底内外面ナデ。	雲母　砂粒 にぶい黄橙色 普通	70%　P20 竈内 覆土中層 （竈西側） 覆土下層 （竈東側）
10	小形甕 土師器	A 12.2 B (6.0)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。	石英　雲母　砂粒 スコリア 明赤褐色 普通	20%　P21 覆土中層 （西壁寄り） 覆土下層 （南壁寄り） 床面直上 （南壁寄り）
11	甕 土師器	A [19.4] B (6.5)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，端部はつまみ上げられ，口唇部直上に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。	長石　石英　雲母 スコリア にぶい橙色 普通	20%　P22 覆土下層 （東壁寄り） 覆土中層 （竈手前・竈西側）



第32図　第５号住居跡出土遺物実測図（３）

第31図 12	甕 土師器	A 20.8 B 33.4 C［9.8］	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，端部はつまみ上げられ，口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。	雲母　スコリア 砂粒 黒褐色 普通	60%　P23 二次焼成 竈内 覆土中層 （優手前・南壁寄り）
13	甕 土師器	A 20.5 B（14.1）	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，端部はつまみ上げられ，口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。	長石　石英　雲母 砂粒 にぶい橙色 普通	30%　P24 竈内 覆土中層 （竈西脇・西壁寄り）
14	甕 土師器	B（25.6） C［9.6］	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ナデ。内面ヘラナデ。外面中位ヘラ磨き，下位ヘラ削り。	石英　雲母　砂粒 スコリア 橙色 普通	25%　P25 竈内 覆土中層 （中央部）
15	甕 須恵器	B（20.7） C 13.7	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面格子タタキ，下位一方向のヘラ削り。内面アテ具痕有り。底部ナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	30%　P26 二次焼成 竈内 覆土下層 （西壁寄り）
第32図 16	甑 須恵器	B（27.7） C［17.4］	底部から体部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面平行タタキ，下位一方向のヘラ削り。内面ヘラナデ，輪積痕有り。	石英　雲母　砂粒 にぶい橙色 普通	40%　P27 竈内 覆土中層（南壁寄り） 覆土下層 （西壁寄り・東壁寄り）
第31図 17	甑 須恵器	B（18.4） C［14.4］	底部から体部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面平行タタキ，下位一方向のヘラ削り。内面ヘラ削り。	雲母　砂粒 にぶい橙色 普通	30%　P28 覆土下層 （西壁寄り） 覆土中層 （東壁寄り）

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第32図18	刀子	(7.7)	1.2	0.3	(6.05)	覆土下層(西壁寄り)	M4

図版番号	器種	部分	器形・手法の特徴	備考(台帳番号, 出土位置, 色調など)
19	須恵器	体部	内外面ロクロナデ。外面平行タタキ，内面同心円状のアテ具痕有り。	TP4 覆土下層(東壁寄り) 内面　黄灰色，外面　赤褐色・自然釉

第6号住居跡（第33図）

位置　調査Ⅰ区北西部，C 5 e2区。

規模と平面形　長軸3.92m，短軸3.88mの方形である。

主軸方向　N－4°－W

壁　壁高は48～50cmで，垂直に立ち上がる。

壁溝　北東コーナー部付近を除き，巡っている。上幅17～34cm，下幅4～12cm，深さ3～7cmで，断面形はU字状である。

床　全面が平坦で，締まっている。特に，中央部が踏み固められている。

竈　北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部，煙道部と両側の袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部まで135cm，最大幅156cm，壁外への掘り込み48cmである。火床部は，床面を5cmほど掘りくぼめており，火熱を受け赤変硬化している。煙道部は外傾して立ち上がる。多くの土器片が竈内や袖部内から出土しているが，火熱を受けていることから，これらは竈の補強材と利用されていたものと思われる。竈中央に逆位に置かれた第34図7の土師器小形甕は，若干の火熱を受けているので，その下に逆位で置かれた1の須恵器坏とともに，支脚として利用されたものと考えられる。

竈土層解説

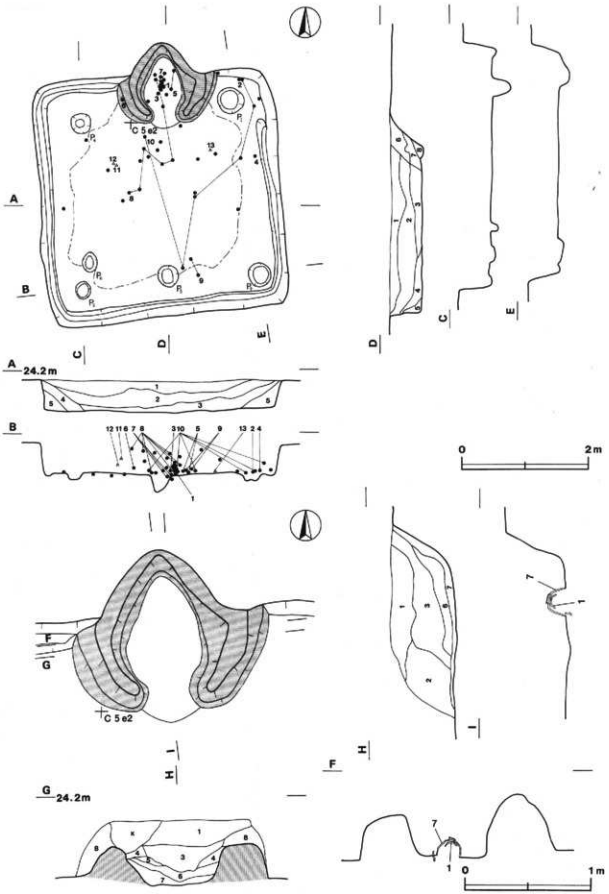
1　暗　褐　色　ローム粒子を多量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を中量，ローム中ブロック・炭化粒子・焼土中ブロック・灰褐色粘土中ブロックを少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
2　暗　褐　色　ローム粒子を多量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量，炭化物・炭化粒子・焼土粒子・黒色土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
3　灰　褐　色　ローム粒子を多量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を中量，ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性を帯び，硬く締まっている。天井部の崩落土の可能性がある。
4　灰　褐　色　ローム粒子・焼土粒子を中量，ローム小ブロック・炭化粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。天井部の崩落土の可能性がある。
5　にぶい褐色　焼土粒子を多量，焼土小ブロックを中量，ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子・焼土中ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。天井部または袖部の崩落土と思われる。
6　赤　褐　色　焼土大ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土小ブロックを多量，灰褐色粘土中ブロック・灰褐色粘土小ブロックを中量，炭化粒子を少量含み，粘性を帯び，締まりはない。天井部または袖部の崩落土と思われる。
7　明赤灰色　焼土小ブロック・焼土粒子を多量，炭化物・炭化粒子・焼土中ブロックを中量，ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性を帯び，締まりはない。
8　黒　褐　色　ローム粒子を中量，炭化粒子・焼土粒子を少量含み，粘性を帯び，硬く締まっている。

ピット　6か所（P1～P6）。P1とP3は長径27～41cm，短径24～37cmの楕円形，P2とP4は径31～37cmの円形で，深さ10～31cmである。各コーナー部寄りに位置し，いずれも主柱穴と考えられる。P5は長径36cm，短径32cmの楕円形で，深さ28cmである。南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。P6は南西コーナー部のP3付近に位置し，長径30cm，短径22cmの不整楕円形で，深さ13cmである。性格は不明である。

覆土　8層からなり，自然堆積と思われる。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
2　暗　褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム大ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
3　暗　褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量，ローム粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。



第33図　第６号住居跡実測図

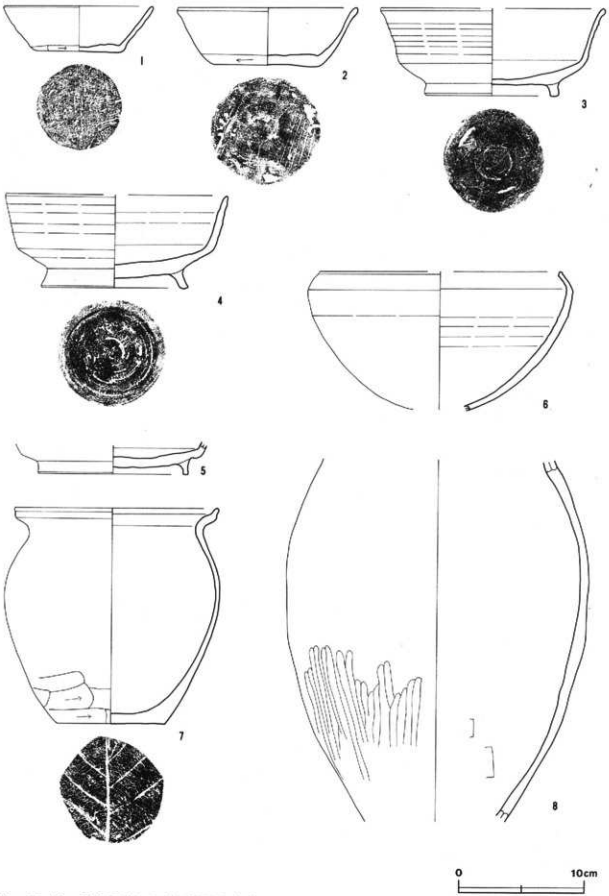
4　明　褐　色　　ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
5　暗　褐　色　　ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
6　黒　褐　色　　ローム粒子・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
7　暗　褐　色　　ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
8　暗　褐　色　　ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。

遺物　土師器片128点，須恵器片124点，鉄製品４点（刀子３，不明鉄製品１），礫４点が出土している。遺物は，竈と住居跡全体の覆土中から出土しているが，平均的に分布しており，竈内から出土したものは約16%，北東部から出土したものが約16%，南東部から出土したものが約９%，南西部から出土したものが約11%，北西部から出土したものが約14%，その他が約33%である。また，竈を除いた遺物の出土層位は，覆土上層が約37%，覆土中層が約33%，覆土下層と床面直上が約30%で，平均的である。第34図１の須恵器坏と７の土師器小形甕は，ともに竈内中央から逆位で，１の上に７が重ねて置かれたような状態で，２の須恵器坏が北東コーナー部寄りの覆土下層から，３と５の須恵器高台付坏が竈内から，４の須恵器高台付坏が東壁寄りの覆土下層から，６の須恵器鉢が竈西袖の上から，第35図10の須恵器甕が東壁寄りの覆土上層と北東コーナー部・東壁寄り・竈手前の覆土下層から，11・12・13の刀子が竈手前の覆土中層と床面直上から，14の不明鉄製品が竈東脇の床面直上からそれぞれ出土している。また，竈内の６層の上から出土した３の須恵器高台付坏は，火熱を受けていないことから，竈の補強材として利用されたものではなく，住居廃絶後に廃棄されたと考えられる。

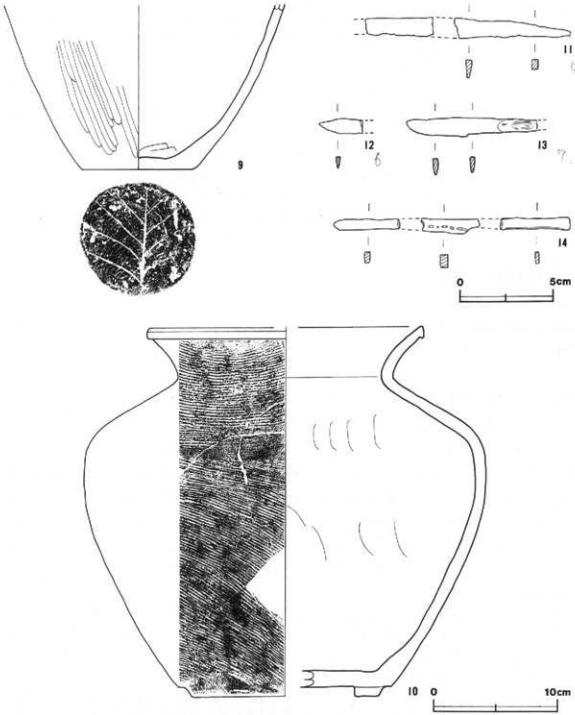
所見　時期は，遺構の形態や出土遺物から，奈良時代後期（８世紀後葉）と考えられる。

第６号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第34図 1	坏 須恵器	A 11.8 B 4.8 C 6.6	体部・口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，直線的に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位一方向の手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り後，ヘラ削り。	長石　石英　砂粒 灰色 普通	90%　P32 竈内（中央部） 7の小形甕の下に逆位で
2	坏 須恵器	A 14.2 B 4.7 C 8.4	体部・口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後，ヘラ削り。	長石　石英　雲母 砂粒 灰黄色 普通	70%　P33 覆土下層 （北東コーナー）
3	高台付坏 須恵器	A [17.8] B 7.0 D 10.6 E 1.0	体部・口縁部の一部欠損。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がり，下位に不明瞭な稜を持つ。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	長石　石英　雲母 砂粒 にぶい橙色 普通	70%　P34 竈内
4	高台付坏 須恵器	A [17.7] B 7.3 D 11.6 E 1.3	高台部から口縁部の破片。高台部は長く，「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がり，下位に明瞭な稜を持つ。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	長石　雲母　砂粒 灰黄色 普通	60%　P35 覆土下層 （東壁寄り）
5	高台付坏 須恵器	B（2.6） D 11.8 E 1.1	高台部から底部の破片。平底。高台部は「ハ」の字状に開く。	底部回転ヘラ削り後，ヘラ削り。高台部貼り付け，ロクロナデ。	長石　石英　砂粒 褐灰色 普通	30%　P36 竈内
6	鉢 須恵器	A [19.0] B (11.0)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁端部は内傾する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。	雲母　砂粒 灰色 普通	20%　P37 竈内（西袖の上） 仏具鉢の模倣
7	小形甕 土師器	A 16.0 B 17.2 C 8.6	体部から口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反し，端部はつまみ上げられ，口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ，外面下位一方向のヘラ削り。底部木葉痕有り。	長石　石英　雲母 砂粒 にぶい褐色 普通	70%　P38 竈内（中央部） 1の坏の上に逆位で



第34図　第６号住居跡出土遺物実測図（１）



第35図　第６号住居跡出土遺物実測図（２）

第34図 8	甕 土師器	B（28.4）	体部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ナデ。外面中位から下位ヘラ磨き。内面ヘラナデ。	石英　雲母　砂粒 スコリア にぶい褐色 普通	30%　P39 二次焼成 竈内 覆土上層（中央部） 覆土中層（中央部） 覆土下層（竈手前）
9	甕 土師器	B（13.2） C　8.9	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ナデ。外面中位から下位ヘラ磨き。底部外面木葉痕，内面ヘラナデ。	長石　石英　砂粒 にぶい赤褐色 普通	20%　P40 覆土下層 （南壁寄り）

第35図 10	甕 須恵器	A [21.8] B 29.8 C 17.0	高台部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がり，上位で最大径を有する。口縁部は強く外反し，端部はつまみ上げられた後，折り返される。	口縁部内外面ロクロナデ。体部外面平行タタキ。内面アテ具痕有り，一部ヘラナデ。底部ヘラナデ。高台部貼り付け。	長石　砂粒 褐灰色 普通	35%　P41 覆土上層 (東壁寄り) 覆土下層 (北東コーナー，東壁寄り，竈手前)

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	出土地点	備考
11	刀子	(11.0)	1.1	0.4	(7.00)	覆土中層（竈手前）	M5
12	刀子	(2.4)	0.8	0.2	(0.96)	覆土中層（竈手前）	M6
13	刀子	(7.0)	1.0	0.3	(4.40)	床面直上（竈手前）	M7
14	不明鉄製品	(12.6)	0.7	0.4	(5.60)	床面直上（竈東脇）	M8

第7号住居跡（第36図）

位置　調査Ⅰ区北西部，C 5 f2区。

規模と平面形　本跡の南西部が調査区域外であることから，長軸(4.90)m，短軸(2.11)mの長方形と推定される。

主軸方向　N－3°－W

壁　壁高は47～53cmで，垂直に立ち上がる。

壁溝　北東，北西，南東の各コーナー部周辺の一部に確認されている。上幅15～30cm，下幅2～8cm，深さ2～6cmで，断面形はU字状である。

床　全面が平坦で，締まっている。特に，壁溝周辺と南部を除いて，踏み固められている。

竈　北壁中央やや東寄りに砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部，煙道部と両側の袖部が残存しているが，袖部の張り出しは小さい。規模は，焚口部から煙道部まで136cm，最大幅101cm，壁外への掘り込み84cmである。火床部は，床面を6cmほど掘りくぼめており，中央部は火熱を受け赤変しているが，あまり硬化していない。煙道部は外傾して，緩やかに立ち上がる。東袖の中から第37図2の須恵器坏が出土していることから，土器片を竈の補強材として利用していると思われる。

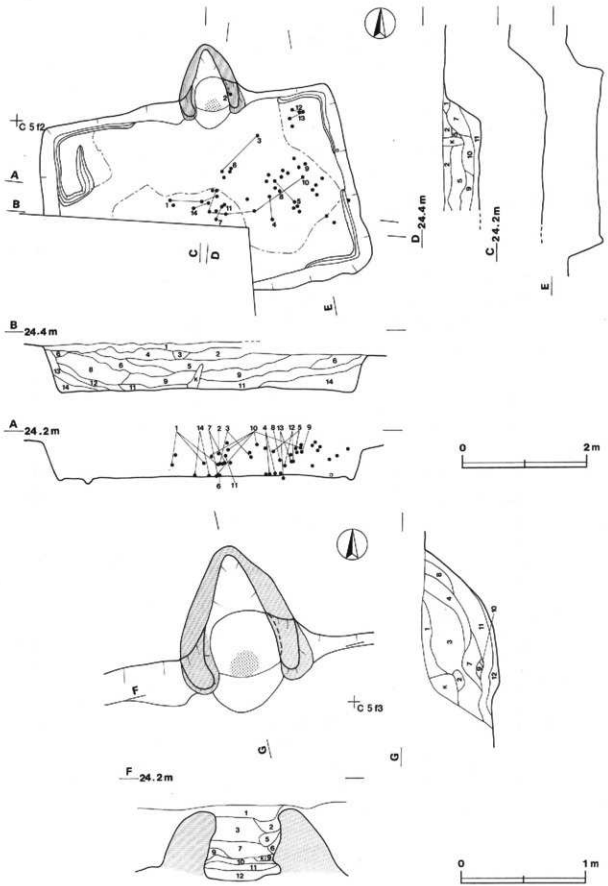
竈土層解説

1　黒褐褐色　ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，炭化物・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
2　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子を中量，炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。
3　暗　褐　色　ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，炭化粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。
4　暗　褐　色　ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，ローム中ブロック・炭化物・焼土中ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
5　極暗褐色　ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，炭化粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
6　にぶい褐色　灰褐色粘土粒子を多量，ローム粒子・炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
7　暗　褐　色　焼土粒子を多量，焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。
8　暗　褐　色　灰褐色粘土粒子を多量，焼土小ブロックを中量，ローム粒子・炭化物を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
9　にぶい褐色　灰褐色粘土粒子を多量，炭化粒子・焼土粒子を微量含み，粘性を帯び，締まっている。
10　暗赤褐色　焼土大ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を多量，灰褐色粘土粒子を中量，ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
11　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を中量，焼土小ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まりはない。
12　暗赤褐色　ローム粒子を多量，ローム小ブロック・灰褐色粘土粒子を中量，ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土粒子・灰を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。

覆土　14層からなり，ブロック状の堆積状況がみられることから，人為堆積と思われる。

土層解説

1　黒　褐　色　焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
2　極暗褐色　ローム粒子を少量，ローム小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。



第36図　第７号住居跡実測図

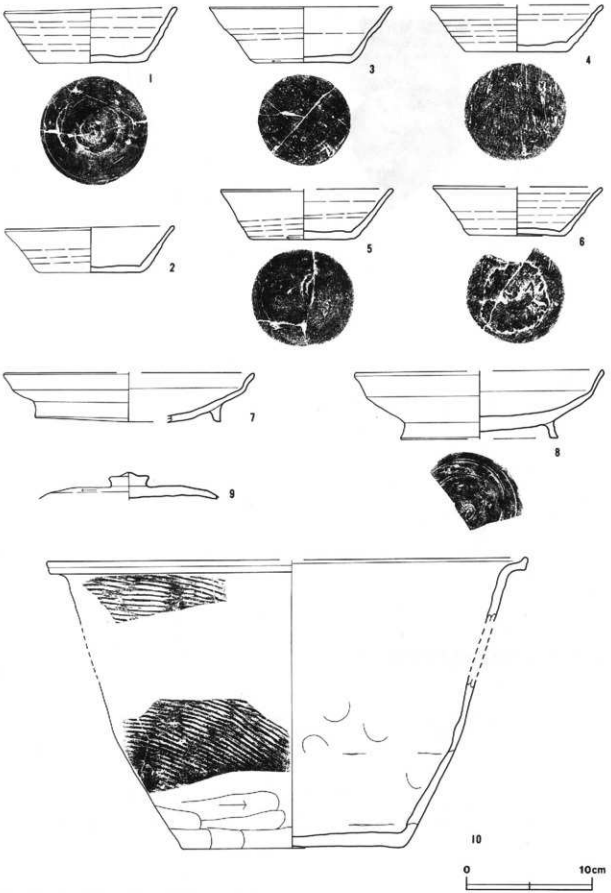
3　黒　褐　色　ローム粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
4　黒　褐　色　ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
5　灰　褐　色　ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
6　暗　褐　色　ローム小ブロック・粒子を中量，黒褐色土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
7　灰　褐　色　灰褐色粘土粒子を中量，灰褐色粘土小ブロックを少量，ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
8　褐　　色　ローム小ブロック・粒子を中量，ローム中ブロックを少量，焼土粒子・黒褐色土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
9　極暗褐色　ローム粒子・焼土粒子を少量，焼土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
10　灰　褐　色　灰褐色粘土粒子を少量，焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土小ブロックを微量含み，粘性を帯び，締まっている。
11　暗　褐　色　ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量，灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
12　黒　褐　色　ローム粒子・黒褐色土小ブロックを中量，焼土粒子を微量含み，粘性を帯び，締まりはない。
13　黒　　色　ローム粒子を少量含み，粘性を帯び，締まりはない。
14　黒　褐　色　ローム粒子を中量含み，粘性を帯び，締まっている。

遺物　土師器片136点，須恵器片209点，炭化種子１点（山モモ）が出土している。遺物は，竈と住居跡全体の覆土中から出土しているが，中央部から東壁にかけて多量に集中している。竈内から出土したものは約23%，東半分から出土したものが約57%，西半分から出土したものが約11%，その他が約９%である。また，竈を除いた遺物の出土層位は，覆土上層が約50%，覆土中層が約29%，覆土下層と床面直上が約21%で，覆土上層からの出土が一番多い。このように遺物の出土範囲が一部に集中していること，接合した土器片同士はまとまって出土していないこと，土層の堆積状況が人為堆積と思われることから，遺物は住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。また，東壁寄りの覆土下層から出土した炭化種子は，自然科学分析の結果，「古代モモ」と呼ばれる小型のもので，食用後に投棄されたと考えられる。モモは腐りやすいため，遺跡周辺で栽培されていた可能性があり，当時の植生の一端がうかがえる。第37図１の須恵器坏が中央部から西壁寄りの覆土中層または下層にかけて，２の須恵器坏が竈内から，３の須恵器坏が竈手前の覆土中層から下層にかけて，ならびに東壁と北壁寄りの覆土上層から中層かけて，４の須恵器坏が中央部の床面直上から，６の須恵器坏が竈手前の覆土中層と南西コーナー部寄りの覆土下層から，７の須恵器盤が北東コーナー部寄りの覆土中層と中央部の覆土下層から，10の須恵器鉢が中央部から東壁寄りの覆土上層から下層にかけて，第38図12と第39図13の土師器甕が北東コーナー部の覆土中層から床面直上にかけて，14の土師器甕が中央部の覆土下層から床面直上にかけてそれぞれ出土している。

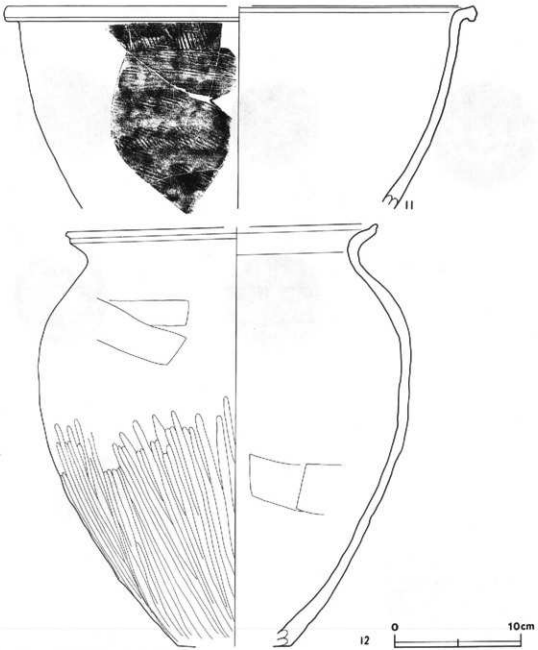
所見　時期は，遺構の形態や出土遺物から，奈良時代後期（８世紀後葉）と考えられる。

第７号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第37図 1	坏 須恵器	A 13.6 B 4.4 C 8.4	口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後，ナデ。	長石　砂粒 黒灰色 普通	90%　P42 覆土中層～下層 (西壁寄り， 中央部)
2	坏 須恵器	A 13.4 B 3.7 C 8.0	体部・口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，直線的に立ち上がる。口縁端部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後，ヘラ削り。	雲母　砂粒 にぶい黄橙色 普通	80%　P43 竈内
3	坏 須恵器	A 14.5 B 4.4 C 7.4	体部・口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，下位に明瞭な稜を持ち，初め直線的に，中位から内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後，ヘラ削り。	砂粒 黄灰色 普通	70%　P44 覆土上層～中層 (東壁寄り， 北壁寄り) 覆土中層～下層 (竈手前)
4	坏 須恵器	A 13.6 B 3.7 C 8.1	体部・口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，直線的に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部一方向の手持ヘラ削り後，ナデ。	長石　石英　雲母 砂粒 灰白色 普通	70%　P45 床面直上 (中央部)

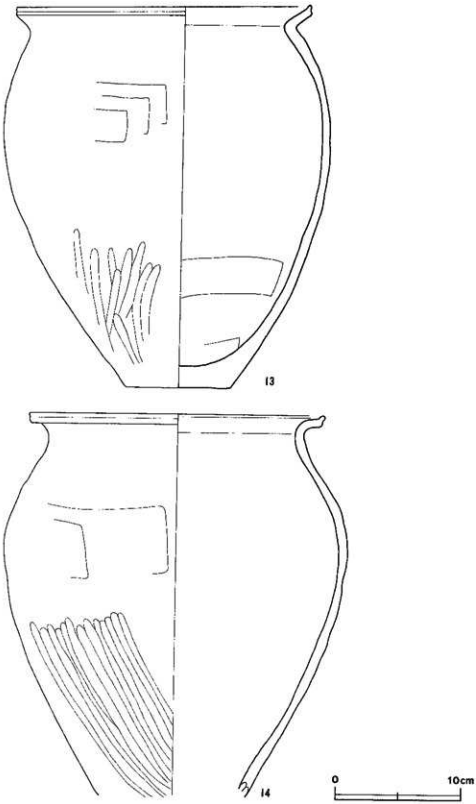


第37図　第７号住居跡出土遺物実測図（１）



第38図　第７号住居跡出土遺物実測図（２）

第37図 5	坏 須恵器	A［13.8］ B　4.0 C　8.0	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ切り後，ヘラ削り。	雲母　砂粒 灰色 普通	50%　P46 覆土上層 (中央部東壁寄り) 覆土中層 (南東コーナー)
6	坏 須恵器	A［13.5］ B　3.9 C　7.6	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後，ナデ。	長石　石英　雲母 スコリア　砂粒 暗灰黄色 普通	40%　P47 覆土中層 (竈手前) 覆土下層 (南西コーナー)



第39図　第７号住居跡出土遺物実測図（３）

第37図 7	甕 須恵器	A [19.8] B 3.9 D 14.8 E 1.5	高台部から口縁部の破片。高台部は短く，「八」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がり，中位に稜を持つ。口縁端部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	砂粒 褐灰色 普通	40%　P48 覆土上層～中層 (北東コーナー) 覆土下層 (中央部)	
8	甕 須恵器	A [19.8] B 5.4 D [12.5] E 1.4	高台部から口縁部の破片。高台部は長く「八」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ，直線的に立ち上がり，中位に明瞭な稜を持つ。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	砂粒 黄灰色 普通	40%　P49 覆土上層 (北西コーナー) 覆土中層 (中央部，北東コーナー) 覆土下層(南西コーナー)	
9	壺 須恵器	B (2.2) F 3.2 G 1.1	つまみから口縁部の破片。屬平なボタン状のつまみが付く。天井部は平坦で，中位に稜を持ち，緩やかに開く。	つまみ・天井部内外面・口縁部内外面ロクロナデ。頂部外面回転ヘラ削り。	石英　雲母　砂粒 灰白色 普通	60%　P50 覆土上層 (東壁寄り) 覆土中層 (東南コーナー)	
10	鉢 須恵器	A [18.5] B [23.0] C [17.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，直線的に立ち上がる。口縁部は強く外反し，端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面ロクロナデ。体部外面平行タタキ，ド位ヘラ削り。内面アテ具痕，輪積痕有り。底部ナデ。	石英　雲母　砂粒 黄灰色 普通	40%　P51A・B 覆土上層(東壁寄り) 覆土中層 (中央部) 覆土下層 (中央部)	
第38図 11	鉢 須恵器	A [37.2] B (16.1)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し，ドに折り返される。	口縁部内外面ロクロナデ。体部外面平行タタキ後，ナデ。内面ナデ。	雲母　砂粒 灰色 普通	5%　P52 覆土中層 (中央部， 南西コーナー)	
12	甕 土師器	A 24.7 B 33.6 C 9.0	底部から体部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反し，中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられ，口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。一部ヘラナデ。外面中位から下位ヘラ削り。	石英　雲母　砂粒 にぶい褐色 普通	65%　P54 覆土中層～下層 (中央部， 北東コーナー)	
第39図 13	甕 土師器	A 23.5 B 30.3 C [8.3]	底部から体部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反し，中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられ，口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。一部ヘラナデ。外面中位から下位ヘラ削り。	長石　雲母　砂粒 スコリア にぶい褐色 普通	95%　P53 二次焼成 覆土中層 床面直上 (中央部，北東コーナー)	
14	甕 土師器	A 23.4 B (30.3)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反し，中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。一部ヘラナデ。外面中位から下位ヘラ削り。	石英　雲母　砂粒 にぶい褐色 普通	60%　P55 覆土下層 床面直上 (中央部)	

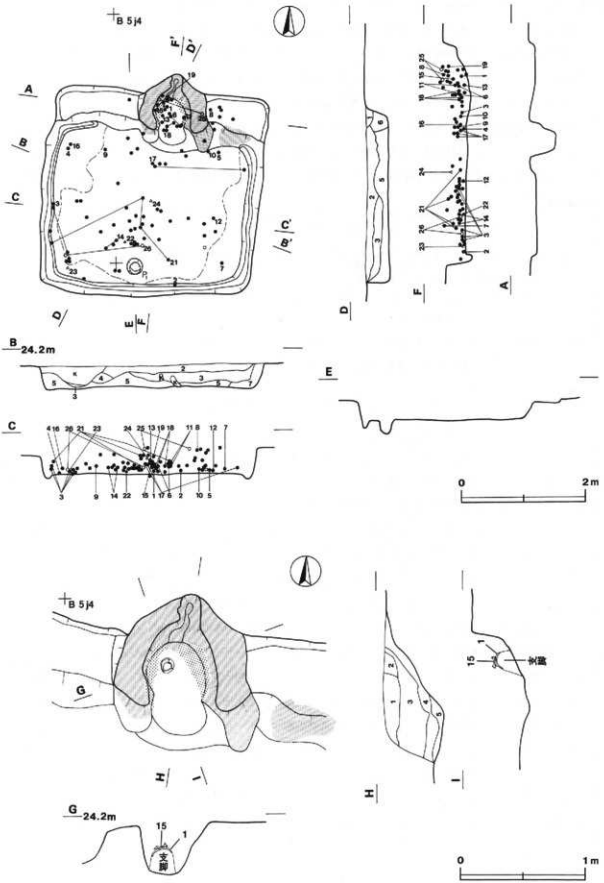
第8号住居跡（第40図）

位置　調査Ⅰ区北西部，B 5 j4区。

規模と平面形　長軸3.56m，短軸3.40mの方形である。竈の両側2か所に棚部が付設されている。東側の棚は，長さ101cm，幅43～66cmの不整長方形で，床面からの高さは26cmである。西側の棚は，長さ131cm，幅44～54cmの不整長方形で，床面からの高さは26cmである。東側の棚の床面直上から第41図8の土師器高台付坏をはじめ，土師器甕や須恵器甕などの土器片が出土していることから，土器などの生活用具を置く棚として，機能していたと考えられる。棚部を除いた規模は，長軸3.56m，短軸3.00mの長方形である。

主軸方向　N－5°－E

壁　壁高は32～43cmで，外傾して立ち上がる。



第40図　第８号住居跡実測図

壁溝　全周している。上幅18～30cm，下幅３～13cm，深さ６～10cmで，断面形はU字状である。

床　全面平坦である。全面に貼床が施されており，締まっている。特に中央部が踏み固められている。

竈　北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部，煙道部と両側の袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部まで126cm，最大幅113cm，壁外への掘り込み26cmである。火床部は，床面を８cmほど掘りくぼめており，火熱を受けて若干赤変しているが，あまり硬化していない。焚口部から70cm奥の火床部中央や西寄りに土製支脚を埋め込んでいる。この支脚は大変もろくて崩れやすく，実測不可能であった。また，第41図１の土師器坏と15の土師器高台付皿は支脚の上に重なって，逆位で出土し，ススの付着がみられるため，同時に支脚として利用されたと思われる。煙道部は緩やかに，のち垂直に立ち上がる。

竈土層解説

1	黒　褐　色	ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
2	暗　褐　色	焼土粒子を多量，ローム粒子を中量，炭化物・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
3	極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を多量，焼土中ブロック・焼土小ブロック・灰褐色粘土小ブロックを中量，ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子を少量含み，粘性を帯び，硬く締まっている。天井部の崩落土と思われる。
4	黒　褐　色	焼土粒子を多量，ローム粒子・焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を中量，ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土大ブロック・焼土中ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。天井部の崩落土と思われる。
5	黒　褐　色	焼土粒子を多量，ローム粒子・焼土小ブロックを中量，ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土中ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている

ピット　P１は径25cmの円形で，深さ23cmである。南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。

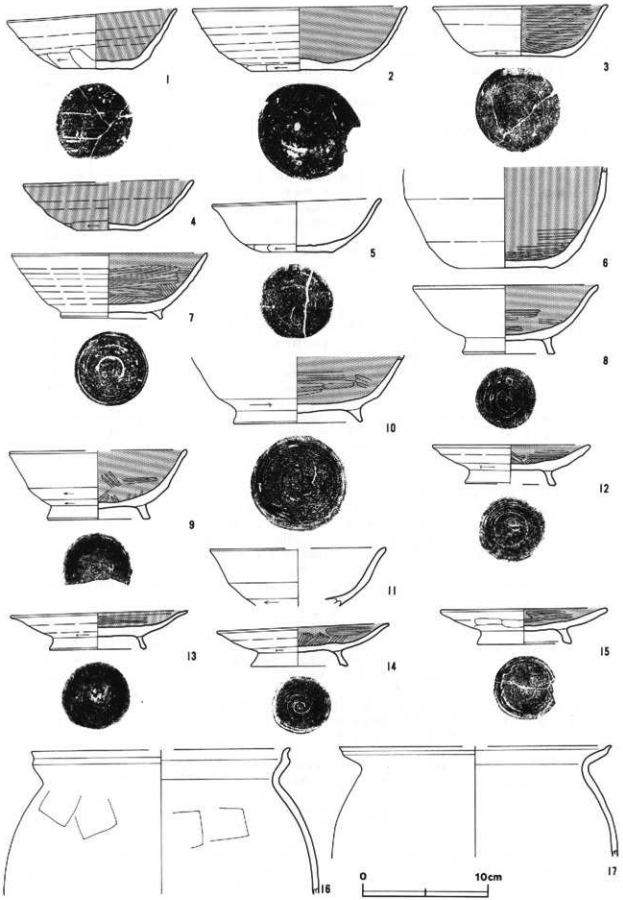
覆土　７層からなり，ブロック状の堆積状況がみられることから，人為堆積と思われる。

土層解説

1	黒　褐　色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
2	暗　褐　色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
3	暗　褐　色	ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
4	暗　褐　色	ローム粒子・灰褐色粘土小ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。
5	灰　褐　色	ローム小ブロック・ローム粒子・暗褐色土を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
6	暗　褐　色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
7	暗　褐　色	ローム粒子・褐色土を少量含み，粘性は弱く，締まっている。

遺物　土師器片501点，須恵器片165点，灰釉陶器１点，緑釉陶器１点，土製品２点（紡錘車，支脚），鉄製品２点（刀子，釘）が出土している。遺物は，竈と住居跡全体の覆土中から出土しているが，竈と南壁寄りに集中している。竈内から出土したものは約25%，北半分から出土したものが約24%，南半分から出土したものが約42%，その他が約９%である。また，竈を除いた遺物の出土層位は，覆土上層が約30%，覆土中層が約42%，覆土下層と床面直上が約27%で，掘り方部分から出土したものが約１%である。第41図１の上師器坏（完形）と６の土師器椀，11の須恵器高台付坏，13と15の土師器高台付皿，第42図18と19の土師器甕が竈内から，第41図５の須恵器坏が竈東側の覆土下層から，８の土師器高台付坏が東側の棚部から，10の上師器高台付坏が竈東側の覆土下層から，16の土師器甕が北西コーナー部寄りの覆土下層から一括で，第42図20の緑釉陶器椀が南壁寄りの覆土上層から，21の灰釉陶器長頸瓶が中央部の覆土上層と南壁寄り，および西壁寄りの覆土中層から，22の紡錘車が中央部の覆土下層から，23の釘が南西コーナー部寄りの覆土下層から，24の刀子が中央部の覆土上層からそれぞれ出土している。竈内から出土した土器片の多くは，火熱を受けておらず，二次焼成はみられないことから，住居廃絶後に廃棄されたものと思われる。また，出土した20の椀は猿投窯産黒笹90号窯式，21の長頸瓶は二川窯産のもので，９世紀中葉に搬入されたものと考えられる。

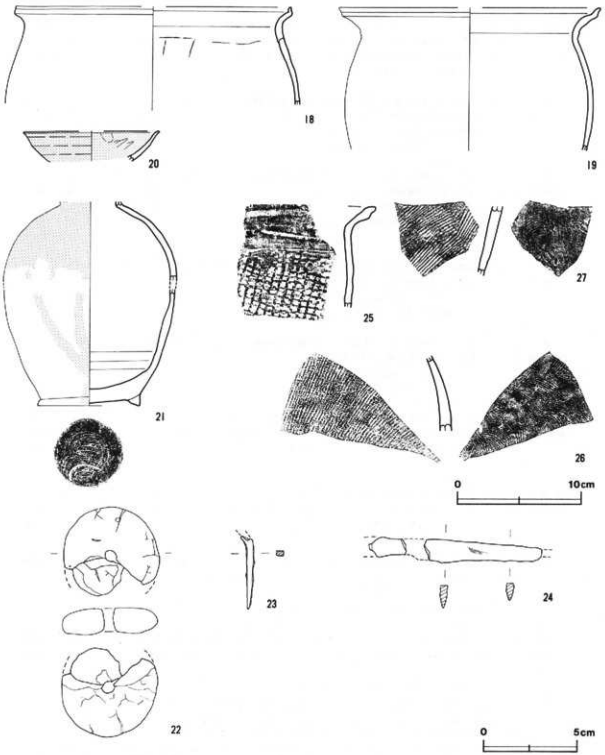
所見　時期は，遺構の形態や出土遺物から，平安時代前期（９世紀中葉）と考えられる。



第41図　第８号住居跡出土遺物実測図（１）

第８号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
部41図 1	坏 土師器	A 13.5 B 4.9 C 5.8	平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位手持ちヘラ削り。底部手持ちヘラ削り。	石英　雲母　砂粒 橙色 普通	100%　P59 内面黒色処理 竈内（支脚転用）
2	坏 土師器	A 16.9 B 5.0 C 7.9	口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，下位に明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り後，ナデ。	長石　石英　雲母 スコリア　砂粒 内面　黒色 外面　にぶい橙色 普通	80%　P60 内面黒色処理 覆土下層 （南壁寄り）
3	坏 土師器	A 14.0 B 4.1 C 6.8	体部・口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁端部は強く外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位回転ヘラ削り。内面から底部にかけヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後，ナデ。	砂粒 内面　黒色 外面　にぶい黄橙色 普通	70%　P62 内面黒色処理 覆土中層（西壁寄り） 覆土下層（南南部，西壁寄り，北西コーナー）
4	坏 土師器	A [13.6] B 3.9 C 5.2	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位手持ちヘラ削り。底部手持ちヘラ削り後，ナデ。	雲母　砂粒 灰黄褐色 普通	40%　P63 内外面黒色処理 覆土下層 （北西コーナー）
5	坏 須恵器	A 13.5 B 4.2 C 5.6	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，下位に不明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁端部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後，ナデ。	スコリア　砂粒 にぶい黄橙色 普通	80%　P61 竈内 覆土下層 （竈東側）
6	椀 土師器	B (16.0) C 7.4	底部から体部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後，ナデ。	雲母　砂粒 橙色 普通	40%　P64 内面黒色処理 竈内
7	高台付坏 土師器	A 15.5 B 5.3 D 8.0 E 0.6	口縁部の一部欠損。高台部は短く，「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁端部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部外面回転ヘラ削り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	長石　石英　雲母 スコリア　砂粒 内面　黒色 外面　にぶい橙色 普通	90%　P66 内面黒色処理 覆土下層 （南東コーナー）
8	高台付坏 土師器	A 14.8 B 5.5 D 7.2 E 1.3	高台部から口縁部の破片。高台部は長く，「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁端部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部外面回転ヘラ削り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	砂粒 内面　黒色 外面　にぶい褐色 普通	50%　P67 内面黒色処理 東脇溝部
9	高台付坏 土師器	A [14.0] B 5.5 D 8.0 E 1.2	高台部から口縁部の破片。高台部は長く，「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ，中位に明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り，内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部外面回転ヘラ削り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	砂粒 内面　黒褐色 外面　にぶい橙色 普通	40%　P68 内面黒色処理 覆土中層 （北西コーナー）
10	高台付坏 土師器	B (5.2) D 10.2 E 1.4	高台部から口縁部の破片。高台部は長く，「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ，下位に明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り，内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部外面回転ヘラ削り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	雲母　砂粒 灰褐色 普通	50%　P69 内面黒色処理 覆土下層 （竈東側）
11	高台付坏 須恵器	A [14.0] B (4.6)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，下位に不明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁端部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位回転ヘラ削り。	雲母　スコリア 砂粒 にぶい黄橙色 普通	20%　P65 竈内
12	高台付皿 土師器	A 12.5 B 3.2 D [7.2] E 1.2	体部・口縁部の一部欠損。高台部は長く，「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ，中位と下位に明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り，内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部外面回転ヘラ削り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	砂粒 内面　黒褐色 外面　にぶい橙色 普通	70%　P70 内面黒色処理 覆土下層 （東壁寄り）
13	高台付皿 土師器	A 14.0 B 3.0 D 7.7 E 1.0	高台部から口縁部の破片。高台部は長く，「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ，中位と下位に明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁端部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り，内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部外面回転ヘラ削り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	長石　雲母　砂粒 スコリア 橙色 普通	60%　P71 内面黒色処理 竈内



第42図　第８号住居跡出土遺物実測図（２）

第41図 14	高台付皿 土師器	A B D E	13.6 3.4 7.7 1.2	高台部から口縁部の破片。 高台部は長く，「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ，中位と下位に明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁端部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り，内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部外面回転ヘラ削り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	砂粒 内面　黒色 外面　にぶい褐色 普通	60%　P72 内面黒色処理 覆土下層 (中央部南寄り)

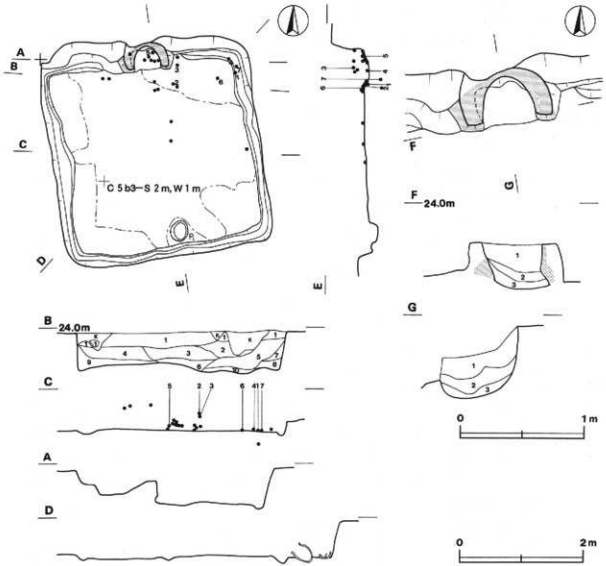
第41図 15	高台付皿 上 師 器	A 13.2 B 2.8 D 7.4 E 1.2	高台部からは口縁部の破片。高台部は長く，「八」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ，中位に明瞭な棱を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位ヘラナデ，内面ヘラ磨き。底部外面回転ヘラ潰り後，ナデ高台部貼り付け，ロクロナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	50% P73 内面黒色処理 竈内 支脚転用
16	甕 上 師 器	A [20.6] B (11.5)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し，中位に棱を持っている。端部はつまみ上げられ，強く外反する。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ，一部ヘラナデ。	石英 雲母 砂粒 明赤褐色 普通	30% P74 覆土下層 (北西コーナー)
17	甕 上 師 器	A [21.7] B (8.7)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，端部はつまみ上げられている。口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 にぶい褐色 普通	10% P75 覆土中層 (竈手前) 覆土下層 (東壁寄り)
第42図 18	甕 上 師 器	A [22.0] B (7.8)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，中位に棱を持っている。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。内面一部ヘラナデ。	石英 雲母 砂粒 スコリア 橙色 普通	10% P76 竈内
19	甕 土 師 器	A [21.0] B (11.4)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，端部はつまみ上げられている。口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。	石英 雲母 砂粒 スコリア にぶい褐色 普通	5% P77 竈内
20	椀 緑釉陶器	A [11.0] B (2.4)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。口縁部内面指頭痕。体部内面ヘラ磨き。	砂粒 オリーブ灰色 良好	5% P623 覆土上層（南壁寄り） 9世紀中葉以降 (猿投窯産黒笹90号窯式)
21	長頸瓶 灰釉陶器	B [15.4] D 8.3 E 0.9	高台部から体部の破片。高台部は短く，「八」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。上位で最大径を有する。	体部内外面ロクロナデ。底部回転糸切後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	砂粒 灰色 良好	30% P79 覆土上層（中央部） 覆土中層（南壁寄り，西壁寄り）9世紀中葉以降（二川窯系）

図版番号	種 別	計 測 値					出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
22	紡 錘 車	(4.7)	(5.2)	1.4	0.5	(32)	覆土下層(中央部)	DP1

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
23	釘	(3.9)	0.5	0.3	(1.70)	覆土下層(南西コーナー部)	M9
24	刀 子	(9.3)	1.3	0.4	(7.35)	覆土上層(中央部)	M10

図版番号	器 種	部 分	器 形 ・ 手 法 の 特 徴	備考(台帳番号，出土位置，色調など)
25	鉢 須恵器	体 部 ～ 口縁部	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は強く外反し，端部はつまみ上げられている。口縁部内外面横ナデ，体部外面格子タタキ。	TP5 竈内 にぶい橙色
26	甕 須恵器	体 部	内外面ロクロナデ。外面平行タタキ，内面同心円状のアテ具痕有り。	TP6 覆土下層（南西コーナー，南壁寄り） 内面 黄灰色，外面 灰褐色・全面自然釉
27	甕 須恵器	体 部	内外面ロクロナデ，外面平行タタキ。	TP7 覆土上層 内面 黄灰色，外面 にぶい赤褐色

第９号住居跡（第43図）



第43図　第９号住居跡実測図

位置　調査Ⅰ区北西部，Ｃ５b3区。

規模と平面形　長軸3.66m，短軸3.33mの長方形である。

主軸方向　Ｎ－10°－Ｗ

壁　壁高は21～62cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　全周している。上幅13～36cm，下幅３～20cm，深さ２～６cmで，断面形はＵ字状である。

床　全面が平坦で，締まっている。特に，中央部が踏み固められている。

竈　北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部，煙道部と両側の袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部まで43cm，最大幅91cmで，壁に粘土を貼り付けて袖部を作っている。火床部は，床面を10cmほど掘りくぼめており，火熱を受けているが，赤変硬化していない。両袖部の内側が一部赤変している。煙道部は外傾して，ほぼ垂直に立ち上がる。竈内から出土した第44図５の須恵器高盤は，一部に二次焼成を受けているので，支脚として利用されたものと思われる。

覆土層解説

1 灰 褐 色　灰褐色粘土粒子を少量，焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
2 暗 赤 褐 色　焼土粒子を少量，焼土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
3 にぶい褐色　焼土粒子を少量，ローム粒子・焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。

ピット　P1は長径32cm，短径28cmの楕円形で，深さ16cmである。南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　10層からなり，自然堆積と思われる。

土層解説

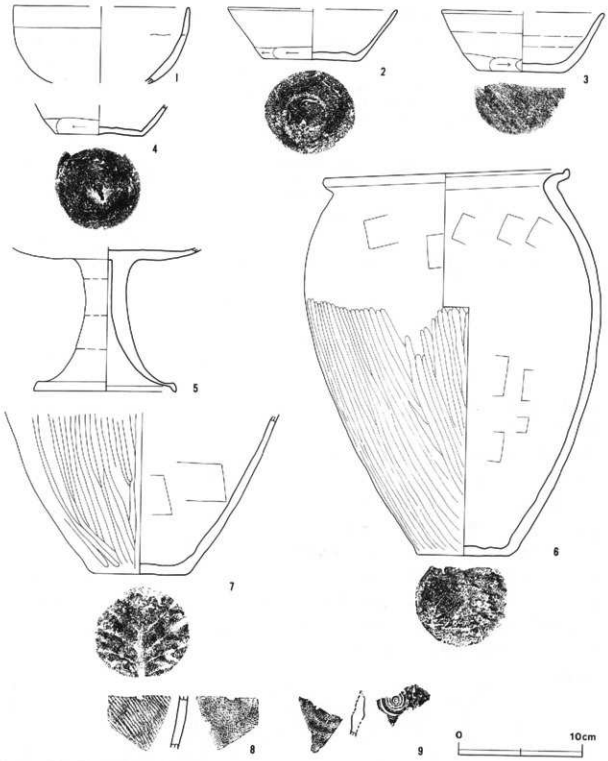
1 暗 褐 色　ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を中量，炭化物・炭化粒子・焼土中ブロックを少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
2 暗 褐 色　ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を中量，ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土大ブロック・焼土中ブロックを少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
3 暗 褐 色　ローム粒子・炭化粒子・焼土大ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を中量，ローム小ブロック・炭化物・焼土中ブロックを少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
4 褐　色　ローム粒子・焼土粒子を多量，焼土小ブロックを中量，ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
5 極暗褐色　ローム粒子・焼土粒子を多量，焼土中ブロック・焼土小ブロックを中量，ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子を少量含み，粘性を帯び，硬く締まっている。
6 褐　色　焼土小ブロック・焼土粒子を多量，ローム粒子・焼土中ブロックを中量，ローム小ブロック・炭化物・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
7 褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を多量，炭化粒子・焼土粒子を微量含み，粘性を帯び，締まっている。
8 暗褐褐色　ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を中量，ローム粒子・炭化物・炭化粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。
9 暗 褐 色　ローム粒子を多量，炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
10 極暗褐色　ローム大ブロックを中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性を帯び，硬く締まっている。

遺物　土師器片68点，須恵器片32点，灰釉陶器1点，石器1点（砥石），礫1点が出土している。住居跡の北部5分の1以外の覆土は攪乱されていたため，出土遺物が少なく，遺物の出土状況を把握することが困難であった。遺物は，竈と住居跡の南西部以外の覆土中から出土し，遺物は竈内と北東部に集中している。竈内から出土したものは約30%，北東部から出土したものが約24%，南東部から出土したものが約5%，北西部から出土したものが約7%，その他が約34%である。また，竈を除いた遺物の出土層は，覆土上層が約15%，覆土中層が約11%，覆土下層と床面直上が約24%で一番多く，その他が約50%である。第44図1の土師器坏，4の須恵器坏，6と7の土師器甕は北東コーナー部寄りの覆土下層から床面直上にかけてまとまって出土している。特に，4は7の中から出土した。2の須恵器坏が竈手前の覆土下層から，3の須恵器坏が東袖脇の覆土中層から，5の須恵器高盤が竈内と東壁寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。また，竈内から出土した土器のほとんどが3層から出土しているが，竈の補強材として利用されたものか，住居廃絶後に廃棄されたものかは不明である。また，出土した灰釉陶器は長頸瓶の破片で，産地は不明である。

所見　時期は，遺構の形態や出土遺物から，奈良時代後期（8世紀後葉）と考えられる。

第9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第44図 1	坏 土師器	A 14.0 B (6.2)	底部欠損。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面一部赤彩。	石英 雲母 砂粒 スコリア にぶい橙色 普通	80% P80 覆土下層 (北東コーナー)
2	坏 須恵器	A [13.6] B 4.0 C 7.7	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，直線的に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り後，ヘラ削り。	石英 雲母 砂粒 スコリア 灰黄褐色 普通	40% P81 覆土下層 (竈手前)
3	坏 須恵器	A [13.0] B 4.8 C 7.0	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り後，ヘラ削り。	雲母 砂粒 にぶい黄褐色 普通	40% P82 覆土中層 (竈東袖脇)



第44図　第9号住居跡出土遺物実測図

第44図 4	坏 須恵器	B (2.6) C 7.0	底部から体部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，直線的に立ち上がる。	体部内外面ロクロナデ。外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り後，ヘラ削り。	長石　石英　砂粒 灰色 普通	20%　P83 覆土下層 (北東コーナー)

第14図	高　　整		概　　要	備　　考	備考(台帳番号，出土位置，色調など)
5	須恵器	B (11.5) D 11.4 E 10.6	概部から体部の破片。脚部はラッパ状に開く。脚部は平坦に広がり，端部は屈曲して垂下する。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内外面から脚部・底部内外面ロクロナデ。	砂粒 灰赤褐色 普通	60%　P84 竈内 覆土下層 (東壁寄り) 脚部は第8図の一部と接合
6	甕 上師器	A 19.8 B 31.2 C 7.8	底部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し，中位に明瞭な稜を持ち，端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。外面中位から下位ヘラ磨き，一部ヘラナデ。底部内外面ナデ。	石英　雲母　砂粒 スコリア 橙色 普通	95%　P85 床面直上 (北東コーナー)
7	甕 上師器	B (13.0) C 7.8	底部から体部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ナデ。外面中位から下位ヘラ磨き，内面一部ヘラナデ。底部外面本葉痕有り。	雲母　スコリア 砂粒 明赤褐色 普通	40%　P86 床面直上 (北東コーナー)

図版番号	器　種	部　分	器形・手法の特徴	備考(台帳番号，出土位置，色調など)
8	甕 須恵器	体　部	内外面ロクロナデ。外面平行タタキ，内面同心円状のアテ具痕有り。	TP9 覆土上層 内面　黄灰色，外面　灰褐色
9	蓋 須恵器	天井部	内外面ロクロナデ。つまみ接着部に渦巻状の線刻，裏面にヘラ記号有り。	TP11 覆土中 灰白色

第11号住居跡（第45図）

位置　調査1区北西部，C 5 c3区。

規模と平面形　長軸3.07m，短軸2.91mの方形である。

主軸方向　N－8°－W

壁　壁高は41～51cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　西壁際の一部に確認されている。上幅15cm，下幅8～12cm，深さ4cmで，断面形はU字状である。

床　全面がほぼ平坦で，締まっている。特に，中央部が踏み固められている。

竈　北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部，煙道部と両側の袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部まで87cm，最大幅134cm，壁に粘土を貼り付けて袖部を作っている。火床部は，床面を12cmほど掘りくぼめており，火熱を受けているが，竈奥が赤変しているほかは，赤変硬化していない。煙道部は外傾して，垂直に立ち上がる。

竈土層解説

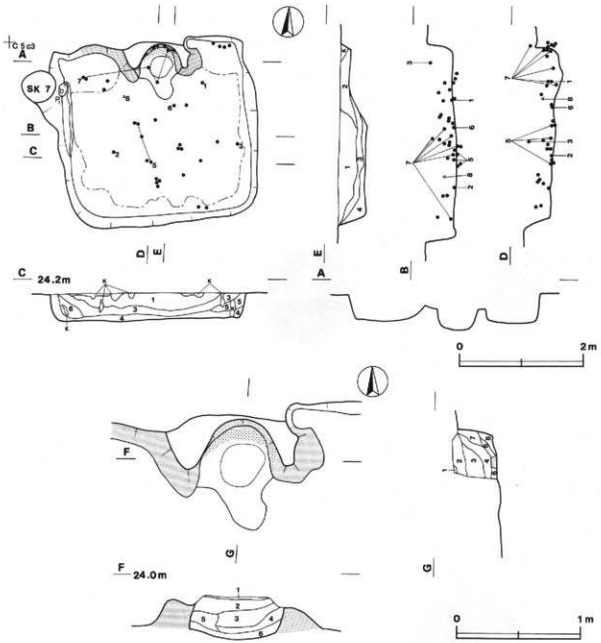
1	暗褐色	砂を中量，ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
2	暗褐色	灰褐色粘土粒子を中量，ローム粒子・砂を少量，ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み，締まっている。
3	暗褐色	ローム粒子を少量，焼土粒子・砂・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
4	灰褐色	ローム粒子・砂・灰褐色粘土粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
5	灰褐色	砂を多量，灰褐色粘土粒子を中量，ローム粒子・焼土粒子を少量，炭化粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
6	にぶい赤褐色	焼土粒子を中量，ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・砂を少量，焼土中ブロック・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
7	赤褐色	焼土粒子・粘土被熱変色ブロックを中量，炭化粒子を少量含み，粘性を帯び，締まりはない。火熱を受けた天井部の一部が崩落した層と思われる。
8	にぶい赤褐色	焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量，炭化粒子を微量含み，粘性を帯び，締まっている。

ピット　P1は北西コーナー部付近の西壁に位置し，長径19cm，短径14cmの不整楕円形で，深さ22cmである。性格は不明である。

覆土　6層からなり，自然堆積と思われる。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。



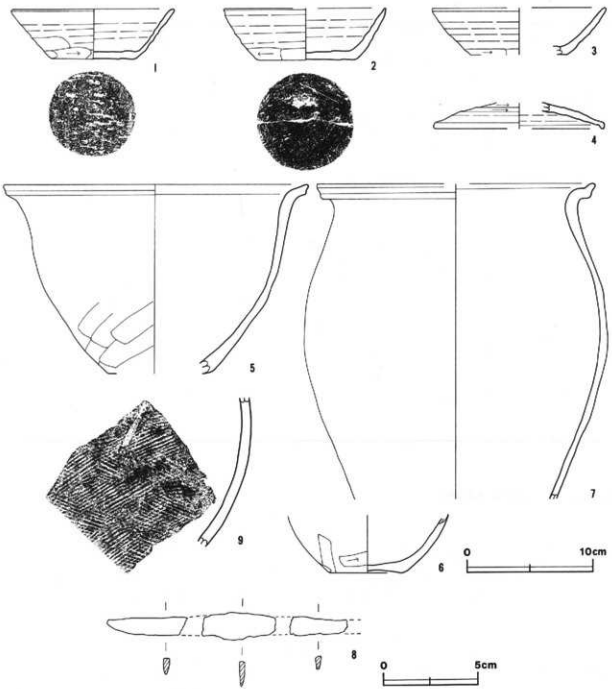
第45図　第11号住居跡実測図

2　暗　褐　色　ローム粒子を中量，炭化物・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・白色砂粒を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
3　暗　褐　色　ローム粒子・炭化物を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
4　黒　褐　色　ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を中量，炭化物・炭化粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
5　褐　　色　ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，ローム中ブロック・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
6　暗　褐　色　ローム粒子を中量，炭化粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。

遺物　土師器片105点，須恵器片157点，鉄製品１点（刀子）が出土している。遺物は，竈と住居跡全体の覆土中から出土しているが，特に北東部に集中している。竈内から出土したものは約11%，北東部から出土したものが約37%，南東部から出土したものが約12%，南西部から出土したものが約12%，北西部から出土したもの

が約18%，その他が約10%である。また，竈を除いた遺物の出土層位は，覆土上層が約43%と一番多く，覆土中層が約24%，覆土下層と床面直上が約23%，その他が約10%である。第46図１の須恵器坏が竈手前の覆土下層から，２の須恵器坏が西壁寄りの覆土下層から，５の土師器鉢が中央部の覆土下層から，７の土師器甕が竈内と竈西側の覆土下層から，８の刀子が竈手前の覆土中層からそれぞれ出土している。７の土師器甕など竈奥から出土した土器片のほとんどが，二次焼成を受けていないが，竈材の粘土の上位より多く出土していることから，竈の補強材として利用された可能性が高いと考えられる。

所見　時期は，遺構の形態や出土遺物から，平安時代前期（９世紀前葉）と考えられる。



第46図　第11号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第46図 1	坏 須恵器	A 12.8 B 4.0 C 6.8	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，直線的に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位手持ちヘラ削り。底部一方向の手持ちヘラ削り。	石英 雲母 砂粒 褐灰黄色 普通	80% P87 外面スス付着 覆土下層 (竈手前)
2	坏 須恵器	A [12.9] B 4.1 C 8.0	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り後，ヘラ削り。	石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	70% P88 覆土下層 (西壁寄り)
3	坏 須恵器	A [13.8] B 3.7 C [7.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位手持ちヘラ削り。	長石 砂粒 褐灰色 普通	25% P89 覆土上層 (東壁寄り)
4	蓋 須恵器	A [13.6] B (2.1)	天井部から口縁部の破片。天井部は平坦で，緩やかに開く。端部は垂直して垂下する。	天井部内外面・口縁部内外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り。	石英 雲母 砂粒 灰色 普通	30% P92 覆土中層 (南西コーナー)
5	鉢 土師器	A 24.2 B 14.9 C [8.2]	底部から口縁部の一部破損。平底。体部から口縁部にかけ，中位に稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し，端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。外面下位ヘラ削り。	長石 石英 砂粒 にぶい橙色 普通	70% P93 覆土下層 (中央部)
6	小形甕 土師器	B (4.6) C 6.0	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味立ち上がる。	体部内外面ナデ。外面下位ヘラ削り。	スコリア 砂粒 にぶい赤褐色 普通	20% P95 覆土下層 (竈手前)
7	甕 土師器	A [22.2] B (25.0)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し，中位に明瞭な稜を持ち，端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。	長石 石英 雲母 にぶい橙色 普通	30% P94 竈内 覆土下層 (竈西側)

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
8	刀子	[12.6]	(1.5)	0.3	(7.65)	覆土中層(竈手前)	M11

図版番号	器種	部分	器形・手法の特徴	備考(台帳番号，出土位置，色調など)
9	瓮 須恵器	体部	体部は内彎気味に立ち上がる。外面交互に交差する平行タタキ。内面ナデ，アテ具痕有り。	TP13 覆土上層(北西コーナー) 灰白色

第13号住居跡（第47図）

位置　調査Ⅰ区西部，Ｃ５e4区。

規模と平面形　長軸3.36m，短軸3.30mの方形である。

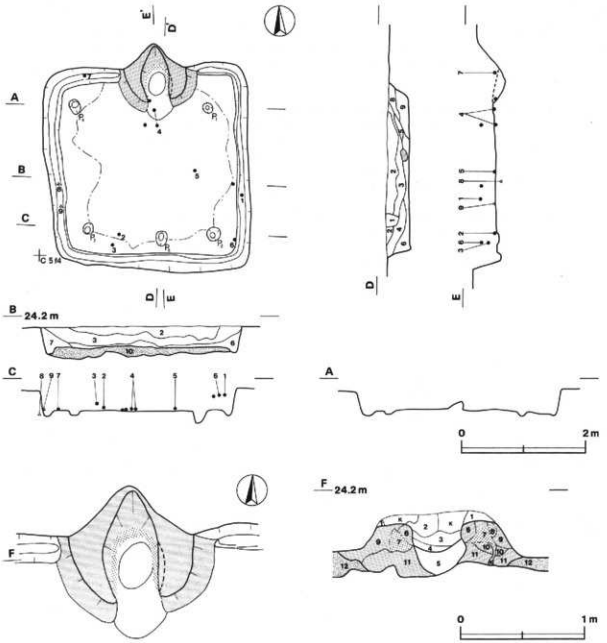
主軸方向　Ｎ－６°－Ｗ

壁　壁高は40～45cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　全周している。上幅19～34cm，下幅３～13cm，深さ４～10cmで，断面形はＵ字状である。

床　全面が平坦である。全面に貼床が施されており，締まっている。特に，中央部が踏み固められている。

竈　北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部，煙道部と両側の袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部まで112cm，最大幅126cm，壁外への掘り込み40cmである。火床部は，床面を20cmほど掘りくぼめた後，上に極暗赤褐色土を貼り，火床面を作っている。その上面は火熱を受



第47図　第13号住居跡実測図

けて，若干の赤変がみられるが，硬化していない。竈奥から煙道部にかけては，火熱を受けて赤変硬化している。袖部は，床面を10～17㎝ほど掘りくぼめた後，灰褐色粘土を壁際に貼り付けており，高さ33～43㎝で，内面の上部から中央部にかけては，火熱を受けて赤変している。煙道部は外傾して立ち上がる。土層は12層に分けられた。そのうち，1～4層は天井部や袖部の崩落土など，5層は火床部の貼床層，6～11層は袖部の土層，12層は竈手前の貼床層である。

竈土層解説

1	暗赤褐色	焼土粒子を多量，焼土中ブロック・焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を中量，炭化粒子・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
2	暗赤褐色	ローム粒子を少量，焼土小ブロック・焼土粒子・白色粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
3	暗赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を中量，焼土中ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。
4	極暗赤褐色	炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・砂を少量，灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性を帯び，締まりはない。

5　極暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を中量，炭化粒子・焼土中ブロックを微量含み，粘性を帯び，締まりはない。
6　明赤褐色　粘土被熱変色ブロックを多量，焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている
7　にぶい橙色　焼土粒子・灰褐色粘土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
8　にぶい褐色　灰褐色粘土小ブロック・灰褐色粘土粒子を中量，焼土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
9　褐　色　ローム粒子を少量，焼土小ブロック・灰褐色粘土小ブロック・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
10　黒褐色　ローム小ブロックを少量，灰褐色粘土小ブロック・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
11　赤褐色　ローム小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量，ローム粒子・焼土小ブロックを微量含み，粘性を帯び，締まっている。
12　褐　色　ローム粒子を多量，ローム小ブロックを微量含み，粘性が強く，締まっている。

ピット　5か所（P1～P5）。P1とP3は径15～17cmの円形，P4は長径28cm，短径18cmの不整楕円形で，深さ7～9cmである。P2は径21cmの円形で，深さ20cmである。いずれも各コーナー部付近に位置し，主柱穴と考えられる。P5は長径24cm，短径18cmの楕円形で，深さ6cmである。南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　9層からなり，自然堆積と思われる。10層は貼床の層である。

土層解説

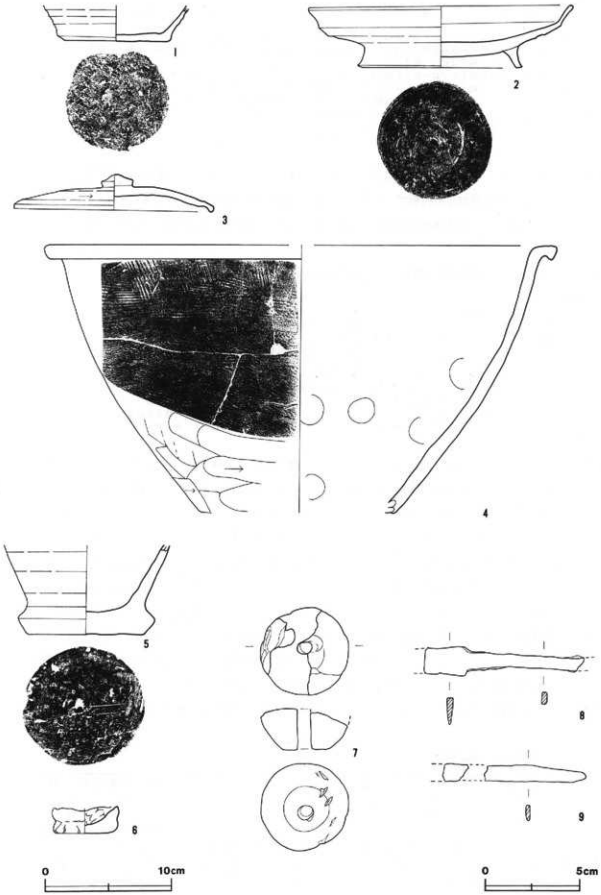
1　灰　褐　色　ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
2　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子を微量含み，粘性を帯び，締まりはない。
3　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
4　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
5　灰褐色　ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まりはない。
6　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
7　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
8　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子・砂を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
9　灰　褐　色　焼土粒子を中量，ローム粒子・焼土小ブロック・砂を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
10　褐　色　ローム粒子を少量，ローム小ブロック・灰褐色土を微量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。

遺物　土師器片56点，須恵器片76点，灰釉陶器1点，石製品1点（紡錘車），鉄製品2点（刀子）が出土している。遺物は，竈と住居跡全体の覆土中から出土しているが，北西部が少ない。竈内から出土したものは細片が多く，約6％である。北東部から出土したものが約23％，南東部から出土したものが約32％，南西部から出土したものが約29％，北西部から出土したものが約8％，その他が約2％である。また，竈を除いた遺物の出土層位は，覆土上層から覆土中層が約58％，覆土下層と床面直上が約42％で，ほぼ平均的である。第48図2の須恵器甕と3の須恵器甕が南壁寄りの覆土下層から出土している。4の須恵器鉢が竈内焚口部から手前にかけて，5の須恵器捏鉢が中央部東寄りの床面直上から，6の土師器手捏土器が南東コーナー部付近の覆土上層から，7の紡錘車が北西コーナー部付近の覆土下層から，8と9の刀子が西壁寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。覆土上層から出土している灰釉陶器平瓶は，猿投窯産黒笹14号窯式と考えられる。第63号住居跡から出土した個体と接合することから，後世の攪乱による混入の可能性がある。

所見　時期は，遺構の形態や出土遺物から，奈良時代後期（8世紀後葉）と考えられる。

第13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種		計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第48図 1	坏 須恵器	B	(2.9)	底部から体部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，直線的に立ち上がる。	体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後，ヘラ削り。	長石　砂粒 灰黄色 普通	50%　P96 覆土上層 (東壁寄り)
2	鉢 須恵器	A	21.0	口縁部の一部欠損。高台部は長く，「ハ」字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ，中位に明瞭な稜を持ち，直線的に立ち上がる。口縁部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部四転ヘラ削り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	長石　石英　雲母 砂粒 にぶい黄色 普通	90%　P97 覆土下層 (南壁寄り)
		B	5.1				
		D	13.0				
		E	1.3				



第48図　第13号住居跡出土遺物実測図

第48図 3	壺 須恵器	A 15.8 B 2.8 F 2.5 G 0.9	つまみから口縁部の破片。扁平なボタン状のつまみを持つ。天井部は平坦で，内彎気味に開く。端部は屈曲して垂下する。	つまみ・天井部内外面・口縁部内外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り。	石英　雲母　砂粒 灰黄色 普通	60%　P98 覆土下層 (南壁寄り)
4	鉢 須恵器	A [40.6] B 21.3 C [15.4]	底部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し，端部は折り返される。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面上位平行タタキ，下位ヘラ削り。内面ナデ具痕有り。	石英　雲母　砂粒 スコリア にぶい橙色 普通	40%　P99 竈内 (焚口部)
5	提　体 須恵器	B (7.1) C 9.3	体部の一部欠損。円盤状の厚い平底。体部は直線的に立ち上がる。	体部内外面・底部内面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後，ヘラ削り。	砂粒 内面　灰黄褐色 外面　褐灰色 普通	70%　P100 床面直上 (中央部東寄り)
6	手捏土器 土師器	A 5.0 B 2.2 C 4.2	平底。体部は直立して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ヘラナデ。体部・底部指頭痕有り。	スコリア　砂粒 にぶい褐色 普通	95%　P101 覆土上層 (南東コーナー)

図版番号	種　別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	石　質	出土地点	備　考
7	紡錘車	4.6	(4.6)	2.2	0.7	(48)	滑　石	覆土下層(北西コーナー)	Q5

図版番号	種　別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	出土地点	備　考
8	刀　子	(8.5)	1.6	0.3	(8.65)	覆土下層(西壁寄り)	M12
9	刀　子	[7.5]	0.9	0.3	(3.06)	覆土下層(西壁寄り)	M13

第14号住居跡（第49図）

位置　調査Ⅰ区北部，C 5 e5区。

規模と平面形　長軸3.63m，短軸3.40mの方形である。

主軸方向　N－0°

壁　壁高は35～68cmで，外傾して立ち上がる。

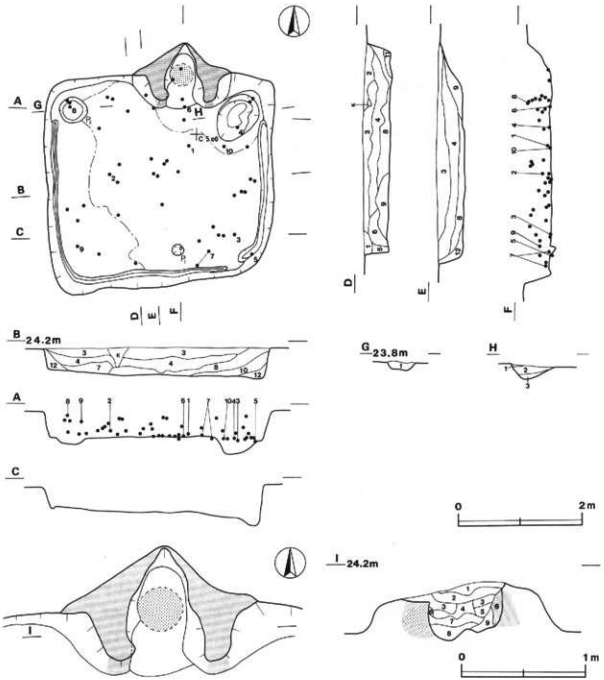
壁溝　北壁周辺を除き，巡っている。上幅14～28cm，下幅3～14cm，深さ3～14cmで，断面形はU字状である。

床　全面がほぼ平坦であるが，西壁から東壁に向かって若干の傾斜（下り勾配）がみられる。床面は全面が締まっており，特に，南西コーナー部と西壁周辺を除いて，踏み固められている。また，北東コーナー部の手前に，長径81cm，短径51cmの不整楕円形で，深さ28cmの掘り込みがみられる。P2と対比しても，柱穴ではないと思われるので，住居内土坑として扱うことにする。土層の含有物から，竈から排出される灰などを廃棄した可能性が考えられる。

住居内土坑土層解説

1　暗赤褐色　　灰褐色粘土粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
2　灰　赤　色　　灰褐色粘土粒子を中量，焼土粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性を帯び，硬く締まっている。
3　極暗赤褐色　　焼土粒子・灰を少量，焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性を帯び，締まりはない。

竈　北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部，煙道部と両側の袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部まで106cm，最大幅156cm，壁外への掘り込み48cmである。火床部は，床面を6cmほど掘りくぼめており，火熱を受けて赤変しているが，あまり硬化していない。煙道部は外傾して，階段状に立ち上がる。竈内から出土した土器は細片であったが，天井部や袖部の崩落土と思われる5層や7層の中から多く出土していることから，土器片を竈の補強材として利用していると考えられる。



第49図　第14号住居跡実測図

覆土層解説

1	暗赤褐色	白色粒子を少量，ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
2	暗赤褐色	焼土粒子・白色粒子を少量，ローム粒子・焼土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
3	暗褐色	焼土粒子を多量，ローム粒子・焼土小ブロックを中量，炭化物・炭化粒子・焼土中ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
4	暗赤褐色	ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量，白色粒子を微量含み，粘性を帯び，締まっている。
5	暗赤褐色	焼土大ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を多量，ローム粒子・炭化粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。焼土は天井部または袖部の内壁の崩落と思われる。
6	明褐色	ローム粒子・灰褐色粘土ブロック・灰褐色粘土粒子を多量含み，粘性を帯び，硬く締まっている。天井部または袖部の崩落土と思われる。
7	暗赤褐色	焼土中ブロック・焼土小ブロックを中量，焼土粒子を少量，炭化物を微量含み，粘性は弱く，締まっている。焼土は天井部の内壁の崩落と思われる。
8	暗赤褐色	灰褐色粘土粒子を中量，炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性を帯び，締まりはない。
9	褐色	ローム粒子を多量，焼土粒子・灰褐色粘土ブロック・灰褐色粘土粒子を中量，焼土中ブロック・焼土小ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。

ピット　2か所（P1・P2）。P1は長径19cm，短径17cmの楕円形で，深さ10cmである。南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。P2は北西コーナー部に位置し，径42～45cmの円形で，深さ13cmである。性格は不明である。

P2土層解説

1　にぶい赤褐色　ローム粒子・炭化粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。

覆土　12層からなり，自然堆積と思われる。

土層解説

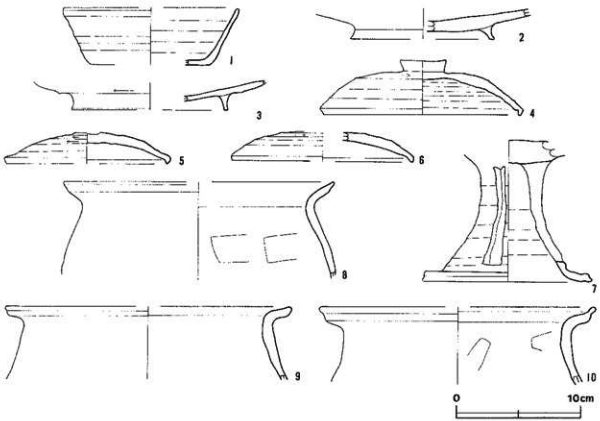
1　黒　褐　色　ローム粒子・灰褐色十小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
2　暗　褐　色　ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
3　褐　褐　色　ローム粒子を少量，ローム小ブロック・ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
4　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子を少量，灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
5　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性を帯び，締まりはない。
6　暗　褐　色　ローム粒子を少量，炭化粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
7　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含み，粘性を帯び，締まりはない。
8　褐　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子を少量，炭化粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性を帯び，締まりはない。
9　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・砂を少量，焼土小ブロックを微量含み，粘性を帯び，締まっている。
10　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
11　暗　褐　色　ローム粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・灰褐色土を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
12　灰　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子を少量，焼土粒子・褐色土を微量含み，粘性は弱く，締まっている。

遺物　土師器片225点，須恵器片268点が出土している。遺物は，竈と住居跡全体の覆土中から出土しているが，東半分から出土したものが約52%と多数を占める。竈内から出土したものは約10%，北東部から出土したものが約23%，南東部から出土したものが約29%，南西部から出土したものが約15%，北西部から出土したものが約13%，その他が約10%である。また，竈を除いた遺物の出土層位は，覆土上層が約42%，覆土中層が約44%，覆土下層と床面直上が約14%で，覆土上層から覆土中層にかけて出土したものが約86%を占める。住居内土坑からは土師器片4点が出土した。第50図1の須恵器坏が中央部の覆土下層から，3の須恵器盤が南東コーナー部の覆土下層から，4の須恵器蓋が完形で東壁寄りの覆土下層から，7の須恵器高盤が南壁寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。

所見　時期は，遺構の形態や出土遺物から，奈良時代中期（8世紀中葉）と考えられる。

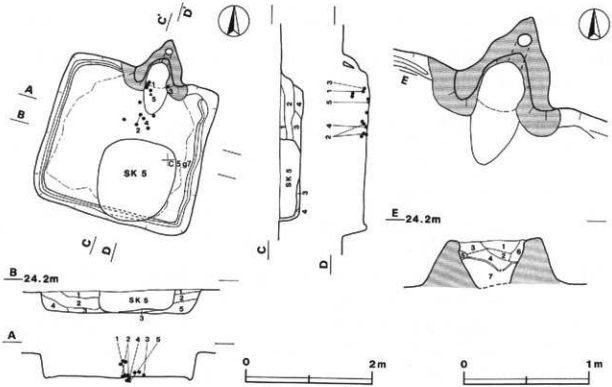
第14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第50図 1	坏 須恵器	A〔14.0〕 B 4.6 C〔9.6〕	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。	長石　石英　雲母 砂粒 灰色 普通	20%　P102 覆土下層 (中央部)
2	盤 須恵器	B（2.5） D〔11.6〕 E 1.2	高台部から体部の破片。高台部は長く，「ハ」の字状に開く。平底。体部は直線的に立ち上がる。	体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	長石　砂粒 灰色 普通	20%　P106 覆土中層 (中央部西寄り)
3	盤 須恵器	B（2.4） D〔12.6〕 E 1.1	高台部から体部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部は直線的に立ち上がり，下位に明瞭な稜を持つ。	体部内外面ロクロナデ。外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ切り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	長石　石英　雲母 砂粒 灰色 普通	30%　P107 覆土下層 (南東コーナー)
4	蓋 須恵器	A 15.8 B 4.4 F 3.6 G 1.1	扁平なボタン状のつまみを持つ。天井部は平坦で，内彎気味に立ち上がる。端部は屈曲して垂下する。	つまみ・天井部内外面・口縁部内外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り。	長石　石英　砂粒 灰色 普通	100%　P108 覆土下層 (東壁寄り)
5	蓋 須恵器	A〔13.0〕 B（2.5）	天井部と口縁部の破片。天井部は内彎気味に立ち上がる。端部は屈曲して垂下する。	天井部内外面・口縁部内外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り。	石英　雲母　砂粒 灰色 普通	40%　P109 覆土下層 (南東コーナー)



第50図　第14号住居跡出土遺物実測図

第50図					
6	甕 須恵器	A [14.4] B (2.3)	天井部と口縁部の破片。天井部は平坦で，内彎気味に立ち上がる。端部は屈曲して垂下する。	天井部内外面・口縁部内外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り後，ヘラナデ。	雲母　砂粒 灰黄褐色 普通	30%　P110 覆土下層 (竈手前)
7	高　盤 須恵器	B (11.3) D 13.6 E　9.0	脚部から底部の破片。脚部はラッパ状に開き，3孔のすかしを有する。脚部は平坦に広がり，端部は上方につまみ上げられている。	底部内外面・脚部内外面・裾部内外面ロクロナデ。	石英　雲母　砂粒 灰色 普通	60%　P111 覆土下層 (南壁寄り)
8	甕 土師器	A [21.7] B (7.7)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，中位に明瞭な稜を持ち，端部はつまみ上げられている。	体部内外面横ナデ。口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ，内面一部ヘラナデ。	長石　砂粒 明赤褐色 普通	10%　P112 覆土上層 (北西コーナー)
9	甕 土師器	A [23.1] B (5.8)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し，中位に明瞭な稜を持ち，端部はつまみ上げられている。	体部内外面横ナデ。口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。	長石　石英　雲母 砂粒 明赤褐色 普通	5%　P113 覆土中層 (南西コーナー)
10	甕 土師器	A [22.0] B (6.2)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，中位に明瞭な稜を持ち，端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ，内面一部ヘラナデ。	長石　石英　雲母 砂粒 明褐色 普通	10%　P114 覆土下層 (東壁寄り)



第51図　第15号住居跡実測図

第15号住居跡（第51図）

位置　調査Ⅰ区北部，Ｃ５f6区。

重複関係　本跡は第５号土坑と重複している。第５号土坑が，本跡の中央部から南壁寄りにかけての覆土を掘り込んでいることから，本跡が古い。

規模と平面形　長軸2.58m，幅2.46mの方形である。

主軸方向　Ｎ－17°－Ｅ

壁　壁高は38～40cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　全周している。上幅14～30cm，下幅２～７cm，深さ２～４cmで，断面形はＵ字状である。

床　全面が平坦で，締まっている。特に，中央部が踏み固められている。

竈　北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部の一部は崩落しており，火床部，煙道部と煙道部上部の天井部，両側の袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部まで127cm，最大幅104cm，壁外への掘り込み58cmである。火床部は，床面を６cmほど掘りくぼめており，火熱を受けているが，赤変硬化していない。焚口部から35cm奥の火床部に第52図５の土製支脚を埋め込んでいる。焚口部と支脚の位置が，袖部の位置に比べて，竈の手前近くに認められる。竈手前の床面には粘土痕は確認されておらず，袖部が張り出していたか不明である。このことから，袖の残存状態が悪いことも考えられるが，竈の両袖部の先端近くに掛け口が設けられていた可能性も考えられる。煙道部は外傾して，階段状に立ち上がる。

竈土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，ローム中ブロック・炭化粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
2　暗　褐　色　ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
3　褐　　色　灰褐色粘土粒子を多量，ローム粒子・炭化粒子を中量，炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。
4　暗　褐　色　ローム粒子を中量，ローム小ブロック・炭化粒子を少量，焼土中ブロックを微量含み，粘性を帯び，締まっている。
5　暗 赤 褐 色　焼土大ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を多量，炭化粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。

6　極暗褐色　ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，炭化粒子・焼土小ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。
7　極暗褐色　ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を中量，ローム小ブロック・炭化物を少量含み，粘性を帯び，締まっている。

覆土　5層からなり，各層ともローム小ブロックを多く含んでいること，特に，2層でまだら状に堆積していることから，人為堆積と思われる。

土層解説

1　極暗黒色　ローム粒子を多量，ローム小ブロック・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を中量，ローム中ブロック・炭化物・焼土大ブロック・焼土中ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。
2　黒　褐　色　ローム粒子を多量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子・黒色土中ブロック・黒色土小ブロックを中量，炭化物・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・黒色土大ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。
3　黒　褐　色　黒色土大ブロックを多量，ローム粒子・黒色土中ブロック・黒色土小ブロックを中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性を帯び，硬く締まっている。
4　黒　色　黒色土大ブロック・黒色土中ブロック・黒色土小ブロックを多量，ローム大ブロック・ローム粒子・炭化物・焼土中ブロックを少量含み，粘性を帯び，硬く締まっている。
5　極暗褐色　ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，ローム中ブロック・炭化粒子・焼土粒子・黒色土中ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。

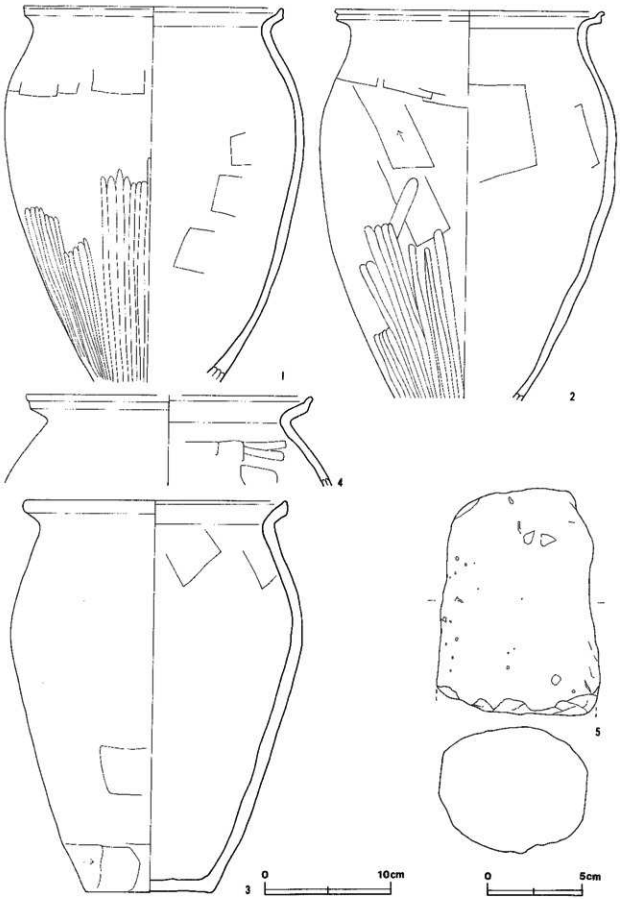
遺物　土師器片137点，須恵器片67点，土製品1点（支脚）が出土している。遺物は，竈と住居跡全体の覆土中から出土している。竈内から出土したものが一番多く，約37%であるが，ほとんどが細片で実測できなかった。その他は平均的で，北東部から出土したものが約12%，南東部から出土したものが約14%，南西部から出土したものが約14%，北西部から出土したものが約18%，その他が約5%である。また，竈を除いた遺物の出土層位は，覆土上層が約34%，覆土中層が約28%，覆土下層と床面直上が約38%で一番多かった。第52図1と3の土師器甕が竈内の焚口部から，2と4の土師器甕が竈手前の覆土下層から，5の上製支脚が竈内からそれぞれ出土している。

所見　時期は，遺構の形態や出土遺物から，平安時代前期（9世紀後葉）と考えられる。

第15号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第52図 1	甕 土師器	A 20.6 B (29.8)	底部欠損。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ，一部ヘラナデ。外面中位から下位ヘラ磨き。	長石　石英　雲母 スコリア　砂粒 にぶい橙色 普通	90%　P116 竈内 (焚口部)
2	甕 土師器	A 21.6 B (30.9)	底部欠損。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，端部はつまみ上げられている。口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ，一部ヘラナデ。外面中位から下位ヘラ磨き。	雲母　砂粒 にぶい橙色 普通	70%　P117 覆土下層 (竈手前)
3	甕 土師器	A 20.5 B 31.3 C 10.0	体部の一部欠損。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ，一部ヘラナデ。外面下位ヘラ削り。底部ナデ。	長石　石英　雲母 砂粒 明赤褐色 普通	70%　P118 竈内 (焚口部)
4	甕 上師器	A [22.6] B (7.1)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し，中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ，内面一部ヘラナデ。	長石　石英　砂粒 橙色 普通	10%　P119 覆土下層 (竈手前)

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	出土地点	備考
5	支脚	(12.1)	8.7	6.9	(513)	竈内	DP2



第52図　第15号住居跡出土遺物実測図

第16号住居跡（第53図）

位置　調査Ⅰ区北部，Ｃ５a8区。

重複関係　本跡は第17号住居跡と重複している。本跡が，第17号住居跡の竈東半分から北東コーナー部寄りの覆土を掘り込んでいることから，本跡が新しい。

規模と平面形　長軸4.35m，短軸4.05mの長方形である。竈の両側２か所に棚部が付設されている。東棚は，長さ118cm，幅43～51cmの長方形で，床面からの高さは19cmである。西棚は，長さ176cm，幅48～62cmの長方形で，床面からの高さは31cmである。棚部を除いた規模は，長軸4.05m，短軸3.75mの長方形である。

主軸方向　Ｎ－０°

壁　壁高は34～40cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　全周している。上幅18～45cm，下幅５～17cm，深さ６～10cmで，断面形はＵ字状である。

床　全面が平坦で，締まっている。特に，中央部が踏み固められている。

竈　北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部，煙道部と両側の袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部まで119cm，最大幅104cm，壁外への掘り込み24cmである。火床部は，床面を６cmほど掘りくぼめており，火熱を受けて西側の袖部内側が赤変硬化している。焚口部から81cm奥の火床部に第56図18の雲母片岩を埋め込んでいる。18が加熱を受けて赤変していることから，支脚として利用していたと考えられる。また，17の雲母片岩も加熱を受け，赤変していることから，同様に支脚として利用された可能性がある。煙道部は外傾して，緩やかに立ち上がる。第54図８や９の土師器高台付坏など，西袖の内部に貼り付けられていた遺物は，竈の補強材として利用されたものと考えられる。

竈土層解説

1	暗赤褐色	ローム粒子を少量，ローム小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
2	暗　褐　色	焼土粒子を多量，ローム粒子を中量，炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
3	褐　　色	ローム粒子・焼土粒子を多量，焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を中量，炭化粒子・焼土中ブロックを少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
4	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子を多量，炭化粒子・焼土小ブロックを中量，炭化物・焼土中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
5	黒褐色	焼土粒子を多量，ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロックを中量，炭化物・炭化粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
6	褐　　色	ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
7	暗赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子を多量，焼土中ブロックを中量，ローム粒子・炭化粒子・焼土大ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。

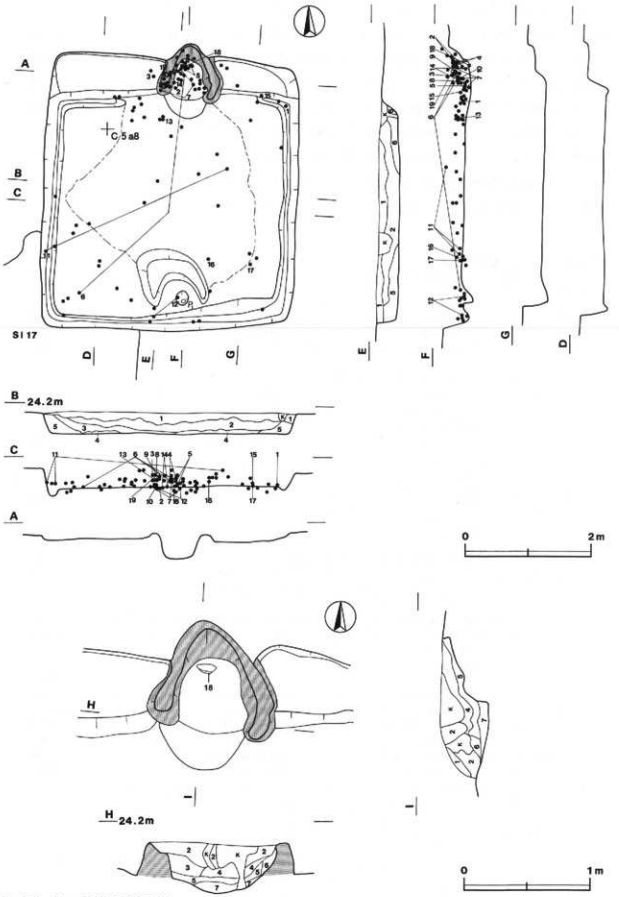
ピット　Ｐ1は長径22cm，短径19cmの楕円形で，深さ15cmである。南壁寄りに位置し，その周囲は馬蹄形状に３cmほど盛り上がり，踏み固められていることから，出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　６層からなり，自然堆積と思われる。

土層解説

1	暗　褐　色	白色粒子を少量，焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
2	暗　褐　色	ローム粒子・焼土粒子・白色粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
3	黒　褐　色	ローム小ブロック・炭化物・焼土小ブロック微量を含み，粘性は弱く，締まっている。
4	極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
5	褐　　色	ローム粒子を中量，ローム小ブロック・焼土粒子を少量，焼土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
6	灰　褐　色	灰褐色粘土粒子を中量，炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量，ローム粒子を微量含み，粘性を帯び，締まりはない。

遺物　土師器片502点，須恵器片92点，灰釉陶器３点，石２点（支脚として利用されたと思われる雲母片岩）が出土している。遺物は，竈と住居跡全体の覆土中から出土しているが，南半分と竈から出土したものが多い。竈内から出土したものは約22%，北東部から出土したものが約13%，南東部から出土したものが約21%，南西部から出土したものが約19%，北西部から出土したものが約14%，その他が約11%である。また，竈を除いた遺物の出土層位は，覆土中層以下のものが多く，覆土上層が約15%，覆土中層が約40%，覆土下層と床面直上



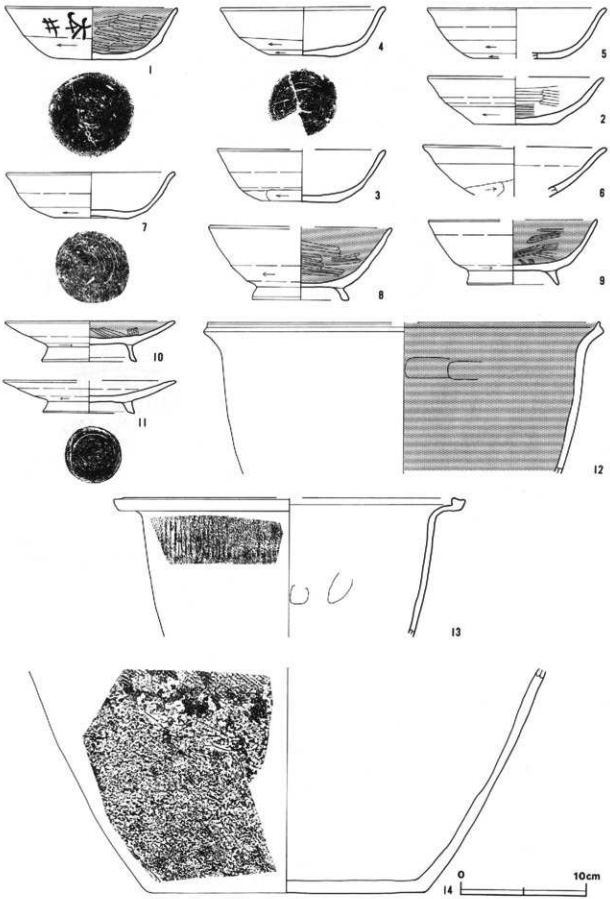
第53図　第16号住居跡実測図

が約35%，その他が約10%である。竈内から出土したものは，第54図４と５の須恵器坏（支脚周辺），７の須恵器坏（中央と支脚の上，竈手前の覆土下層），２の土師器坏と14の須恵器鉢（西袖の際），６の須恵器坏（支脚周辺と南西コーナー部寄りの床面直上），８と９の土師器高台付坏，10の土師器高台付皿（西袖内部）があげられる。その他としては，１の土師器坏（墨書「本井」）が北東コーナー部の覆土下層から，第55図16の灰釉陶器長頸瓶が中央部の覆土中層から，17の雲母片岩が南東コーナー部寄りの床面直上から，第56図18の雲母片岩が竈奥西寄りからそれぞれ出土している。竈奥や火床面から出土した，多くの土器については，二次焼成を受けていないこと，６や７の須恵器坏のように竈内と竈外出土した破片が接合している例があることから，住居廃絶後に廃棄されたものと考えられる。また，16の灰釉陶器長頸瓶の産地は不明である。

所見　時期は，遺構の形態や出土遺物から，平安時代前期（９世紀中葉）と考えられる。

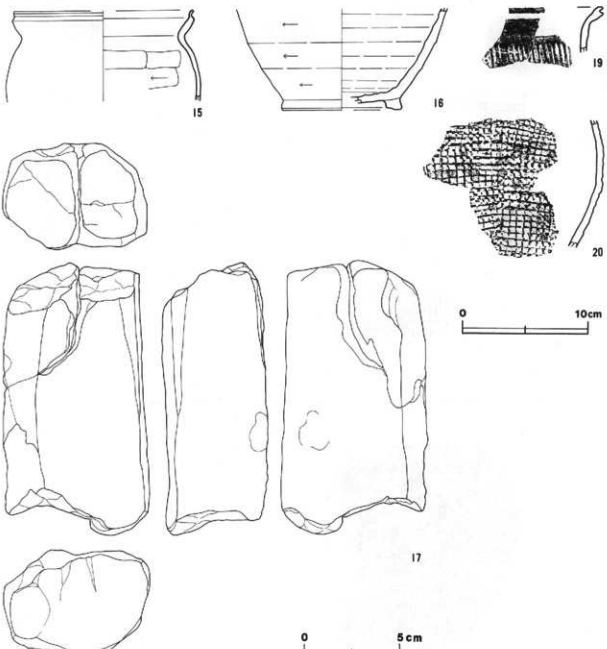
第16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第54図 1	坏 土師器	A 13.7 B 4.2 C 7.1	口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，中位に明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り，内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部外面回転ヘラ削り後，ナデ。	石英　雲母　砂粒 スコリア 内面　黒色 外面　にぶい橙色 普通	95%　P120 内面黒色処理 体部外面墨書「本井」 覆土下層 (北東コーナー)
2	坏 上師器	A [14.4] B 3.8 C 6.6	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，中位に明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り，内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部外面手持ちヘラ削り後，ナデ。	雲母　スコリア 砂粒 にぶい橙色 普通	50%　P124 竈内 (西袖の際)
3	坏 須恵器	A [13.4] B 4.1 C 6.0	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，中位に明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。底部外面回転ヘラ削り後，ナデ。	雲母　砂粒 にぶい橙色 普通	30%　P126 竈内 (西袖脇柵際)
4	坏 須恵器	A 13.1 B 4.0 C 5.3	底部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，下位と中位に明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部外面回転ヘラ削り後，ナデ。	雲母　スコリア 砂粒 橙色 普通	90%　P121 竈内 (支脚周辺)
5	坏 須恵器	A 14.2 B 4.0 C 7.0	底部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，中位に不明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部外面回転ヘラ削り後，ナデ。	石英　雲母　砂粒 スコリア 橙色 普通	80%P122 竈内（支脚周辺）
6	坏 須恵器	A [14.6] B (4.0)	体部と口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，中位に不明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。	長石　石英　雲母 砂粒 にぶい黄橙色 普通	30%　P125 外面スス付着 竈内（支脚周辺） 床面直上 (南西コーナー)
7	坏 須恵器	A 13.5 B 4.7 C 5.8	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，中位に不明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部外面回転ヘラ削り後，ナデ。	石英　雲母　砂粒 スコリア にぶい黄橙色 普通	60%　P123 竈内 (中央と支脚の上) 覆土下層（竈手前）
8	高台付坏 土師器	A [14.4] B 5.8 D 7.6 E 1.0	体部と口縁部の一部欠損。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ，下位と中位に明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り，内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部外面回転ヘラ削り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	スコリア　砂粒 内面　褐灰色 外面　橙色 普通	60%　P127 内面黒色処理 竈内 (西袖内)
9	高台付坏 土師器	A [13.4] B 5.1 D 7.2 E 1.1	高台部から口縁部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り，内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部外面回転ヘラ削り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	雲母　スコリア 砂粒 内面　黒色 外面　にぶい橙色 普通	60%　P128 内面黒色処理 竈内 (西袖内)

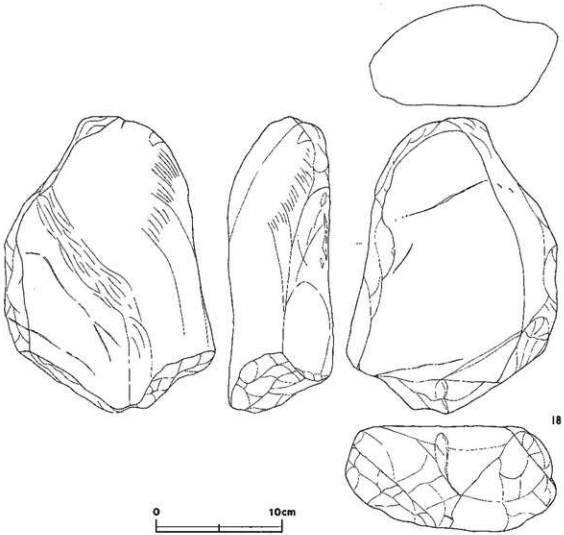


第54図　第16号住居跡出土遺物実測図（1）

第54図 10	高台付皿 土 師 器	A 13.4 B 3.2 D 7.4 E 1.3	体部と口縁部の一部欠損。高台部は長く，「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り，内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部外面回転ヘラ削り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	砂粒 内面　黒褐色 外面　にぶい橙色 普通	70%　P129 内面黒色処理 竈内 (西袖内)
11	高台付皿 須 恵 器	A 〔13.8〕 B 2.6 D 7.2 E 1.6	高台部から口縁部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部外面回転ヘラ削り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	50%　P130 覆土上層 (中央部) 覆土下層 (西壁寄り)



第55図　第16号住居跡出土遺物実測図（2）



第56図　第16号住居跡出土遺物実測図（3）

第54図 12	鉢 土師器	A [31.2] B (12.0)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，端部はつまみ上げられ，口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ，内面一部ヘラナデ。	雲母　砂粒 内面　黒色 外面　橙色 普通	10%　P131 内面黒色処理 覆土下層 (南壁寄り)
13	鉢 須恵器	A [28.0] B (11.0)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，端部は垂直につまみ上げられ，口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面ロクロナデ。体部外面平行叩き。内面ナデ，アテ具痕有り。	長石　雲母　砂粒 にぶい黄橙色 普通	10%　P132 覆土中層 (竈子供)
14	鉢 須恵器	B (17.9) C　22.0	底部から体部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。	体部外面平行叩き，下位ヘラ削り。内面ナデ。底部内外面ナデ。	石英　砂粒 にぶい黄色 普通	30%　P133 竈内 (西袖の際)
第55図 15	小形甕 土師器	A [14.2] B (7.2)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，端部はつまみ上げられ，口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ，内面一部ヘラナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	10%　P134 覆土ド層 (竈東脇)
16	長頸瓶 灰釉陶器	B (8.0) D [9.4] E　0.9	高台部から体部の破片。高台部は短く，「八」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ロクロナデ。底部外面回転ヘラ削り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	石英　砂粒 黄灰色 普通	20%　P136 覆土中層 (中央部) 底地不明

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第55図17	石	14.4	7.6	5.7	983	雲母片岩	床面直上(南東コーナー)	Q6 支脚転用か
第56図18	石	23.5	16.8	8.4	4290	雲母片岩	竈内	Q7 支脚転用

図版番号	器種	部分	器形・手法の特徴	備考(台帳番号，出土位置，色調など)
第55図 19	鉢 須恵器	体部 ～ 口縁部	口縁部は強く外反し，口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。口縁部・体部内外面ロクロナデ。体部外面平行タタキ。	TP14 褐土上層 浅黄橙色
20	壺 須恵器	体部	内外面ロクロナデ。外面平行タタキ，内面アテ具痕有り。	TP15 竈内 黒褐色

第17号住居跡（第57図）

位置　調査Ⅰ区北部，Ｃ５a7区。

重複関係　本跡は第16・19号住居跡と重複している。第16号住居跡が本跡の竈から北東壁寄りの覆土を，第19号住居跡が本跡の竈から南壁寄りの覆土を掘り込んでいることから，いずれよりも本跡が古い。

規模と平面形　長軸3.72m，短軸3.56mの方形である。

主軸方向　Ｎ－６°－Ｗ

壁　壁高は64～70cmで，垂直に立ち上がる。

壁溝　南東コーナー部と南西コーナー部の一部を除き，巡っている。上幅12～36cm，下幅３～11cm，深さ２～５cmで，断面形はＵ字状である。

床　全面が平坦で，締まっている。特に，主柱穴の周辺を除いて，踏み固められている。

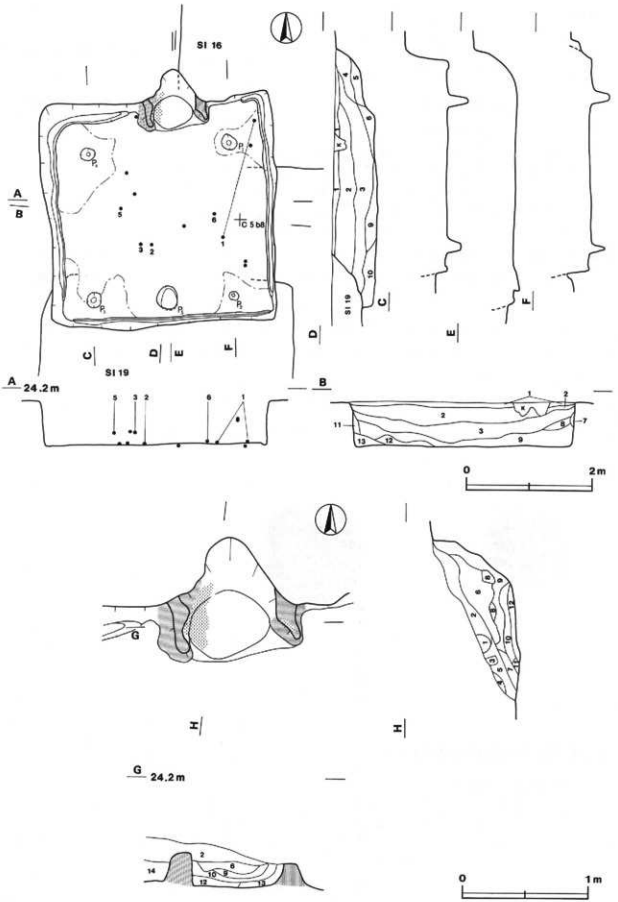
竈　北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部，煙道部と両側の袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部まで96cm，最大幅115cm，燃外への掘り込み49cmである。火床部は，床面を２cmほど掘りくぼめており，火熱を受けているが，両袖部の際を除いて，赤変硬化していない。煙道部は外傾して，緩やかに立ち上がったのち，垂直に立ち上がる。

竈土層解説

1　暗褐色　炭化粒子・焼土小ブロック・パミスを微量含み，粘性を帯び，締まっている。
2　褐色　焼土小ブロック・パミスを少量，炭化粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
3　黒色　焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
4　黒褐色　焼土粒子・灰を少量含み，粘性を帯び，硬く締まっている。
5　極暗褐色　灰褐色粘土粒子・灰を少量，焼土粒子を微量含み，粘性を帯び，硬く締まっている。
6　暗赤褐色　焼土中ブロックを中量含み，粘性を帯び，締まりはない。
7　明赤褐色　焼土中ブロックを少量，焼土大ブロックを微量含み，強い粘性を帯び，締まっている。
8　暗赤褐色　粘土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を中量，焼土中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。火熱を受けた天井部の一部が崩落した層と思われる。
9　極暗赤褐色　焼土粒子を少量，焼土中ブロック・パミスを微量含み，粘性を帯び，硬く締まっている。
10　明赤褐色　焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を多量，炭化物を微量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。火熱を受けた天井部の一部が崩落した層と思われる。
11　極暗赤褐色　焼土粒子を中量，炭化粒子・焼土小ブロックを微量含み，強い粘性を帯び，締まりはない。
12　極暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子を少量，炭化粒子・焼土中ブロックを微量含み，強い粘性を帯び，締まりはない。
13　黒褐色　炭化粒子を少量，ローム粒子・焼土粒子を微量含み，粘性を帯び，締まりはない。
14　黒褐色　灰褐色粘土粒子を中量，ローム小ブロックを少量，焼土粒子を微量含み，強い粘性を帯び，締まっている。

ピット　５か所（Ｐ1～Ｐ5）。Ｐ1とＰ3は長径25cm，短径21～23cmの楕円形，Ｐ2とＰ4は径14～22cmの円形で，深さ25～32cmである。各コーナー部寄りに位置し，いずれも主柱穴と考えられる。Ｐ5は長径38cm，短径33cmの楕円形で，深さ10cmである。南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　13層からなり，自然堆積と思われる。



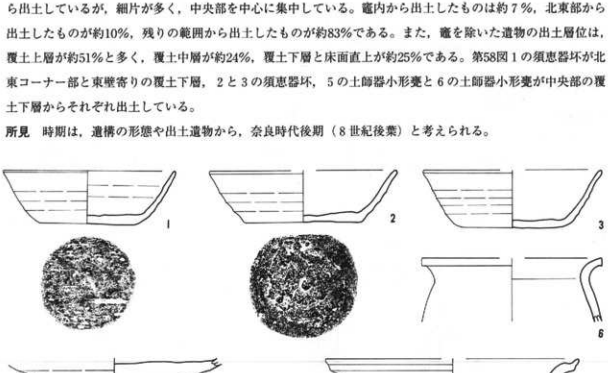
第57図　第17号住居跡実測図

土層解説

1 黒 褐 色　ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
2 極暗褐色　ローム粒子・炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性を帯び，硬く締まっている。
3 黒 褐 色　ローム粒子を多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化物・焼土小ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。
4 暗 褐 色　ローム粒子・炭化物・灰褐色粘土粒子を少量，炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
5 暗 褐 色　灰褐色粘土粒子を多量，ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロックを少量，焼土粒子を微量含み，粘性を帯び，硬く締まっている。
6 極暗褐色　灰褐色粘土粒子を中量，ローム粒子・焼土大ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量，炭化粒子を微量含み，粘性を帯び，締まっている。
7 暗 褐 色　ローム粒子を中量，炭化物を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
8 黒 褐 色　ローム粒子・焼土粒子を少量，炭化粒子を微量含み，粘性を帯び，締まりはない。
9 極暗褐色　ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，炭化物を少量，焼土粒子を微量含み，粘性を帯び，締まっている。
10 暗 褐 色　ローム粒子を多量，炭化粒子・焼土粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。
11 暗 褐 色　ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まりはない。
12 暗 褐 色　ローム中ブロック・ローム粒子を中量，炭化粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性を帯び，硬く締まっている。
13 極暗褐色　ローム粒子を中量，炭化物・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。

遺物　土師器片95点，須恵器片37点，鉄滓１点，礫１点が出土している。遺物は，竈と住居跡全体の覆土中から出土しているが，細片が多く，中央部を中心に集中している。竈内から出土したものは約７％，北東部から出土したものが約10％，残りの範囲から出土したものが約83％である。また，竈を除いた遺物の出土層位は，覆土上層が約51％と多く，覆土中層が約24％，覆土下層と床面直上が約25％である。第58図１の須恵器坏が北東コーナー部と東壁寄りの覆土下層，２と３の須恵器坏，５の土師器小形甕と６の土師器小形甕が中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見　時期は，遺構の形態や出土遺物から，奈良時代後期（８世紀後葉）と考えられる。



第58図　第17号住居跡出土遺物実測図

第17号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第58図 1	坏 須恵器	A 13.6 B 4.2 C 7.8	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部手持ちヘラ削り。	石英　雲母　砂粒 灰白色 普通	70%　P137 覆土下層 (北東コーナー，東壁寄り)
2	坏 須恵器	A [14.8] B 4.1 C 9.2	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後，ナデ。	長石　砂粒 にぶい黄橙色 普通	50%　P138 覆土下層 (中央部)

第58図 3	坏 須恵器	A [14.2] B 4.6 C 8.0	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後，ナデ。	石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	50% P139 覆土下層 (中央部)
4	高 盤 須恵器	B (2.2)	脚部から体部の破片。平底。体部は直線的に立ち上がる。	体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。	石英 雲母 砂粒 灰オリーブ色 普通	10% P140 覆土上層
5	小形甕 土師器	A [20.2] B (5.3)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，中位に明瞭な稜を持ち，端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ，内面一部ヘラナデ。	石英 雲母 砂粒 にぶい黄橙色 普通	10% P141 覆土下層 (中央部)
6	小形甕 土師器	A [14.2] B (5.0)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，中位に明瞭な稜を持つ。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。	スコリア 砂粒 にぶい橙色 普通	10% P142 覆土下層 (中央部)

第19号住居跡（第59図）

位置 調査Ⅰ区北部，Ｃ５b7区。

重複関係 本跡は第17号住居跡と重複している。本跡が，第17号住居跡の南壁寄りの覆土を掘り込んでいることから，本跡が新しい。

規模と平面形 本跡の西半分が攪乱を受けているが，長軸[4.17]m，短軸[4.01]mの方形と推定される。竈の両側２か所に棚部が付設されている。東棚は，長さ111cm，幅44cmの長方形で，床面からの高さは35cmである。西棚は，長さ158cm，幅47cmの長方形で，床面からの高さは36cmである。棚下の竈脇壁面に砂混じりの黄灰色粘土を貼り付けている。棚部を除いた規模は，長軸4.01m，短軸3.58mの長方形である。

棚部土層解説

1 灰 褐 色 黄灰色粘土粒子を少量，ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
2 明 褐 灰 色 黄灰色粘土粒子・砂を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。

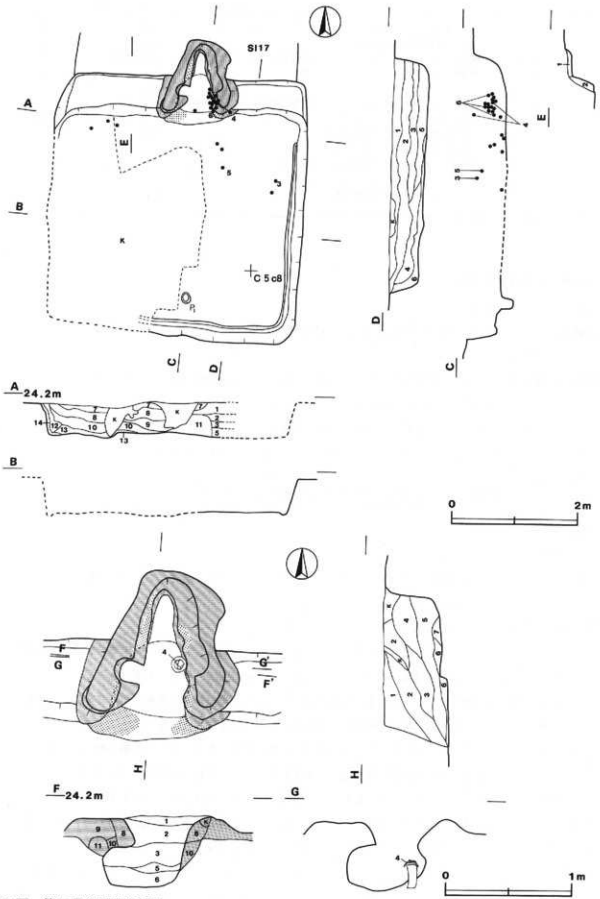
主軸方向 Ｎ－４°－Ｅ

壁 壁高は54～63cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 北東コーナー部から南東コーナー部を経て，出入口ピット付近まで半周している。上幅21～30cm，下幅２～９cm，深さ４cmで，断面形はＵ字状である。

床 全面が平坦で，全体が締まっている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部，煙道部と両側の袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部まで138cm，最大幅126cm，壁外への掘り込み55cmである。火床部は，床面をほとんど掘りくぼめておらず，火熱を受けているが，焚口部から竈奥にかけての両袖部内側を除いて，赤変硬化していない。焚口部から60cm奥の火床部に石製支脚を立てた状態で埋め込んでいる。この石製支脚は火熱を受け，もろくなっており，実測は不能で，石質は不明である。また，石製支脚の上に灰褐色粘土を載せ，その上に第60図４の土師器小形甕が逆位で置かれている。二次焼成を受け，ススが付着していることから，石製支脚と一体で利用されていたと思われる。支脚の位置は，火床部中央よりも東袖に極端に寄っており，反対側の西袖には掛け口部のような穴が開いている。この支脚の位置と袖部の形態から，掛け口部は左右２か所に設けられていた可能性がある。煙道部は外傾して，最初は緩やかに，のち垂直に立ち上がる。竈から出土した土器片は，ほとんどが細片で，支脚周辺に集中している。二次焼成を受けておらず，天井部の崩落土と考えられる２層から３層にかけて出土していることから，竈の補強材として利用されたものと思われる。



第59図　第19号住居跡実測図

また，焚口部から竈手前の床面にかけて多量の灰が確認された。土層は11層に分けられ，そのうちの１～７層は天井部や袖部の崩落土など，８～11層は袖部の土層である。

竈土層解説

1	暗　褐　色	灰褐色粘土小ブロック・粒子を少量，ローム小ブロック・ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。天井部の崩落土と考えられる。
2	灰　褐　色	ローム粒子・灰褐色粘土粒子・砂を少量，ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。天井部の崩落土と考えられる。
3	暗　褐　色	ローム粒子を少量，焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。天井部の崩落土である。
4	暗　褐　色	ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子・砂を少量，ローム小ブロック・炭化粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。天井部の崩落土と考えられる。
5	灰　褐　色	焼土小ブロック・焼土粒子・砂を中量，ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土中ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
6	灰　褐　色	灰を少量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
7	赤　褐　色	焼土粒子を中量，焼土粒子・灰を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
8	にぶい褐色	黄灰色粘土ブロック・黄灰色粘土粒子を中量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
9	灰　褐　色	黄灰色粘土粒子を中量，ローム小ブロック・ローム粒子・黄灰色粘土ブロックを少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
10	褐　　色	焼土粒子・黄灰色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
11	にぶい赤褐色	灰褐色粘土ブロックを多量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。火熱を受け，赤変硬化している。

ピット　Ｐ1は長径17cm，短径14cmの楕円形で，深さ22cmである。南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。

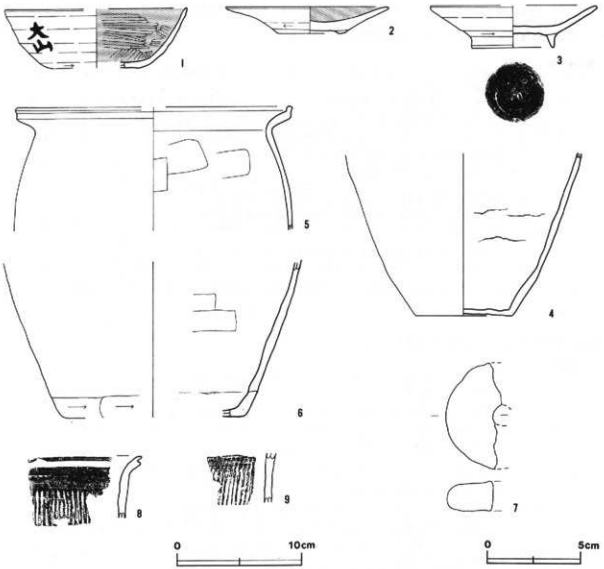
覆土　14層からなり，自然堆積と思われる。

土層解説

1	黒　褐　色	焼土中ブロックを中量，ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
2	暗　褐　色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロックを中量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土大ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
3	極暗褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロック・炭化粒子を中量，ローム中ブロック・炭化物・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
4	暗　褐　色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量，ローム大ブロックを中量，炭化物・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
5	黒　褐　色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
6	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，炭化粒子・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
7	黒　褐　色	ローム粒子・炭化物・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
8	暗　褐　色	ローム粒子・灰褐色粘土粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
9	暗　褐　色	灰褐色粘土粒子を多量，ローム小ブロック・ローム粒子を中量，炭化物・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
10	暗　褐　色	ローム粒子を多量，ローム小ブロック・灰褐色粘土粒子を中量，炭化物・炭化粒子・焼土大ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
11	灰　褐　色	灰褐色粘土ブロックを多量，ローム粒子を中量，灰を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
12	にぶい黄褐色	灰褐色粘土粒子を多量，ローム小ブロック・ローム粒子を中量，炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
13	暗　褐　色	灰褐色粘土粒子を多量，ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロック・炭化粒子・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
14	暗　褐　色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，炭化粒子・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。

遺物　土師器片249点，須恵器片94点，土製品１点（紡錘車），石製品１点（支脚），炭化米５点が出土している。遺物は本跡の西半分が撹乱を受けているので，東半分と竈内から出土している。竈内から出土したものは約６％，東半分から出土したものは約58%で，撹乱部分から約36%である。また，竈を除いた遺物の出土レベルは，覆土上層からのものが43%で一番多く，覆土中層と覆土下層からのものが約19%，撹乱部分から約38%である。第60図１の土師器坏（墨書「大山？」）が南壁寄りの覆土中から，３の須恵器高台付皿が東壁寄りの覆土上層から，４の土師器小形甕が竈内の石製支脚の上と東袖の上から，５の土師器甕が竈手前の覆土上層から，６の土師器甕が竈内の支脚周辺から，７の紡錘車が東壁寄りの覆土上層からそれぞれ出土している。４は石製支脚（写真のみ掲載　ＰＬ31）の上に重ねられて支脚として利用されている。また，竈の灰の中から出土した炭化米は調理時に混入したと考えられる。

所見　時期は，遺構の形態や出土遺物から，平安時代前期（９世紀後葉）と考えられる。



第60図　第19号住居跡出土遺物実測図

第19号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第60図 1	坏 土師器	A [14.8] B 4.8 C [6.8]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り，内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部外面回転ヘラ削り後，ナデ。	雲母　スコリア 砂粒 内面　黒色 外面　橙色 普通	10%　P143 内面黒色処理 体部外面墨書「大山」 覆土中 (南壁寄り)
2	高台付皿 土師器	A 13.0 B 2.2 D 5.4 E 0.3	高台部と体部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	雲母　スコリア 砂粒 橙色 普通	80%　P145 内面黒色処理 覆土上層～下層(東壁寄り) SI63から出土した土器片と接合
3	高台付皿 須恵器	A [13.4] B 3.4 D 6.5 E 1.0	高台部から口縁部の破片。高台付部は「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	雲母　砂粒 灰白色 普通	30%　P144 覆土上層 (東壁寄り)

第60図 4	小形壺 土師器	B (13.0) C 7.8	底部から体部の破片。 平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ナデ。内面輪積痕有り。	長石 石英 砂粒 橙色 普通	30% P147 外面二次焼成 竈内(支脚・竈縁上 支脚転用)
5	甕 土師器	A [22.0] B (9.9)	体部から口縁部の破片。 体部からLl縁部にかけて，内彎気味に立ち上がる。 口縁部は外反し，中位に明瞭な稜を持つ。 端部はつまみ上げられ，口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。	Ll縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ，内面一部ヘラナデ。	長石 石英 砂粒 にぶい橙色 普通	10% P146 覆土上層 (竈手前)
6	甕 土師器	B (12.5) C [14.6]	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面ナデ，下位ヘラ削り。内面ナデ，一部ヘラナデ，輪積痕有り。	石英 雲母 砂粒 にぶい黄橙色 普通	10% P148 竈内 (支脚周辺)

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地点	備考
7	紡錘車	5.5	(3.0)	1.6	(1.1)	(24)	覆土上層(東壁寄り)	DP3

図版番号	器種	部分	器形・手法の特徴	備考(台板番号，出土位置，色調など)
8	鉢 壺類	体部 ～ 口縁部	口縁部は強く外反し，口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。Ll縁部内外面横ナデ。体部外面平行タタキ，内面横ナデ。	TP16 覆土上層 浅黄橙色
9	鉢 類壺器	体部 ～ 口縁部	体部内外面横ナデ，外面平行タタキ。	TP17 覆土上層 灰白色

第20号住居跡（第61図）

位置　調査Ⅰ区北部，C 6 b1区。

重複関係　本跡は第22号住居跡と重複している。第22号住居跡が，本跡の西壁寄りの覆土中層を掘り込んでいることから，本跡が古い。

規模と平面形　長軸2.98m，短軸2.82mの方形である。

主軸方向　N－0°

壁　壁高は57～60cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　竈部分を除く北壁と西壁周辺を半周している。上幅15～34cm，下幅3～12cm，深さ6cmで，断面形はU字状である。

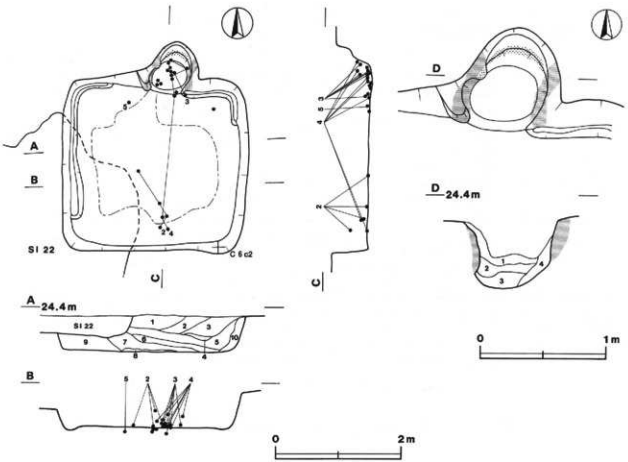
床　全面が平坦で，締まっている。特に，中央部が踏み固められている。

竈　北壁中央やや東寄りに傾いて，砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部と煙道部が残存している。袖部は，床面に粘土の痕跡が確認できないこと，焚口部が北壁の下端と同一線上にあることから，掘り込まれた壁の角を利用し，若干の粘土を貼り付けている程度で，前方に張り出しては作られていないと考えられる。規模は，焚口部から煙道部まで85cm，最大幅80cm，壁外への掘り込み55cmである。火床部は，床面を4cmほど掘りくぼめており，火熱を受けているが，赤変硬化していない。それに続く竈奥の煙道部にかかる所と袖部の際が赤変硬化している。煙道部は外傾して，階段状に立ち上がる。

竈土層解説

1　暗褐色　灰褐色粘土粒子を中量，ローム小ブロック・ローム粒子を少量，炭化粒子・焼土粒子を微量含み，粘性を帯び，硬く締まっている。

2　黒褐色　ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性を帯び，硬く締まっている。



第61図　第20号住居跡実測図

3　暗　褐　色　　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量，炭化粒子を微量含み，粘性を帯び，硬く締まっている。
4　極暗褐色　　ローム粒子・焼土粒子を微量含み，強い粘性を帯び，締まっている。

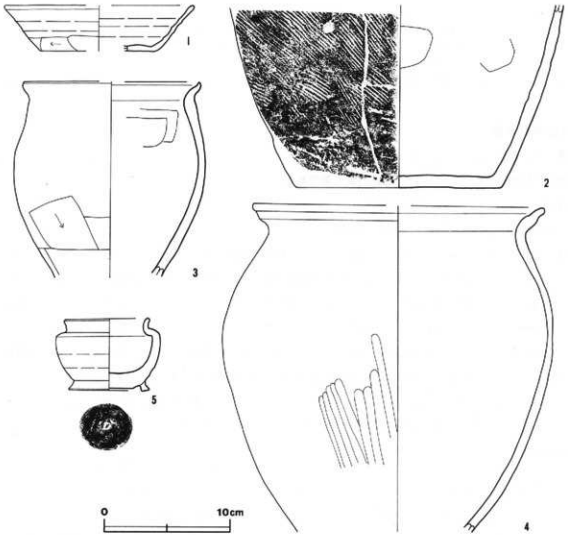
覆土　10層からなり，自然堆積と思われる。

土層解説

1　褐　　色　　ローム小ブロック・ローム粒子・黒褐色土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
2　暗　褐　色　　ローム粒子を少量，ローム小ブロック・黒褐色土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
3　褐　　色　　ローム小ブロック・ローム粒子・黒褐色土小ブロックを少量，ローム中ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
4　黒　褐　色　　ローム粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
5　暗　褐　色　　ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量，焼土粒子・灰褐色粘土中ブロックを微量含み，締まっている。
6　暗　褐　色　　ローム小ブロック・ローム粒子を少量，ローム中ブロック・炭化粒子・焼土粒子を微量含み，締まっている。
7　褐　　色　　ローム粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・黒褐色土小ブロックを少量含み，締まっている。
8　極暗褐色　　ローム小ブロック・ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
9　褐　　色　　ローム粒子を中量，ローム小ブロック・焼土粒子を少量，焼土小ブロック・黒褐色土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
10　褐　　色　　ローム粒子を中量，ローム小ブロック・黒褐色土小ブロックを少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。

遺物　土師器片36点，須恵器片12点が出土している。遺物は少ないが，竈から24点が出土している。第62図2の須恵器鉢が南壁寄りの覆土下層と中央部の床面直上から，3の土師器小形甕が竈手前の覆土下層と竈内から，4の土師器甕が南壁寄りの覆土下層と床面直上，竈手前の覆土下層，および竈内から，5の須恵器短頸壺（完形）が逆位で竈西脇の覆土下層からそれぞれ出土している。竈内から出土した土器片は，火熱を受けておらず，3の土師器甕のように南壁寄りから出土した破片と接合した例がみられることから，住居廃絶後に廃棄された可能性が高いと思われる。

所見　時期は，遺構の形態や出土遺物から，奈良時代後期（8世紀後葉）と考えられる。



第62図　第20号住居跡出土遺物実測図

第20号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第62図 1	坏 須恵器	A [15.0] B 3.6 C [9.2]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ切り後，ナデ。	雲母　砂粒 褐灰色 普通	10%　P169 覆土中
2	鉢 須恵器	B (14.5) C 16.4	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	外面上位平行タタキ，下位ヘラ削り。内面アテ具痕有り。底部内外面ナデ。	長石　雲母　砂粒 灰白色 普通	40%　P170 覆土下層 (南壁寄り) 床面直上 (中央部)
3	小形甕 土師器	A [14.0] B (15.6)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ，一部ヘラナデ。外面中位から下位へヘラ削り。	長石　石英　砂粒 橙色 普通	60%　P172 竈内 覆土下層 (竈手前)
4	甕 土師器	A [23.3] B (25.8)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。外面一部ヘラナデ，中位から下位にかけヘラ磨き。	雲母　スコリア 砂粒 にぶい褐色 普通	60%　P171 竈内 覆土下層（南壁寄り・竈手前） 床面直上 (南壁寄り)

第62図 5	短頸壺 須恵器	A 67 B 57 C 65	高台部は短く，「ハ」の字状に開く。平底。 体部は内彎気味に立ち上がり，上位で最大径を有する。口縁部は直立し，端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後，ナデ。指頭痕有り。高台部貼り付け，ロクロナデ。	長石　砂粒 灰色 普通	100%　P173 覆土下層 (竈西脇)

第21号住居跡（第63図）

位置　調査Ⅰ区北部，Ｃ５e8区。

規模と平面形　長軸4.05m，短軸3.49mの長方形である。

主軸方向　Ｎ－０°

壁　壁高は49～55cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　竈東脇を除き，巡っている。上幅22～32cm，下幅４～14cm，深さ３～６cmで，断面形はＵ字状である。

床　全面が平坦で，締まっている。特に，中央部が踏み固められている。また，竈東脇に，長径76cm，短径52cmの楕円形を呈した粘土塊が確認された。これは，火熱を受けていないことから，未使用の竈材の可能性が考えられるが，用途は不明である。

竈　北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部，煙道部と両側の袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部まで128cm，最大幅155cm，壁外への掘り込み45cmである。天井部の一部が西袖脇の床面に崩落している。火床部は，床面を９cmほど掘りくぼめており，火熱を受けて赤変しているが，あまり硬化していない。煙道部は外傾して，緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

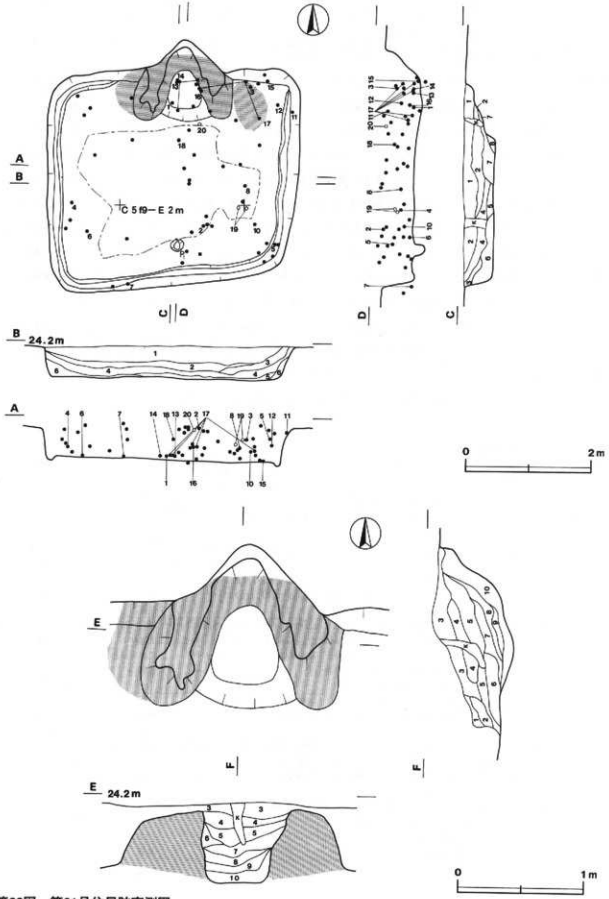
1	褐　色	灰褐色粘土粒子を中量，ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量，炭化粒子を微量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
2	暗褐色	灰褐色粘土粒子を中量，ローム粒子・炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
3	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を中量，炭化物・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
4	にぶい褐色	灰褐色粘土粒子を中量，ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
5	暗褐色	ローム粒子を中量，炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。
6	極暗褐色	焼土小ブロック・焼土粒子を中量，ローム粒子・炭化物・炭化粒子・焼土中ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。
7	暗褐色	焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を多量，焼土大ブロック・焼土中ブロックを中量，ローム粒子・炭化物・炭化粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。火熱を受けた天井部の一部が崩落した層と思われる。
8	暗褐色	焼土粒子を多量，焼土小ブロックを中量，ローム粒子・炭化粒子・焼土大ブロック・焼土中ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。火熱を受けた天井部の一部が崩落した層と思われる。
9	灰褐色	灰を多量，炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。灰層と思われる。
10	にぶい赤褐色	焼土大ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を多量，ローム粒子・炭化物を少量含み，粘性は弱く，締まっている。火熱を受けた天井部の一部が崩落した層と思われる。

ピット　Ｐ１は径17～19cmの円形で，深さ20cmである。南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　８層からなり，自然堆積と思われる。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロック・焼土粒子を中量，炭化物・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
2	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
3	黒　色	ローム粒子を多量，ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。
4	黒褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，炭化物・炭化粒子・焼土大ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。
5	極暗褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロック・焼土粒子を中量，炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。
6	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量，ローム大ブロック・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。



第63図　第21号住居跡実測図

7　暗褐色　ローム粒子を多量，ローム小ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子・灰褐色粘土大ブロック・灰褐色粘土中ブロック・灰褐色粘土小ブロック・灰褐色粘土粒子を中量，炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性を帯び，硬く締まっている。

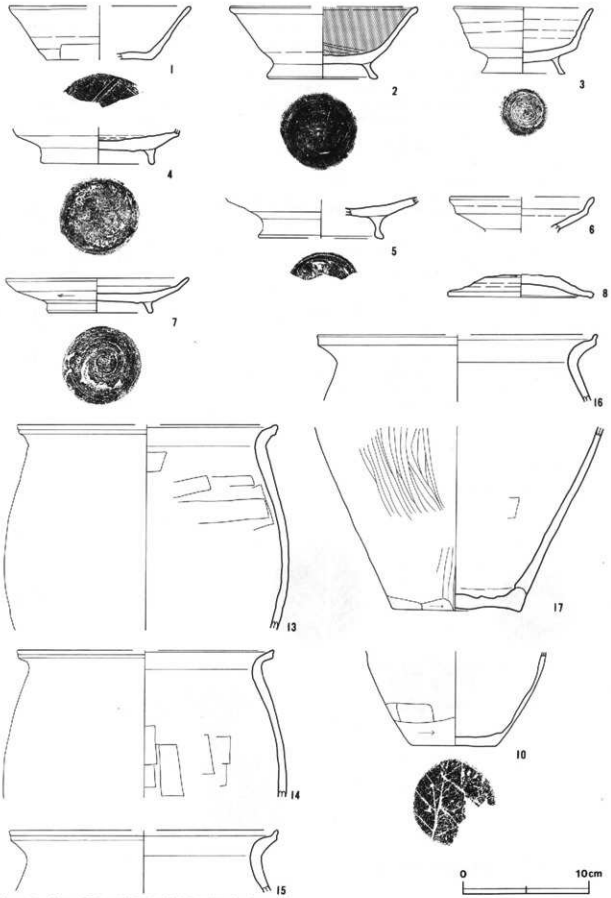
8　極暗褐色　ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を中量，ローム小ブロック・炭化粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。竈材の流れ込みと考えられる。

遺物　土師器片219点，須恵器片215点，灰釉陶器12点，礫7点が出土している。遺物は，竈と住居跡全体の覆土中から出土しているが，南半分に約46%が集中している。竈内から出土したものは約18%，北東部から出土したものが約10%，南東部から出土したものが約19%，南西部から出土したものが約27%，北西部から出土したものが約13%，その他が約13%である。また，竈を除いた遺物の出土層位は，覆土下層のものが若干少なく，覆土上層が約34%，覆土中層が約35%，覆土下層と床面直上が約27%で，その他が4%である。第64図1の須恵器坏，第65図9の須恵器小形短頸壺，第64図13・14・16の土師器甕が竈内から，3の須恵器高台付坏が北東コーナー部寄りの覆土中層から，7の須恵器盤が南壁寄りの覆土下層から，8の須恵器鉢が東壁寄りの覆土下層から，17の土師器甕が竈内と北東コーナー部寄りの覆土下層から，第65図18の灰釉陶器椀が中央部の覆土中層から，19の須恵器鉢が東壁寄りの覆土中層からそれぞれ出土している。18の灰釉陶器椀は猿投窯産黒笹14号窯式であり，18以外の灰釉陶器11点は細片で実測不能であるが，すべて二川窯産の長頸瓶の可能性が高い。竈内から出土した1や13などの土器片は，火熱を受けておらず，火床部の中央から焚口部にかけての，火熱を受けた天井部の一部が崩落した層や灰層と思われる，7～9層から出土していることから，竈周辺に置かれていた土器片が天井部とともに崩落したものと考えられる。

所見　時期は，遺構の形態や出土遺物から，平安時代前期（9世紀中葉）と考えられる。

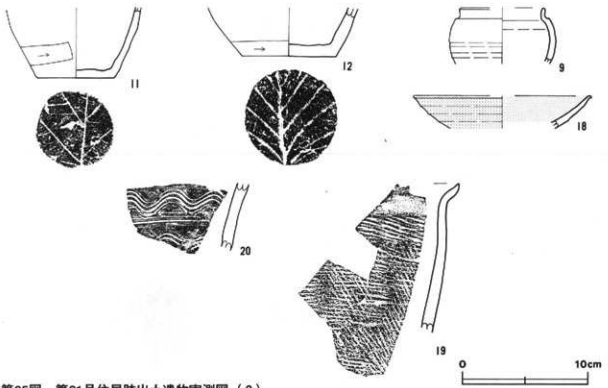
第21号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第64図 1	坏 須恵器	A [14.3] B 4.3 C [8.4]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り後，ナデ。	雲母　砂粒 スコリア 灰黄色 普通	20%　P149 竈内
2	高台付坏 上師器	A [14.8] B 4.3 D 8.6 E 1.1	高台部から口縁部の破片。高台部は長く，「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。内面から底部内面にかけヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	石英　雲母　砂粒 スコリア 内面　黒色 外面　にぶい黄橙色 普通	65%　P150 内面黒色処理 覆土上層 (中央部南寄り)
3	高台付坏 須恵器	A 11.1 B 5.2 D 6.6 E 1.3	口縁部の一部欠損。高台部は長く，「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ，下位に明瞭な稜を持ち，直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	長石　石英　砂粒 スコリア にぶい褐色 普通	95%　P151 覆土中層 (北東コーナー)
4	高台付坏 須恵器	B (2.9) D 9.0 E 1.3	高台部から底部の破片。 高台部は「ハ」の字状に開く。平底。	底部回転ヘラ削り。 高台部貼り付け，ロクロナデ。	石英　雲母　砂粒 暗灰黄色 普通	50%　P153 覆土下層 (西壁寄り)
5	高台付坏 須恵器	B (3.3) D [10.0] E 1.5	底部から体部の破片。高台部は長く，「ハ」の字状に開く。平底。体部はド位に不明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後，ナデ。 高台部貼り付け，ロクロナデ。	石英　雲母　砂粒 灰白色 普通	30%　P154 覆土中層 (南東コーナー)
6	甕 土師器	A [11.4] B (2.8)	体部と口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，中位に明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。	石英　雲母　砂粒 スコリア にぶい褐色 普通	10%　P155 覆土下層 (西壁寄り)



第64図　第21号住居跡出土遺物実測図（1）

第64図 7	盤 須恵器	A 14.5 B 2.8 D 8.2 E 0.9	体部と口縁部の一部欠損。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ，中位に明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	砂粒 灰色 普通	90%　P152 覆土下層 (南壁寄り)
8	壺 須恵器	A [11.7] B (1.7)	つまみと口縁部の一部欠損。天井部は平坦で，直線的に開く。口縁部は外反して，端部は屈曲して垂下する。	天井部内外面・口縁部内外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り。	長石　石英　雲母 砂粒 灰色 普通	80%　P157 覆土下層 (東壁寄り)
第65図 9	小形壺蓋 須恵器	A [6.6] B (4.5)	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がり，上位で最大径を有する。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。	砂粒 黄灰色 普通	20%　P167 竈内
第64図 10	小形甕 土師器	B (7.5) C 6.7	底部と体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ナデ。体部外面下位ヘラ削り。底部ナデ，木葉痕有り。	長石　石英　砂粒 橙色 普通	30%　P164 覆土下層 (南東コーナー)
第65図 11	小形甕 土師器	B (5.6) C 6.0	底部と体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ナデ。体部外面下位ヘラ削り。底部ナデ，木葉痕有り。	石英　雲母　砂粒 スコリア 褐色 普通	30%　P165 覆土上層 (東壁寄り)
12	小形甕 土師器	B (4.0) C 9.5	底部と体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ナデ。体部外面下位ヘラ削り。底部ナデ，木葉痕有り。	長石　石英　砂粒 橙色 普通	10%　P166 覆土中層 (北東コーナー)
第64図 13	甕 土師器	A [20.4] B (16.3)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ，内面一部ヘラナデ。	石英　雲母　砂粒 スコリア にぶい橙色 普通	20%　P158 竈内



第65図　第21号住居跡出土遺物実測図（2）

第64図 14	甕 土師器	A [20.5] B (11.6)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ，内面一部ヘラナデ。	長石　石英　雲母 砂粒 褐色 普通	15%　P159 竈内
15	甕 土師器	A [21.2] B (5.0)	頸部から口縁部の破片。口縁部は外反し，中位に明瞭な後を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。	長石　石英　砂粒 橙色 普通	10%　P160 床面直上 (北東コーナー)
16	甕 土師器	A [22.2] B (5.3)	頸部から口縁部の破片。口縁部は外反し，中位に明瞭な後を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。	長石　石英　雲母 砂粒 橙色 普通	10%　P161 竈内
17	甕 土師器	B (14.6) C 10.0	底部と体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ナデ。体部外面中位から ヘラ磨き，下位ヘラ削り。内面一部ヘラナデ，輪積痕有り。底部ナデ。	石英　雲母　砂粒 スコリア にぶい橙色 普通	50%　P163 竈内 覆土下層 (北東コーナー)
第65図 18	椀 灰釉陶器	A [14.0] B (2.6)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。釉調を塗りも。	砂粒 灰黄色 普通	20%　P168 覆土中層 (中央部) 猿投窯系 (黒笹14号窯式)

図版番号	器種	部分	器形・手法の特徴	備考（内側番号，出土位置，色調など）
19	鉢 須恵器	体部 ～ 口縁部	体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し，端部はつまみ上げられている。口縁部内外面ロクロナデ。体部外面交互に交差させた平行タタキ，内面ロクロナデ。	TP40 覆土中層（東壁寄り） 浅黄橙色
20	甕 須恵器	口縁部	内外面ロクロナデ。外面に4本単位の櫛歯による横走波状文と2本単位の平行沈線が施されている。	TP21 覆土下層（東壁寄り） 灰色

第22号住居跡（第66図）

位置　調査Ⅰ区北部，Ｃ６b1区。

重複関係　本跡は第20・23号住居跡と重複している。本跡が，第20・23号住居跡の覆上を掘り込んでいることから，本跡がいずれよりも新しい。

規模と平面形　長軸3.55m，短軸3.25mの方形である。

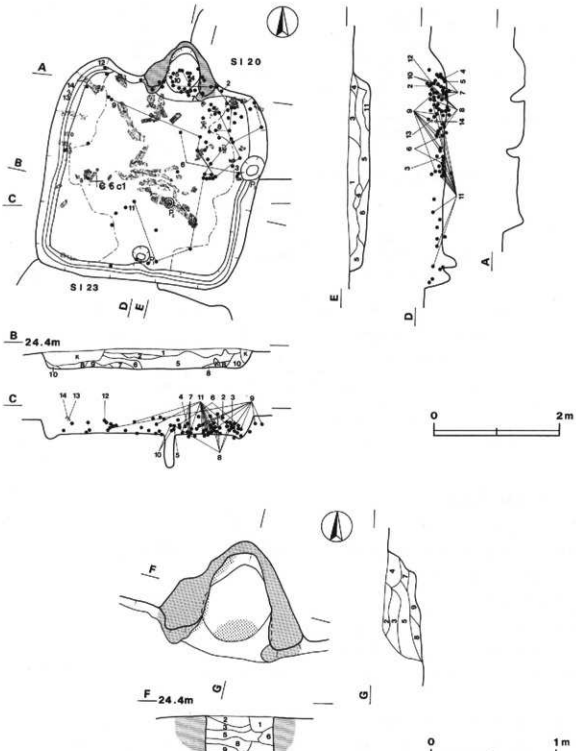
主軸方向　Ｎ－14°－Ｅ

壁　壁高は22～36cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　北東コーナー部を除き，巡っている。上幅20～35cm，下幅４～８cm，深さ５～10cmで，断面形はU字状である。

床　全面が平坦で，特に，中央部が踏み固められている。

竈　北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部，煙道部と両側の袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部まで95cm，最大幅115cm，壁外への掘り込み64cmである。火床部は，床面を５cmほど掘りくぼめており，火熱を受けて赤変硬化している。焚口部から90cm奥の火床部に第67図７の土師器小形甕を逆位に埋め込んで，支脚として利用している。また，その上に４の土師器高台付坏を逆位で重ねてある。４はあまり火熱を受けていないが，７と一体で支脚として利用されたと思われる。煙道部は外傾して，緩やかに立ち上がる。袖部の内側に貼り付けられていた土器片は，二次焼成を受けていることから，竈の補強材として利用されていたものと思われる。



第66図　第22号住居跡実測図

覆土層解説

1　暗赤褐色　焼土小ブロック・粒子を中量，ローム粒子・炭化粒子を少量，焼土中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
2　暗　褐　色　ローム粒子・炭化物・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
3　暗　褐　色　灰褐色粘土粒子を中量，ローム粒子・炭化物・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
4　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子を少量，炭化粒子・焼土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
5　黒　褐　色　焼土粒子を多量，炭化物・焼土小ブロックを中量，ローム粒子・炭化粒子・焼土大ブロック・焼土中ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
6　暗赤褐色　焼土中ブロック・焼土小ブロックを中量，炭化物・炭化粒子・焼土粒子を少量，ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。

7　暗赤褐色　ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量，焼土中ブロック・焼土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
8　暗赤褐色　焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を中量，ローム粒子・炭化物・炭化粒子・焼土大ブロック・灰を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
9　暗　褐　色　ローム粒子を少量，ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。

ピット　3か所（P1～P3）。P1は長径29cm，短径24cmの楕円形で，深さ14cmである。南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。P2は中央部に位置し，径15cmの円形で，深さ50cm，P3は東壁寄りに位置し，長径43cm，短径31cmの楕円形で，深さ10cmである。ともに性格は不明である。

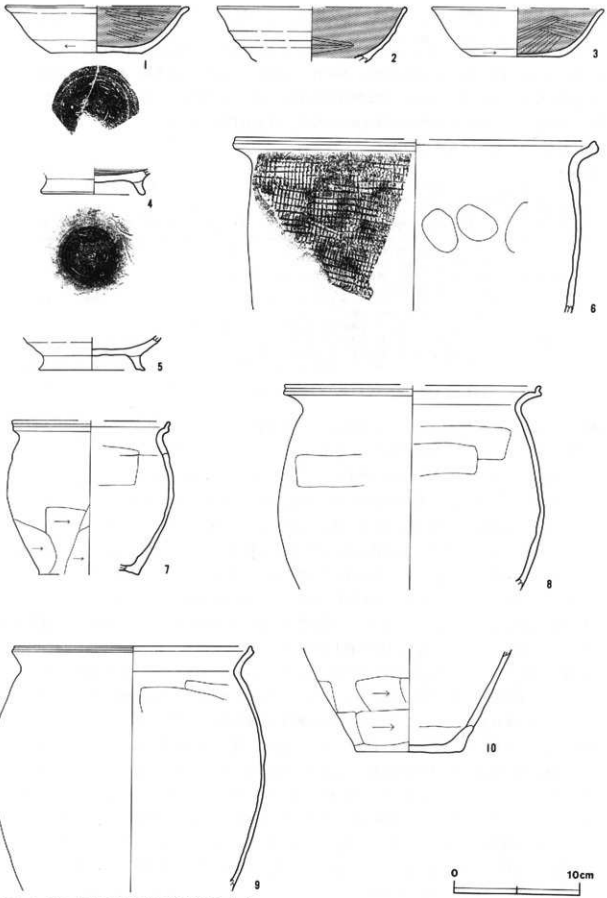
覆土　11層からなり，自然堆積と思われる。

土層解説

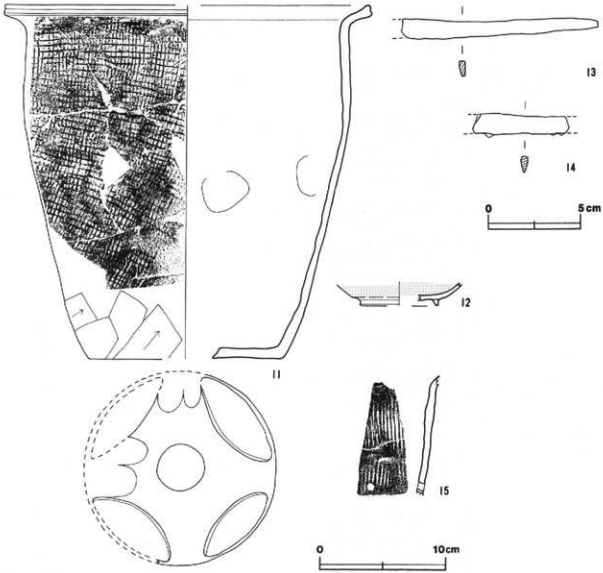
1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子を中量，ローム小ブロック・炭化粒子・焼土中ブロック・焼十小ブロックを少量，炭化物を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
2　黒　褐　色　ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を中量，炭化物を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
3　黒　褐　色　ローム粒子を中量，炭化物・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。
4　濃　褐　色　ローム粒子・灰褐色粘土大ブロックを中量，炭化物・焼土小ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。
5　黒　褐　色　ローム粒子・炭化材・焼土粒子を多量，焼土小ブロックを中量，ローム小ブロック・炭化物・焼土中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
6　暗赤褐色　炭化材・焼土小ブロック・焼土粒子を多量，ローム粒子・炭化粒子・焼土中ブロックを中量，ローム小ブロック・炭化物を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
7　赤　褐　色　焼土大ブロック・焼十中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を多量，ローム小ブロック・炭化物・灰褐色粘土大ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
8　極暗褐色　炭化材を多量，ローム粒子・炭化物を中量，炭化粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。
9　暗赤褐色　ローム粒子・炭化材・焼土粒子を多量，ローム小ブロック・炭化物・焼土小ブロックを中量，炭化粒子・焼土中ブロック・灰褐色粘土中ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。
10　暗　褐　色　ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，炭化粒子・焼十小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。
11　極暗褐色　ローム粒子・炭化物・灰褐色粘土中ブロックを中量，焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。

遺物　土師器片305点，須恵器片122点，緑釉陶器２点，鉄製品２点（刀子），礫１点，多量の炭化材が出土している。遺物は，竈と住居跡全体の覆土中から出土しているが，中心部から北東部にかけて集中している。竈内から出土したものは約26%，北東部から出土したものが約25%，南東部から出土したものが約11%，南西部から出土したものが約12%，北西部から出土したものが約15%で，炭化材の中から出土したものなどが約11%である。また，竈を除いた遺物の出土層位は，覆土上層が約62%と一番多く，覆土中層が約26%，覆土下層と床面直上が約12%である。これらの多くは，家屋の焼失後に投棄されたと考えられる。炭化材は住居跡の北東部から中心部に集中し，床面近く（１～20cm浮いた状態）から多量に出土しているが，埋没時に移動しているものがあると思われる。第67図４と５の土師器高台付坏，７の土師器小形甕，10の土師器甕が竈内から，８の土師器甕が竈内ならびに竈東側から北東コーナー部の覆土上層から覆土中層にかけて，第68図11の須恵器甑が南壁寄りから北東コーナー部の覆土上層から覆土下層にかけての広い範囲で，12の緑釉陶器椀が北西コーナー部の覆土上層から，13と14の刀子が北壁寄りの覆土上層からそれぞれ出土している。12の椀は猿投窯産黒笹90号窯式のもの思われる。また，火床部から出土した８と10の土師器甕などの土器は火熱を受けておらず，竈外から出土した土器片と接合していることから，住居廃絶後に投棄された可能性がある。

所見　本跡は，多量の炭化材と焼土塊が出土していることから，焼失家屋と思われる。炭化材の樹種同定の結果，住居跡の構築材はクリ（クリ属ブナ科）が大部分を占め，その他に広葉樹６種類（クヌギ，ケヤキ，ヤマグワ，サクラ，キハダ，モクレン属）とイネ科タケ亜科のものを使用していることがわかった。この結果は，これまで県内の多くの遺跡で行われた樹種同定の結果から，茨城県県南部から県西部にかけて，多く使用されていたとされる構築材（クヌギ，コナラ）と異なる結果となった。このことは縄文時代から多く利用されていたクリが，古墳時代に利用度が少なくなり，奈良・平安時代に再度多く利用されるようになる傾向と一致している（付章参照）。時期は，遺構の形態や出土遺物から，平安時代前期（９世紀後葉）と考えられる。



第67図　第22号住居跡出土遺物実測図（1）



第68図　第22号住居跡出土遺物実測図（2）

第22号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第67図 1	坏 土師器	A［14.4］ B　3.8 C［7.2］	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，中位と下位に明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁端部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位回転ヘラ削り，内面から底部内面にかけヘラ磨き。底部外面回転ヘラ削り後，ナデ。	雲母　砂粒 スコリア 内面　黒色 外面　にぶい橙色 普通	30%　P174 内面黒色処理 覆土上層～中層 （南東コーナー）
2	坏 土師器	A［15.0］ B（4.3）	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，中位と下位に明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。	雲母　砂粒 スコリア 内面　黒色 外面　にぶい黄褐色 普通	20%　P175 内面黒色処理 覆土上層 （竈東脇）
3	坏 土師器	A［13.8］ B　3.9 C　6.9	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，下位に不明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位回転ヘラ削り，内面から底部内面にかけヘラ磨き。底部外面回転ヘラ切り後，ナデ。	雲母　砂粒 内面　黒色 外側にぶい橙色 普通	20%　P176 内面黒色処理 覆土中層 （東壁寄り）

第67図 4	高台付坏 土師器	B 2.1 D 8.0 E 1.1	高台部から底部の破片。 高台部は長く，「ハ」の字状に開く。平底。	底部内面ヘラ磨き，外面回転ヘラ削り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	素母 砂粒 内面 黒色 外面 にぶい橙色 普通	20% P177 内面黑色処理 竈内
5	高台付 土師器	B (2.8) D 8.4 E 1.1	高台部から体部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部内面ヘラ磨き，外面回転ヘラ削り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	雲母 砂粒 橙色 普通	20% P178 二次焼成 竈内
6	鉢 須恵器	A [28.6] B (13.6)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し，端部はつまみ上げられ，中位に明瞭な稜を持つ。口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面格子タタキ，内面アテ具痕有り。	石英 雲母 砂粒 黄褐色 普通	10% P179 覆土中層 (東壁中央部)
7	小形壺 土師器	A [12.4] B 12.2 C [8.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，端部はつまみ上げられ，中位に明瞭な稜を持つ。口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面横ナデ。 体部内外面ナデ，一部ヘラナデ。外面中位から下位ヘラ削り。内面輪積痕有り。	石英 雲母 砂粒 スコリア 橙色 普通	60% P180 竈内
8	甕 土師器	A [20.4] B (16.2)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し，端部はつまみ上げられ，口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面横ナデ。 体部内外面ナデ，一部ヘラナデ。	石英 雲母 砂粒 橙色 普通	40% P181 竈内 覆土上層～中層 (竈東側から 北東コーナー)
9	甕 土師器	A 18.8 B (19.5)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，端部はつまみ上げられ，口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。内面一部ヘラナデ。	長石 石英 砂粒 スコリア にぶい橙色 普通	30% P182 覆土上層～中層 (北東コーナーから 北東コーナーにかけて)
10	甕 土師器	B (8.2) C 8.5	底部から体部の破片。 平底。体部は直線的に立ち上がる。	体部内外面ナデ。外面下位ヘラ削り，内面輪積痕有り。底部ナデ。	石英 雲母 砂粒 スコリア 橙色 普通	20% P183 竈内
第68図 11	甕 須恵器	A [29.0] B 28.1 C 15.4	底部から口縁部の破片。平底。4孔を有する。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し，口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面格子タタキ。下位ヘラ削り。内面アテ具痕有り。底部ナデ。	長石 石英 砂粒 灰黄色 普通	40% P184 底部二次焼成 スス付着 覆土上層～下層 (南壁寄りから 北東コーナーにかけて)
12	椀 緑釉陶器	B (1.7) D [6.0] E 0.5	高台部から体部の破片。高台部は角状で，「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ロクロナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。釉刷毛塗り。	砂粒 オリーブ灰色 良好	10% P185 覆土上層 (北西コーナー) 搬投産 (黒笹90号窯式)

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	出土地点	備考
13	刀子	(10.4)	1.2	0.3	(10)	覆土上層（北壁寄り）	M15
14	刀子	(5.0)	0.9	0.4	(6.35)	覆土上層（北壁寄り）	M16

図版番号	器種	部分	器形・手法の特徴	備考（台帳番号，出土位置，色調など）
15	鉢 須恵器	体部	外面平行タタキ。左下に孔を有する。	TP22 覆土上層（南東コーナー） 橙色

第23号住居跡（第69図）

位置　調査Ⅰ区北部，Ｃ６c1区。

重複関係　本跡は第22号住居跡と重複している。第22号住居跡が，本跡の竈の上半部を含む北壁付近を掘り込んでいることから，本跡が古い。

規模と平面形　長軸3.70m，短軸3.58mの方形である。

主軸方向　Ｎ－20°－Ｅ

壁　壁高は48～60cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　北壁周辺を除き，巡っている。上幅30～55cm，下幅５～15cm，深さ４～６cmで，断面形はＵ字状である。

床　全面が平坦で，締まっている。特に，中央部が踏み固められている。

竈　北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。上半分を第22号住居跡によって破壊されているため，火床部と煙道部の下半分のみが残存している。袖部については，粘土の痕跡が認められず，掘り込まれた壁面にも粘土が貼り付けられた様子が認められなかった。現状での規模は，焚口部から煙道部まで95cm，最大幅82cm，壁外への掘り込み62cmである。火床部は，床面を３cmほど掘りくぼめており，火熱を受けており，火床部と竈内鍋の壁際の一部が赤変硬化している。煙道部は外傾して，緩やかに立ち上がる。また，竈内から出土した多くの土器片は，第70図５の土師器高台付皿，７・８・10の土師器小形甕，11の土師器甕のように竈内（９～11層から出土）と竈外から出土した破片が接合している例が多いことから，竈周辺に置かれていた土器が天井部とともに崩落したと考えられる。

竈土層解説

1	極暗褐色	ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
2	暗褐色	灰褐色粘土粒子を中量，ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
3	暗褐色	灰褐色粘土粒子を中量，焼土粒子を少量，ローム粒子・炭化粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
4	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量，炭化物を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
5	暗赤褐色	焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を中量，ローム粒子・炭化物を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
6	極暗赤褐色	焼土粒子を多量，炭化物・焼土小ブロックを中量，ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，締まっている。
7	暗褐色	灰褐色粘土粒子を多量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。天井部または袖部の崩落土と思われる。
8	極暗褐色	焼土粒子を中量，ローム粒子・炭化物・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
9	灰褐色	灰褐色粘土粒子を中量，焼土小ブロック・焼土粒子を少量，炭化粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
10	黒褐色	炭化物を多量，ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
11	黒褐色	炭化粒子を多量，焼土粒子を少量，灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
12	暗赤褐色	炭化粒子を中量，灰を少量，焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性を帯び，締まりはない。
13	極暗赤褐色	炭化粒子を中量，焼土粒子を少量，灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性を帯び，締まりはない。

ピット　３か所（Ｐ１～Ｐ３）。Ｐ１とＰ２は径25～30cmの円形で，いずれも深さ13～20cmである。中央部の東壁寄りと西壁寄りに位置し，主柱穴と考えられる。Ｐ３は長径36cm，短径32cmの楕円形で，深さ18cmである。南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。

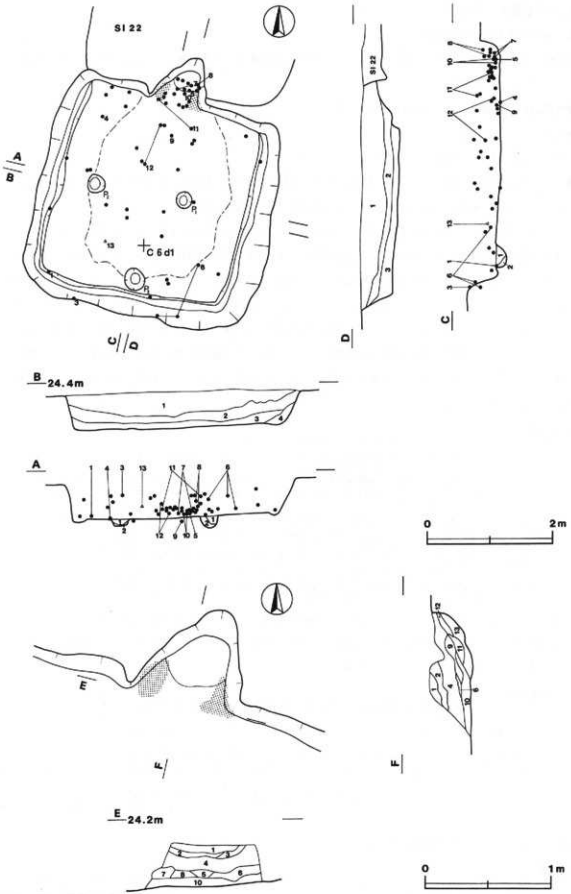
ピット土層解説

P1	1	黒褐色	ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量，炭化物・焼土粒子を微量含み，粘性を帯び，硬く締まっている。杭痕の可能性がある。
	2	暗褐色	ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を多量含み，強い粘性を帯び，硬く締まっている。
P2	1	黒褐色	ローム粒子・炭化物・焼土粒子を少量，炭化粒子を微量含み，粘性を帯び，締まっている。
	2	暗褐色	ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を多量含み，強い粘性を帯び，硬く締まっている。
P3	1	黒褐色	ローム粒子・炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。
	2	暗褐色	ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を多量含み，強い粘性を帯び，硬く締まっている。

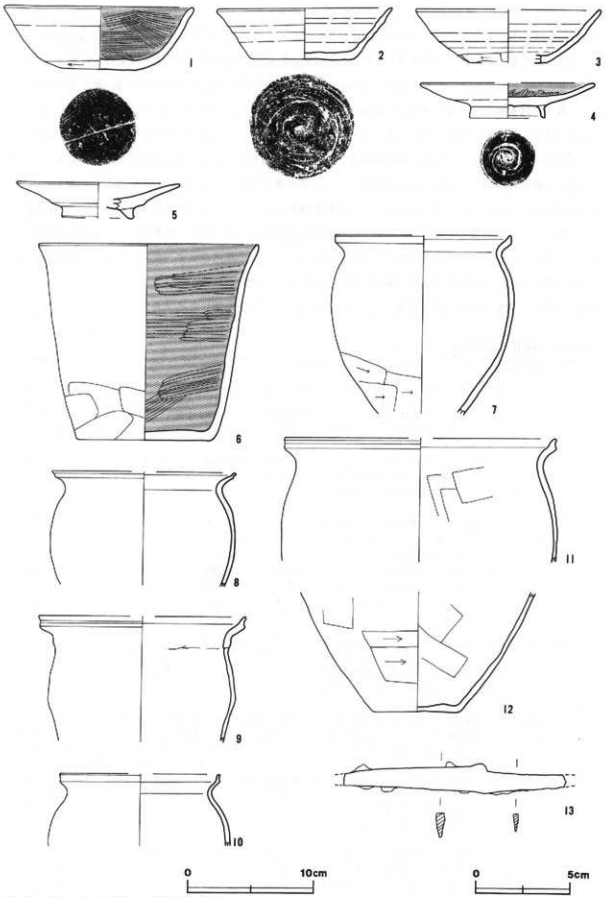
覆土　４層からなり，自然堆積と思われる。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子を中量，ローム小ブロック・炭化物・焼土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
2	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，炭化物・焼土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量，炭化粒子・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
4	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量，ローム中ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。



第69図　第23号住居跡実測図



第70図　第23号住居跡出土遺物実測図

遺物　土師器片316点，須恵器片101点，灰釉陶器１点，鉄製品１点（刀子）が出土している。遺物は，竈と住居跡全体の覆土中から出土しており，竈を除き平均的に出土している。竈内から出土したものは約25%，北東部から出土したものが約18%，南東部から出土したものが約15%，南西部から出土したものが約15%，北西部から出土したものが約20%，その他が約７%である。また，竈を除いた遺物の出土層位は，覆土上層が多く約40%，覆土中層が約30%，覆土下層と床面直上が約30%である。特に竈内から出土した遺物は残存率がよく，竈外から出土した土器片と接合している。その接合関係をみてみると，第70図５の土師器高台付皿が北西コーナー部の覆土中から，７の土師器小形甕が南西コーナー部の覆土中層から，８の土師器小形甕が北東コーナー部の覆土中層から，10の土師器小形甕が北西コーナー部の覆土中から，11の土師器甕が竈東側の覆土上層からの破片と接合している。その他としては，１の土師器坏が南西コーナー部の覆土下層から，４の土師器高台付皿が北西コーナー部の覆土下層から，６の土師器小形鉢が南東コーナー部から南壁の覆土上層から覆土下層にかけて，13の刀子が中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。北東コーナー部寄りの覆土上層から出土した灰釉陶器１点は，長頸瓶の体部で，猿投窯産黒笹14号窯式と考えられる。

所見　時期は，遺構の形態や出土遺物から，平安時代前期（９世紀中葉）と考えられる。

第23号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第70図 1	坏 土師器	A 15.1 B 3.0 C 6.2	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，中位と下位に不明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位回転ヘラ削り，内面から底部内面にかけヘラ磨き。底部外面回転ヘラ削り後，ヘラナデ。	石英　砂粒 橙色 普通	80%　P186 内面黒色処理 覆土下層 (南西コーナー)
2	坏 須恵器	A 13.8 B 4.2 C 8.2	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後，ナデ。	長石　石英　雲母 砂粒 灰黄色 普通	80%　P187 覆土中
3	坏 須恵器	A [14.8] B 4.2 C [6.2]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，中位に明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位手持ちヘラ削り。底部ヘラ削り。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	20%　P188 覆土上層 (南東寄り)
4	高台付皿 土師器	A [13.8] B 2.8 D 6.0 E 0.9	高台部から口縁部の破片。 高台部は直線的に開く。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部内面から底部内面にかけヘラ磨き。底部回転ヘラ切り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	雲母　スコリア 砂粒 内面　にぶい赤褐色 外面　橙色 普通	50%　P189 内面黒色処理 覆土下層 (北西コーナー)
5	高台付皿 土師器	A [13.0] B 2.8 D [5.6] E 0.9	高台部から口縁部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ，下位に明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	石英　雲母　砂粒 スコリア 灰褐色 普通	40%　P190 竈内 覆土中 (北西コーナー)
6	小形鉢 土師器	A [17.3] B 15.6 C [10.8]	底部から口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。体部外面下位ヘラ削り，内面から底部内面にかけヘラ磨き。	石英　砂粒 スコリア にぶい橙色 普通	70%　P191 内面黒色処理 覆土上層～下層 (南西コーナー外側にかけ)
7	小形甕 土師器	A [14.0] B (14.3)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反し，中位に明瞭な稜を持ち，端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。外面下位ヘラ削り。	石英　雲母　砂粒 にぶい橙色 普通	20%　P192 竈内 覆土中層 (南西コーナー)
8	小形甕 土師器	A [14.6] B (9.0)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反し，中位に明瞭な稜を持ち，端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。 体部内外面ナデ。	石英　砂粒 にぶい褐色 普通	20%　P193 竈内 覆土中層 (北東コーナー)

第70図 9	小形甕 土師器	A［16.4］ B（10.0）	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，端部はつまみ上げられ，口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。内面輪積痕有り。	石英　雲母　砂粒 スコリア にぶい赤褐色 普通	10%　P195 覆土下層 （竈手前）
10	小形甕 土師器	A［12.8］ B（5.6）	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，中位に明瞭な稜を持ち，端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。	石英　雲母　砂粒 にぶい橙色 普通	20%　P196 竈内 覆土中 （北西コーナー）
11	甕 土師器	A［20.6］ B（9.9）	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，端部はつまみ上げられ，口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ，内面一部ヘラナデ。	長石　砂粒 にぶい橙色 普通	20%　P194 竈内 覆土上層 （竈東脇）
12	甕 土師器	B（9.5） C［6.8］	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ナデ。外面中位から下位ヘラ削り，内面ヘラナデ。底部木葉痕有り。	長石　石英　砂粒 橙色 普通	20%　P197 覆土中層～下層 （竈手前）

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
13	刀子	(11.7)	1.6	0.4	(16)	覆土中層（中央部）	M17

第24号住居跡（第71図）

位置　調査Ⅰ区北部，Ｂ６j2区。

重複関係　本跡は第７号溝と重複している。第７号溝が，本跡の東壁寄りの覆土上層を掘り込んでいることから，本跡が古い。

規模と平面形　長軸3.84m，短軸3.44mの方形である。

主軸方向　Ｎ－10°－Ｅ

壁　壁高は24～28cmで，垂直に立ち上がる。

壁溝　北壁と北西コーナー周辺を除き，巡っている。上幅10～24cm，下幅２～７cm，深さ２～５cmで，断面形はＵ字状である。

床　全面がほぼ平坦で，締まっている。特に，中央部が踏み固められている。

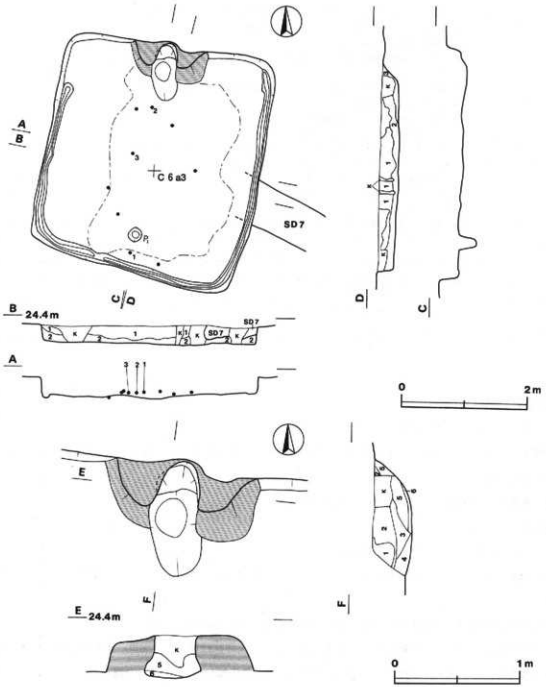
竈　北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部，煙道部と両側の袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部まで94cm，最大幅110cm，燃外への掻り込み５cmである。火床部は，床面を６cmほど掘りくぼめており，火熱を受けて赤変しているが，あまり硬化していない。煙道部は外傾して，階段状に立ち上がる。

竈土層解説

1　灰褐色　ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
2　灰褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
3　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量，焼土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
4　暗褐色　ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
5　暗褐色　ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性を帯び，締まりはない。
6　褐色　ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。

ピット　Ｐ1は径23cmの円形で，深さ30cmである。南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　３層からなり，自然堆積と思われる。



第71図　第24号住居跡実測図

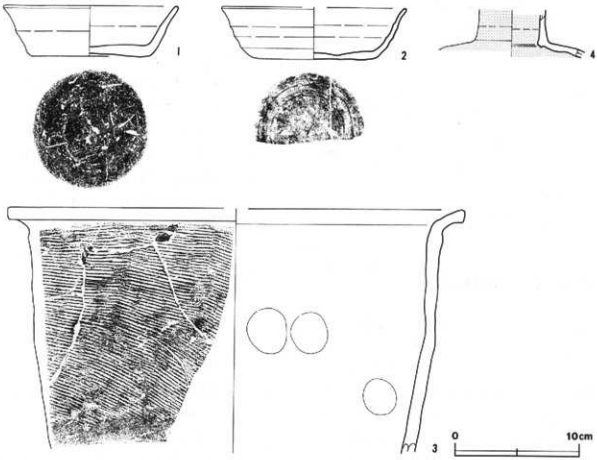
土層解説

1	黒　褐　色	ローム粒子を多量，ローム小ブロック・焼土粒子を中量，ローム中ブロック・炭化粒子・焼土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
2	暗　褐　色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。
3	暗　褐　色	ローム粒子を多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子を中量，炭化粒子・焼土中ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。

遺物　土師器片28点，須恵器片30点，灰釉陶器１点が出土している。遺物は，竈と住居跡全体の覆土中から出土している。竈内から出土したものは約１％，北東部から出土したものが約31％，南東部から出土したものが約20％，南西部から出土したものが約29％，北西部から出土したものが約19％である。また，竈を除いた出土層位は，覆土上層が約60％，覆土下層が約40％である。第72図１の須恵器坏が南壁寄りの覆土下層から，２の

須恵器坏が竈手前の覆土下層から，3の須恵器鉢が中央部の覆土中層から下層にかけて，4の灰釉陶器長頸瓶が北東コーナー部寄りの覆土上層からそれぞれ出土している。4の灰釉陶器長頸瓶は，猿投窯産の黒笹14号窯式または黒笹90号窯式と考えられ，本跡の時期と差があることから，後世の攪乱によって混入したと思われる。

所見　時期は，遺構の形態や出土遺物から，奈良時代後期（8世紀後葉）と考えられる。

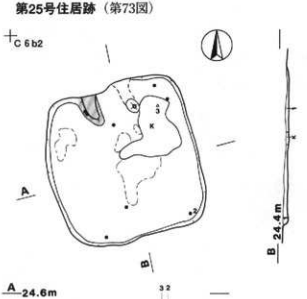


第72図　第24号住居跡出土遺物実測図

第24号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第72図 1	坏 須恵器	A 14.1 B 4.1 C 9.4	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，直線的に立ち上がり，中位に明瞭な稜を持つ。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後，ヘラ削り。	長石　雲母　砂粒 灰黄色 普通	80%　P198 体部外面油煙付着 覆土下層 (南壁寄り)
2	坏 須恵器	A [14.6] B 4.2 C 9.0	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がり，下位に明瞭な稜を持つ。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後，ナデ。	石英　雲母　砂粒 にぶい黄橙色 普通	40%　P199 覆土下層 (竈手前)
3	鉢 須恵器	A [36.4] B (19.7)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し，中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面上位平行タタキ，下位ヘラ削り。内面アテ具痕有り。	石英　雲母　砂粒 黄灰色 普通	30%　P200 覆土中層～下層 (中央部)
4	長頸瓶 灰釉陶器	B (3.8)	体部から頸部の破片。 体部は上位で最大径を有する。頸部は直立する。	頸部三段貼り付け，内外面ロクロナデ。体部内外面ロクロナデ。釉刷毛塗り。	砂粒 内面　灰黄色 外面　暗灰黄色 釉灰オリーブ色 普通	5%　P201 覆土上層 (北東コーナー) 猿投窯産 (黒笹14または90号窯式)

第25号住居跡（第73図）



第73図　第25号住居跡実測図

位置　調査Ⅰ区北部，C 6b2区。

規模と平面形　長軸2.49m，短軸2.33mの方形である。

主軸方向　N－15°－W

壁　壁高は2～8㎝で，外傾して立ち上がる。

床　全面が凸凹で，締まっている。特に，北西コーナー部付近と中央部の一部が踏み固められている。中央部から東壁寄りに攪乱を受けている。

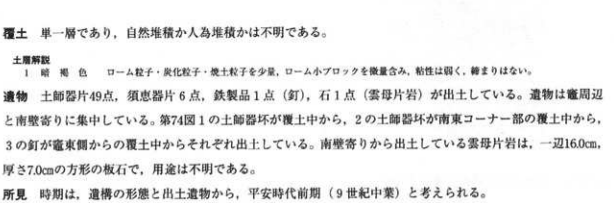
竈　北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，袖部は，西側と東側の一部が残存している。規模は，残存率が悪いために詳しくは不明であるが，最大幅84cmと推定される。火床部は，床面を特に掘りくぼめておらず，若干の火熱を受けているが，赤変硬化していない。

覆土　単一層であり，自然堆積か人為堆積かは不明である。

土層解説
1　暗　褐　色　　ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。

遺物　土師器片49点，須恵器片６点，鉄製品１点（釘），石１点（雲母片岩）が出土している。遺物は竈周辺と南壁寄りに集中している。第74図１の土師器坏が覆土中から，２の土師器坏が南東コーナー部の覆土中から，３の釘が竈東側からの覆土中からそれぞれ出土している。南壁寄りから出土している雲母片岩は，一辺16.0cm，厚さ7.0cmの方形の板石で，用途は不明である。

所見　時期は，遺構の形態と出土遺物から，平安時代前期（９世紀中葉）と考えられる。



第74図　第25号住居跡出土遺物実測図

第25号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第74図 1	坏 土師器	A [13.6] B 4.0 C [6.4]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がり，中位と下位に明瞭な稜を持つ。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。内面から底部内面にかけヘラ磨き。底部ヘラ削り。	雲母　砂粒 内面　黒褐色 外面　灰黄褐色 普通	30%　P202 内面黒色処理 覆土中

第74図 2	坏 土師器	A [12.4] B 3.4 C [5.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がり，中位と下位に不明瞭な稜を持つ。口縁端部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位回転ヘラ削り。内面から底部内面にかけヘラ磨き。底部ヘラ削り。	雲母　砂粒 内面　黒褐色 外面　にぶい橙色 普通	30%　P.203 内面黒色処理 覆土中 (南東コーナー)

図版番号	種　別	計測値				出土地点	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
3	釘	(3.9)	0.5	0.5	(3.56)	覆土中（竈東側）	M18

第26号住居跡（第75図）

位置　調査Ⅰ区北部，C 6 c6区。

重複関係　本跡は第27号住居跡と重複している。本跡が，第27号住居跡の竈付近の覆土を掘り込んでいることから，本跡が新しい。

規模と平面形　住居跡の東側が調査区域外であることから，一部しか残存していない。東西軸(0.47) m，南北軸(2.93) mで，長方形または方形と推定される。

主軸方向　不明。

壁　壁高は20～27cmで，垂直に立ち上がる。

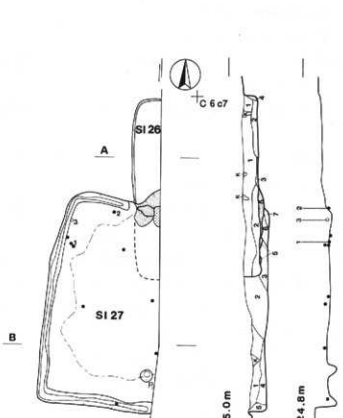
床　全面が平坦で，締まっている。南部分で，褐色土による貼床が施されている。

竈　覆土に粘土粒子が含まれていることから，調査区域外に付設されているものと推定される。

覆土　4層からなり，自然堆積と思われる。5層は貼床の層である。

土層解説

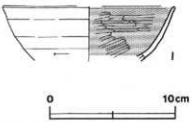
1　暗褐色　ローム粒子を少量，ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
2　暗褐色　ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
3　褐　色　ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まっている。
4　にぶい褐色　灰褐色粘土粒子を中量，ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。
5　褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。



第75図　第26・27号住居跡実測図

第26号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第76図 1	坏 土師器	A [13.6] B (4.3)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。内面ヘラ磨き。	石英　雲母　砂粒 内面　黒色 外面　にぶい褐色 普通	10%　P.204 内面黒色処理 覆土中



第76図　第26号住居跡出土遺物実測図

遺物　土師器片３点，須恵器片２点が出土している。この内２点は貼床内からの出土である。第76図１の土師器坏が覆土中から出土している。

所見　時期は，重複関係と出土遺物から，平安時代前期（９世紀後葉）と考えられる。

第27号住居跡（第75図）

位置　調査Ⅰ区北部，Ｃ６c6区。

重複関係　本跡は第26号住居跡と重複している。第26号住居跡が，本跡の竈付近の覆土を掘り込んでいることから，本跡が古い。

規模と平面形　本跡の東側が調査区域外であことから，東西軸(1.87)ｍ，南北軸(3.40)ｍの長方形または方形と推定される。

主軸方向　Ｎ－３°－Ｅ

壁　壁高は17～37㎝で，垂直に立ち上がる。

壁溝　半周している。上幅10～19㎝，下幅３～11㎝，深さ10～12㎝で，断面形はＵ字状である。

床　全面が平坦で，締まっている。特に，中央部が踏み固められている。

竈　北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。第26号住居跡に掘り込まれているが，火床部，煙道部と西側の袖部が一部残存している。規模は，焚口部から煙道部まで60㎝，最大幅(42)㎝，壁外への掘り込み26㎝である。火床部は，床面を３㎝ほど掘りくぼめており，火熱を受けて赤変しているが，あまり硬化していない。煙道部は外傾して，階段状に立ち上がる。

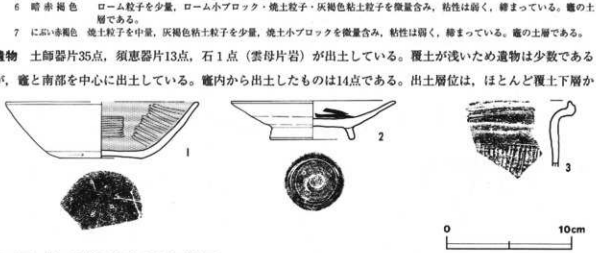
ピット　Ｐ1は径19㎝の円形で，深さ16㎝である。南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　７層からなり，自然堆積と思われる。

土層解説

1	褐　　色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量，焼土粒子・灰褐色粘土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
2	暗 褐 色	ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
3	褐　　色	ローム粒子を中量，ローム小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
4	褐　　色	ローム粒子・焼土粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
5	にぶい褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
6	暗 赤 褐 色	ローム粒子を少量，ローム小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。竈の土層である。
7	にぶい赤褐色	焼土粒子を中量，灰褐色粘土粒子を少量，焼土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。竈の土層である。

遺物　土師器片35点，須恵器片13点，石１点（雲母片岩）が出土している。覆土が浅いため遺物は少数であるが，竈と南部を中心に出土している。竈内から出土したものは14点である。出土層位は，ほとんど覆土下層か



第77図　第27号住居跡出土遺物実測図

らである。第77図１の土師器坏が西壁寄りから，２の須恵器高台付皿（墨書「工」）が竈の西脇から，３の須恵器鉢が北西コーナー部からそれぞれ出土している。南壁際の壁溝上から出土した雲母片岩は，縦18.0cm，横14.0cm，厚さ4.5～6.3cmの板石で，用途は不明である。

所見　時期は，遺構の形態や出土遺物から，平安時代前期（９世紀中葉）と考えられる。

第27号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第77図 1	坏 土師器	A [15.4] B 4.5 C 6.6	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がり，下位に明瞭な接を持つ。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部手持ちヘラ削り後，ナデ。	砂粒 内面　橙色 外面　橙色 普通	40%　P203 内面黒色処理 覆土下層 （西壁寄り）
2	高台付皿 須恵器	A 13.3 B 3.1 D 6.8 E 1.0	高台部から口縁部の破片。高台部は直線的に開く。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	砂粒 灰黄色 普通	60%　P206 墨書「工」 覆土下層 （竈西脇）

図版番号	器種	部分	器形・手法の特徴	備考（台帳番号，出土位置，色調など）
3	鉢 須恵器	体部 ～ 口縁部	口縁部は強く外反し，端部は上方につまみ上げられている。口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。口縁部内外面・体部外面ロクロナデ。外面平行タタキ。	ＴＰ48 覆土下層（北西コーナー） 淡黄橙色

第28号住居跡（第78図）

位置　調査Ｉ区北部，Ｃ６e4区。

規模と平面形　長軸3.32m，短軸2.70mの長方形である。

主軸方向　Ｎ－４°－Ｗ

壁　壁高は35～42cmで，外傾して立ち上がる。

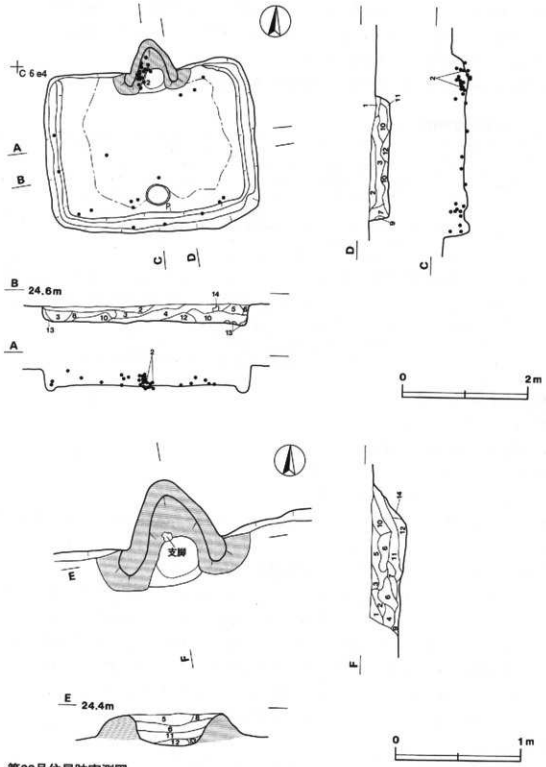
壁溝　竈の西側の一部を除き，巡っている。上幅20～45cm，下幅３～17cm，深さ７～10cmで，断面形はＵ字状である。

床　全面が平坦で，締まっている。特に，中央部が踏み固められている。

竈　北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部，煙道部と両側の袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部まで84cm，最大幅121cm，壁外への掘り込み50cmである。火床部は，床面を５cmほど掘りくぼめており，火熱を受けているが，赤変硬化していない。焚口部から36cm奥の火床部に土製支脚を埋め込み，その上に土師器甕をかぶせて利用している。支脚と甕の焚口部に近い面のみが赤変硬化している。支脚は砂混じりの灰褐色粘土が使われており，焼成の具合は悪く，もろくて崩れやすい。そのため甕をかぶせ，補強していると考えられる。煙道部は外傾して，階段状に立ち上がる。

竈土層解説

1　灰　褐　色　ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
2　にぶい褐色　灰褐色粘土粒子を中量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
3　暗赤褐色　焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
4　極暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
5　にぶい赤褐色　灰褐色粘土粒子を中量，ローム粒子・焼土粒子を微量含み，粘性を帯び，締まっている。
6　暗赤褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
7　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
8　にぶい赤褐色　焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
9　暗赤褐色　焼土粒子・灰褐色粘土粒子・灰を微量含み，粘性を帯び，締まっている。
10　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
11　暗赤褐色　焼土小ブロックを少量，ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性を帯び，締まっている。
12　にぶい褐色　焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量，焼土小ブロックを微量含み，粘性を帯び，締まりはない。
13　暗赤褐色　焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
14　褐　色　ローム粒子を少量，焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。



第78図　第28号住居跡実測図

ピット　P1は長径36cm，短径31cmの楕円形で，深さ10cmである。南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　13層からなり，ブロック状の堆積状況がみられることから，人為堆積と思われる。

土層解説

1　灰　褐　色　　ローム粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
2　暗　褐　色　　ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。

第79図　第28号住居跡出土遺物実測図

3　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。
4　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
5　暗　褐　色　ローム粒子を中量，ローム小ブロック・褐色土・黒褐色土を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
6　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み，粘性は弱く，締まっている。
7　暗　褐　色　ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはなく，崩れやすい。
8　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・暗褐色土を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
9　褐　　色　ローム大ブロックを中量含み，粘性は弱く，締まりはない。
10　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
11　灰　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子を少量，ローム中ブロック・砂を微量含み，粘性を帯び，締まっている。
12　黒　褐　色　ローム粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
13　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。

遺物　土師器片86点，須恵器片54点，土製品１点(支脚)が出土している。遺物は，竈と住居跡全体の覆土中から出土しているが，特に北東部に多く，約31%を占める。竈内から出土したものは約16%，南東部から出土したものが約14%，南西部から出土したものが約16%，北西部から出土したものが約７%，Ｐ1から出土したものが約６%で，その他が約10%である。また，竈を除いた遺物の出土層位は，覆土上層が約42%，覆土下層と床面直上が約58%である。土製支脚はもろくて崩れており，実測が不可能であった。第79図１の須恵器蓋が南東コーナー部寄りの覆土下層から，２の須恵器鉢が竈内からそれぞれ出土している。これら竈内から出土した土器片は，火熱を受けておらず，支脚の西側に集中して出土している。このことから，住居跡廃絶後に，廃棄されたものと考えられる。

所見　時期は，遺構の形態や出土遺物から，平安時代前期（９世紀前葉）と考えられる。

第28号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　　考
第79図 1	蓋 須恵器	A〔10.7〕 B〔 0.9〕	天井部から口縁部の破片。天井部は平坦で，緩やかに開く。口縁端部は屈曲垂下する。	天井部内外面・口縁部内外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り。	雲母　砂粒 灰白色 普通	10%　P208 覆土下層 (南東コーナー)
2	鉢 須恵器	B〔10.5〕 C〔16.0〕	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ロクロナデ。外面上位平行タタキ，下位ヘラ削り。	長石　石英　雲母 砂粒 橙色 普通	5%　P209 竈内

第29号住居跡（第80図）

位置　調査Ｉ区中央部，Ｃ６i2区。

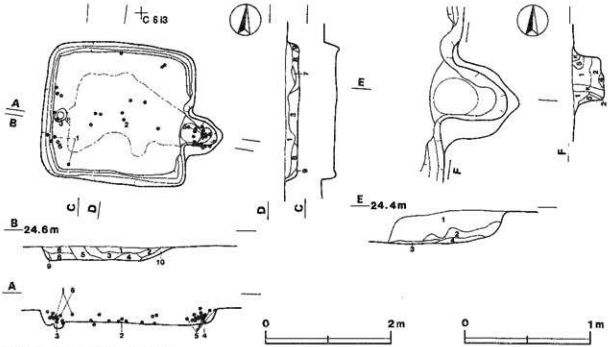
規模と平面形　長軸2.40m，短軸2.20mの方形である。

主軸方向　Ｎ－96°－Ｅ

壁　壁高は約23cmほどで，外傾して立ち上がる。

壁溝　全周している。上幅11～20cm，下幅２～６cm，深さ２～６cmで，断面形はU字状である。

床　全面が平坦で，締まっている。特に，中央部が踏み固められている。



第80図　第29号住居跡実測図

竈　東壁中央やや南に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部と煙道部が残存している。袖部は，掘り込んだ壁の角に粘土を貼り付けており，床面にも粘土痕がないことから，張り出しはなかったと思われる。規模は，焚口部から煙道部まで78cm，最大幅91cm，壁外への掘り込み48cmである。火床部は，床面を掘りくぼめておらず，中央部が赤変している。煙道部は外傾して，緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

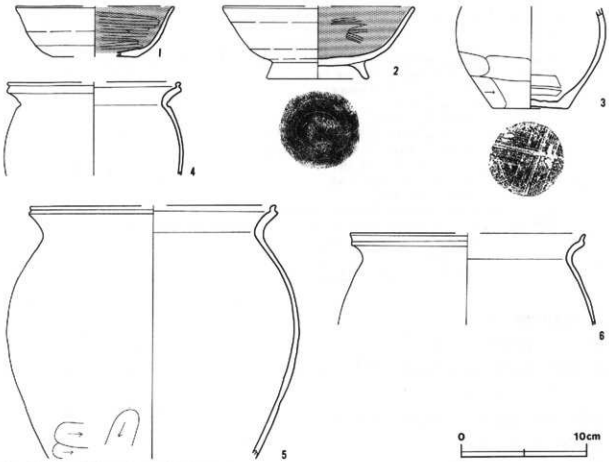
1	黒褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
2	黒褐色	ローム粒子・焼土大ブロックを多量，ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を中量，炭化物・炭化粒子・褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。火熱を受けた天井部の一部が崩落した層と思われる。
3	黒色	ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子・焼土小ブロックを中量，焼土中ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。
4	暗赤褐色	ローム粒子を多量，焼土小ブロック・焼土粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子・焼土中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
5	にぶい赤褐色	灰褐色粘土粒子を多量，焼土粒子を中量，ローム小ブロック・炭化粒子・焼土小ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。天井部または袖部の崩落土と思われる。

ピット　P1は長径24cm，短径17cmの楕円形で，深さ9cmである。西壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　10層からなり，ロームブロッが多く，ブロック状の堆積状況であることから，人為堆積と思われる。

土層解説

1	褐色	ローム粒子を多量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量，炭化粒子・焼土粒子を微量含み，締まっている。
2	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・炭化物・焼土大ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
3	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量，炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。
4	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量，ローム大ブロック・炭化粒子・焼土粒子を少量含み，締まっている。
5	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量，ローム中ブロックを中量，ローム大ブロック・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。
6	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，炭化物・炭化粒子・焼土粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。
7	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量含み，粘性を帯び，締まっている。
8	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，炭化粒子・焼土粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。
9	褐色	ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を多量含み，強い粘性を帯び，締まっている。
10	黒褐色	ローム粒子を多量，ローム中ブロックを中量，炭化粒子・焼土小ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。



第81図　第29号住居跡出土遺物実測図

遺物　土師器片83点，須恵器片76点が出土している。遺物は，竈と住居跡全体の覆土中から出土しているが，南半分に約42%が集中している。竈内から出土したものは約32%，北東部から出土したものが約7%，南東部から出土したものが約12%，南西部から出土したものが約30%，北西部から出土したものが約10%，その他が約9%である。また，遺物の出土層位は，約82%が覆土上層である。第81図1の土師器坏と6の土師器甕が南西コーナー部の覆土上層から，2の土師器高台付坏が中央部の覆土中層から，3の土師器小形甕が西壁寄りの覆土下層から，4の土師器小形甕と5の土師器甕が竈内からそれぞれ出土している。竈内から出土した4や5などの土器片は，火熱を受けておらず，2層の上から出土していることから，住居廃絶後に廃棄されたた可能性がある。

所見　時期は，遺構の形態や出土遺物から，平安時代前期（9世紀中葉）と考えられる。

第29号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第81図 1	坏 土師器	A［12.4］ B 4.0 C［6.6］	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がり，中位に明瞭な稜を持つ。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。内面から底部内面にかけヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後，ナデ。	石英　雲母　砂粒 内面　黒色 外面　黄橙色 普通	10%　P210 内面黒色処理 覆土上層 （南西コーナー）
2	高台付坏 土師器	A［15.1］ B 5.8 D 7.8 E 1.5	高台部から口縁部の破片。高台部は長く，「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。内面から底部内面にかけヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	スコリア　砂粒 内面　黒褐色 外面　にぶい赤褐色 普通	40%　P211 内面黒色処理 覆土中層 （中央部）

第81図 3	小 形 甕 上 師 器	B（8.1） C　6.0	底部から体部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ナデ。 体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。 底部ヘラナデ。	長石　石英　砂粒 にぶい褐色 普通	40%　P212 覆土下層 （西壁寄り）
4	小 形 甕 上 師 器	A［13.6］ B（7.4）	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられ，口唇部に棒状工具による四線を巡らす。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。	長石　石英　砂粒 にぶい赤褐色 普通	30%　P216 竈内
5	甕 上 師 器	A［19.5］ B（20.1）	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられ，口唇部に棒状工具による四線を巡らす。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ，外面下位ヘラ削り。	石英　雲母　砂粒 スコリア にぶい褐色 普通	30%　P214 竈内
6	甕 土 師 器	A［18.8］ B（7.3）	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し，中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられ，口唇部に棒状工具による四線を巡らす。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。	石英　雲母　砂粒 にぶい赤褐色 普通	10%　P215 覆土上層 （南西コーナー）

第30号住居跡（第82図）

位置　調査Ⅰ区中央部，C５j0区。

重複関係　本跡は第１号掘立柱建物跡と重複している。本跡が，第１号掘立柱建物跡のP6～P8を掘り込んでいることから，本跡が新しい。

規模と平面形　長軸2.99m，短軸2.75mの方形である。

主軸方向　N－7°－W

壁　壁高は40～46cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　北壁を除き，巡っている。上幅16～30cm，下幅３～14cm，深さ３～12cmで，断面形はU字状である。

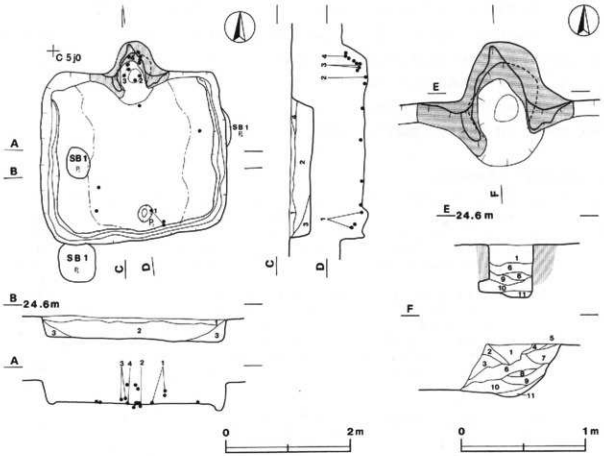
床　全面が平坦で，締まっている。特に，中央部が踏み固められている。第１号掘立柱建物跡のP7とP8を掘り込んでいる部分は暗褐色土によって，４～10cmほどの貼床を施している。

竈　北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部，煙道部と両側の袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部まで102cm，最大幅127cm，壁外への掘り込み50cmである。火床部は，床面を５cmほど掘りくぼめており，火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は外傾して立ち上がる。第83図２と３の土師器坏，４の土師器高台付皿などの竈内から出土した土器片は，若干の二次焼成を受け，ススが付着しいる。２は置かれたように東袖寄りに逆位の状態で，３と４が火床部の奥から煙道部にかけて出土している。このことから，２は支脚として利用された可能性が，３と４は煙道部の袖強材として利用された可能性もあるが，祭祀的な意味を持つことも考えられる。

竈土層解説

1	黒　褐　色	焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量，炭化粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
2	にぶい赤褐色	灰褐色粘土粒子を中量，炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
3	暗 赤 褐 色	ローム小ブロックを少量，ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
4	にぶい赤褐色	ローム粒子・焼土粒子を少量，灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
5	にぶい赤褐色	焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
6	極暗赤褐色	ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
7	暗 赤 褐 色	焼土小ブロック・焼土粒子を少量，灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
8	暗 赤 褐 色	焼土粒子を中量，灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
9	暗 赤 褐 色	焼土粒子を中量，焼土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
10	極暗赤褐色	焼土粒子を中量，炭化粒子・焼土小ブロックを微量含み，粘性を帯び，締まりはない。
11	にぶい赤褐色	灰を中量，焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。

ピット　P1は長径26cm，短径21cmの楕円形で，深さ10cmである。南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピッ



第82図　第30号住居跡実測図

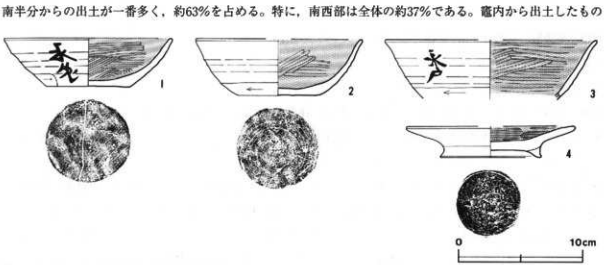
トと考えられる。

覆土　4層からなり，ロームブロックを多量に含んでいることから，人為堆積と思われる。

土層解説

1	暗　褐　色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
2	暗　褐　色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を中量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
3	黒　褐　色	ローム粒子を少量，ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
4	褐　　色	灰褐色粘土小ブロックを中量，ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。

遺物　土師器片126点，須恵器片64点が出土している。遺物は，竈と住居跡全体の覆土中から出土しているが，南半分からの出土が一番多く，約63%を占める。特に，南西部は全体の約37%である。竈内から出土したもの



第83図　第30号住居跡出土遺物実測図

は約11%，北東部から出土したものが約８%，南東部から出土したものが約26%，北西部から出土したものが約15%，その他が約３%である。また，竈を除いた遺物の出土層位は，覆土上層が約25%，覆土中層が約40%，覆土下層と床面直上が約35%で，覆土中層から覆土下層にかけて多く出土している。第83図１の土師器坏（墨書「永成」）が南壁寄りの覆土中層から覆土下層にかけて，２と３の土師器坏（３は墨書「永成」），４の土師器高台付皿が竈内から逆位でそれぞれ出土している。

所見　時期は，遺構の形態や出土遺物から，平安時代前期（９世紀中葉）と考えられる。

第30号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第83図 1	坏 土師器	A 13.6 B 3.9 C 6.8	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，中位に明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位手持ちヘラ削り，内面から底部内面にかけヘラ磨き。底部外面手持ちヘラ削り後，ナデ。	雲母　砂粒 スコリア 内面　黒色 外面　灰褐色 普通	80%　P217 内面黒色処理 体部外面墨書「永成」 覆土中層～下層 （南壁寄り）
2	坏 土師器	A [13.3] B 4.5 C 6.4	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，中位に明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位回転ヘラ削り，内面から底部内面にかけヘラ磨き。底部外面回転ヘラ削り後，ナデ。	ね美　雲母　砂粒 内面　黒色 外面　にぶい橙色 普通	60%　P218 内面黒色処理 体部外面スス付着 竈内
3	坏 土師器	A [17.0] B (4.8)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位回転ヘラ削り，内面ヘラ磨き。	雲母　砂粒　スコリア 内面　黒色 外面　にぶい橙色 普通	30%　P219 内面黒色処理 体部外面墨書「永成」 竈内
4	高台付皿 土師器	A [13.6] B 2.5 D 8.0 E 0.9	高台部から口縁部の破片。高台部は短く，「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ，直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部内面から底部内面にかけヘラ磨き。底部外面回転ヘラ削り後，ナデ。高台部貼り付け，ロクロナデ。	ね美　雲母　砂粒 スコリア 内面　黒色 外面　にぶい橙色 普通	60%　P220 内面黒色処理 体部外面二次焼成 竈内

第31号住居跡（第84図）

位置　調査Ⅰ区西南部，Ｄ５c3区。

重複関係　本跡は第16・30号掘立柱建物跡，第225・288・294・295号土坑と重複している。第288号土坑が本跡の竈手前の覆土上層から下層を掘り込んでいることから，本跡が古い。また，本跡が第16号掘立柱建物跡のＰ1，第30号掘立柱建物跡のＰ1とＰ7とＰ8，第225・294・295号土坑を掘り込んでいることから，いずれよりも本跡が新しい。

規模と平面形　長軸4.03m，短軸3.76mの長方形である。

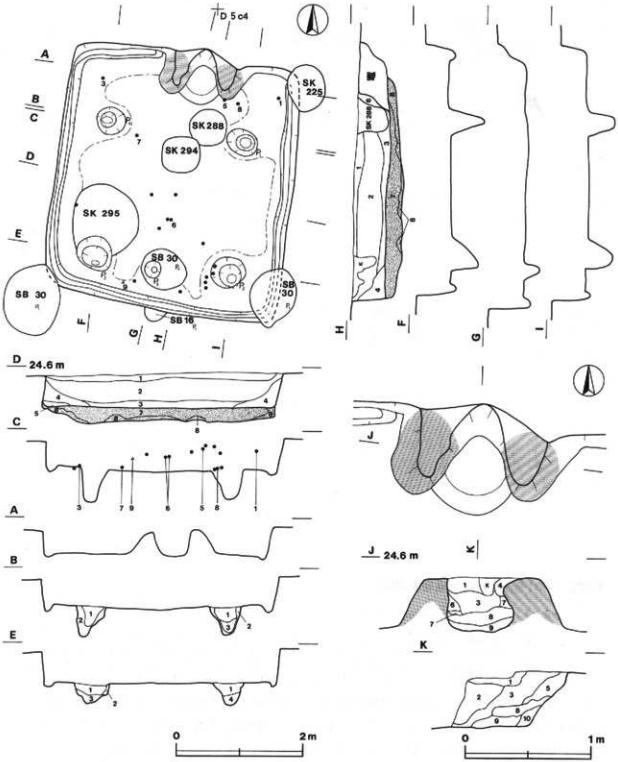
主軸方向　Ｎ－12°－Ｅ

壁　壁高は45～56cmで，垂直に立ち上がる。

壁溝　全周している。上幅15～26cm，下幅３～10cm，深さ４～12cmで，断面形はＵ字状である。

床　全面が平坦で，ほぼ全面に暗褐色土による貼床が施されており，締まっている。特に，中央部が踏み固められている。

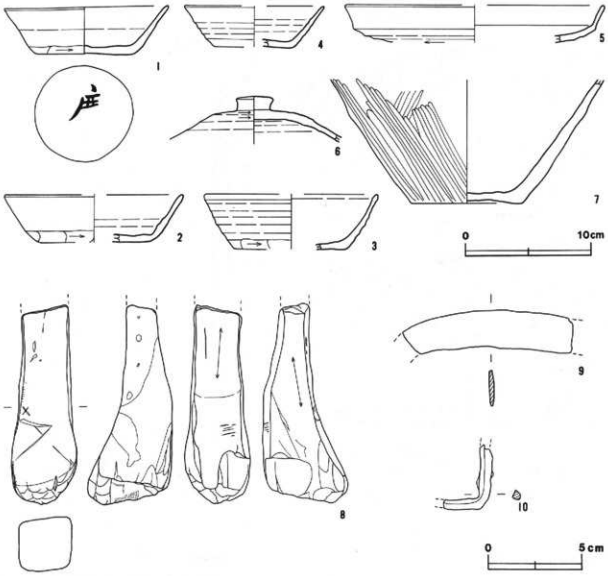
竈　北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部，煙道部と両側の袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部まで89cm，最大幅129cm，壁外への掘り込み８cmである。火床部は，床面を14cmほど掘りくぼめた後，ロームを多量に含む褐色土を貼り，深さ４cmほどの火床面が作られている。その上面は，火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は外傾して，階段状に立ち上がる。



第84図　第31号住居跡実測図

竈土層解説

1	褐　色	ローム粒子・焼土粒子を中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子・焼土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
2	暗 褐 色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・灰を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
3	暗 褐 色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量，ローム中ブロック・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を中量含み，粘性を帯び，締まりはない。
4	黒 褐 色	灰褐色粘土粒子を少量，ローム中ブロック・ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
5	暗 褐 色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
6	灰 褐 色	灰褐色粘土を多量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。天井部の崩落土と思われる。



第85図　第31号住居跡出土遺物実測図

7	赤　褐　色	焼土大ブロック・灰褐色粘土を多量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。火熱を受けた天井部の一部が崩落した層と思われる。
8	灰　褐　色	ローム粒子・灰を多量，ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を中量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・炭化物・焼土大ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。灰を主体とした層と思われる。
9	にぶい橙色	灰を多量，焼土粒子を中量，焼土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。灰を主体とした層と思われる。
10	灰　褐　色	ローム小ブロック・ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。

ピット　5か所（P1～P5）。P1～P3は長径50～61cm，短径40～51cmの楕円形で，深さ44～47cmである。P4は径45cmほどの円形で，深さ55cmである。いずれも各コーナー部寄りに位置し，主柱穴と考えられる。P5は径26cmの円形で，深さ25cmである。南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。

柱穴土層解説　主柱穴と思われるピット（P1～P4）の土層で，共通した層がみられる。

1	褐　色	ローム粒子を中量，ローム小ブロック・黒色土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
2	褐　色	ローム小ブロックを中量，ローム粒子を少量，黒色土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
3	褐　色	ローム小ブロックを少量，ローム中ブロック・黒色土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
4	暗 褐 色	黒色土小ブロックを中量，ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。

覆土　6層からなり，自然堆積と思われる。7・8層は貼床の層である。

土層解説

1	褐　色	ローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量，暗褐色土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
2	暗 褐 色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量，ローム中ブロックを少量，焼土粒子・暗褐色土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。

3　褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子を少量。ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
4　暗 褐 色　ローム・ローム粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
5　黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子を少量，黄化粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
6　灰 褐 色　灰褐色粘土粒子を少量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を微量含み，粘性を帯び，締まっている。
7　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子を多量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・黒色土ブロックを中量含み，強い粘性を帯び，締まっている。
8　褐　　色　ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を多量含み，強い粘性を帯び，硬く締まっている。

遺物　土師器片121点，須恵器片132点，石器１点（砥石），鉄製品２点（手鎌，釘）が出土している。遺物は，竈と住居跡全体の覆土中から出土しているが，特に南西部が多く，他は平均的である。竈内から出土したものは約１％ほどで，細片が多いため実測できなかった。北東部から出土したものが約15％，南東部から出土したものが約19％，南西部から出土したものが約26％，北西部から出土したものが約16％，その他が約23％である。また，竈を除いた遺物の出土層位は，覆土上層が約56％で一番多く，覆土中層が約25％，覆土下層と床面直上が約17％で，貼床内から出土したものが約２％である。第85図１の須恵器坏（墨書「度」）が北東コーナー部の覆土上層から，３の須恵器坏が北西コーナー部の覆土下層から，５の須恵器盤が竈手前の覆土上層から，８の砥石が床面直上から，６の須恵器蓋が中央部の覆土中層から，７の土師器甕が覆土下層から，９の手鎌が南壁寄りの覆土中層からそれぞれ出土している。竈内から出土した土器片はほとんど細片であり，灰を主体とした８・９層から出土しいることから，住居跡廃絶後に投棄されたと考えられる。

所見　時期は，遺構の形態や出土遺物から，奈良時代後期（８世紀後葉）と考えられる。

第31号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第85図 1	坏 須恵器	A 13.1 B 3.8 C 7.9	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ，直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り後，一方向のヘラ削り。	長石　雲母　砂粒 にぶい黄橙色 普通	80%　P222 底部外面墨書「度」 覆土上層 (北東コーナー)
2	坏 須恵器	A [14.2] B 3.8 C [8.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位手持ちヘラ削り。底部手持ちヘラ削り後，ナデ。	石英　雲母　砂粒 灰黄色 普通	30%　P223 覆土上層～下層 (北西コーナー) 覆土上層 (南東コーナー)
3	坏 須恵器	A [13.8] B 4.4 C [9.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り後，ナデ。	長石　雲母　砂粒 明灰黄色 普通	20%　P224 覆土下層 (北西コーナー)
4	坏 須恵器	A [11.0] B 3.3 C [6.2]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後，一方向のヘラ削り。	砂粒 灰白色 普通	10%　P225 覆土中
5	盤 須恵器	A [20.6] B (3.0)	体部と口縁部の破片。体部から口縁部にかけ，中位に明瞭な稜を持ち，内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。	石英　雲母　砂粒 黄灰色 普通	20%　P226 覆土上層 (竈手前)
6	蓋 須恵器	B (3.8) F 2.9 G 1.1	つまみと天井部の破片。扁平なボタン状のつまみが付く。天井部は平坦で，内彎気味に開く。	つまみ・天井部内外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り。	石英　雲母　砂粒 灰黄色 普通	50%　P227 覆土中層 (中央部)
7	甕 土師器	B (9.8) C 9.0	底部から体部の破片。平底。体部から口縁部にかけ，内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ナデ，外面ヘラ磨き。底部本葉痕有り。	長石　石英　砂粒 にぶい褐色 普通	20%　P228 覆土下層 (中央部)

図版番号	種別	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	出土地点	備考
8	砥石	(10.1)	3.4	4.5	(163)	凝灰岩	床面直上(竈手前)	Q9

図版番号	種　別	計測値				出土地点	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第85図9	手　鎌	(10.0)	1.9	0.3	(9.50)	覆土中層（南壁寄り）	M19
10	釘	(3.5)	0.6	0.5	(3.82)	覆土上層	M20

第32号住居跡（第86・87図）

位置　調査Ⅰ区西南部，D 5 d5区。

規模と平面形　長軸3.93m，短軸3.72mの方形である。

主軸方向　N－10°－W

壁　壁高は52～64cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　全周している。上幅20～44cm，下幅3～21cm，深さ6～10cmで，断面形はU字状である。

床　全面が平坦で，締まっている。特に，中央部が踏み固められている。

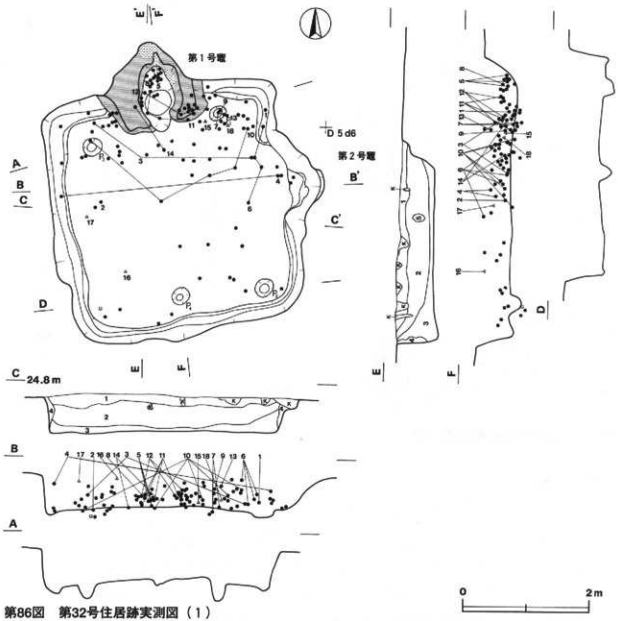
竈　北壁と東壁の2か所で確認された。北壁のものを第1号竈，東壁のものを第2号竈として記述する。遺存状態から，当初は東壁に第2号竈が作られ，破壊された後に，新たに北壁に第1号竈が作られたと考えられる。よって，住居廃絶時まで使用されていたのは，第1号竈と思われる。

第1号竈は，北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部，煙道部と両側の袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部まで144cm，最大幅146cm，壁外への掘り込み72cmである。火床部は，床面を5～10cmほど掘りくぼめた後，暗褐色土を貼り，深さ3cmほどの火床面が作られている。その上面は火熱を受けて赤変硬化している。また，袖部は掘り方の上に暗褐色土を盛り，その上から灰褐色粘土を壁際にかけて貼り付けている。高さ79～85cmで，火熱を受けて内側中央が赤変硬化している。煙道部は外傾して，緩やかに立ち上がる。なお，土層断面の中央の攪乱は，攪乱の下部が竈奥まで延びていること，この攪乱の大きさに対して西側の袖部が破壊を受けていないことから，他の遺構による掘り込みではなく，植物等による攪乱の可能性が高いと考えられる。第88図11と第89図12の土師器甕など，竈内から出土した多くの土器片は，二次焼成を受けているものがあること，袖部の中に埋め込まれて出土したことから，竈の補強材として利用されているものと思われる。特に，14の須恵器甑は残存率が高いまま利用されており，竈製作の様子がうかがえる。また，第88図5と8の須恵器壺は，竈中央に被熱した灰褐色粘土混じりの土塊の上に，逆位で重なって出土していることから，支脚として利用されたと考えられる。土層は24層に分けられた。そのうち，1～13層は天井部や袖部の崩落土や灰層など，14～23層は袖部断面の土層，24層は火床面の貼床層である。

第2号竈は，東壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部と煙道部が残存している。袖部は，掘り込まれた壁の内側に若干の粘土を貼り付けている程度で，残存していない。床面にも粘土の痕跡は認められず，第2号竈は第1号竈に作り替えられる際に破壊されたものと考えられる。現状での規模は，焚口部から煙道部まで62cm，最大幅57cm，壁外への掘り込み55cmである。火床部は，床面を15cmほど掘りくぼめており，火熱を受けているが，赤変硬化していない。煙道部は外傾して，初めは階段状に，のち緩やかに立ち上がる。

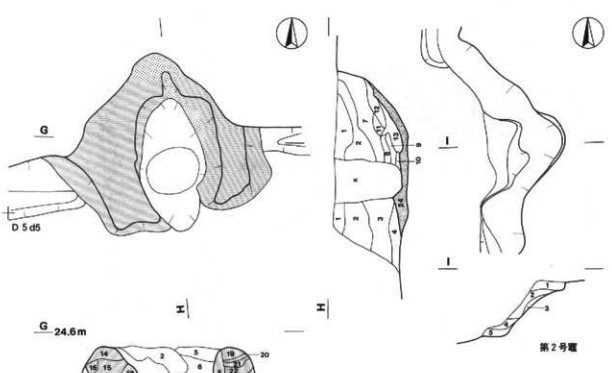
第1号竈土層所説

1	極暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロック・炭化粒子・焼土小ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。
2	暗褐色	ローム粒子を中量，ローム小ブロック・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
3	褐　色	ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土中ブロックを中量，ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土大ブロック・焼土中ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。天井部の崩落土と思われる。



第86図　第32号住居跡実測図（1）

4	暗　褐　色	ローム粒子を中量，ローム小ブロック・炭化物・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土小ブロックを少量含み，粘性を帯び，締まっている。
5	暗　褐　色	焼土粒子を多量，ローム粒子・焼土中ブロックを中量，炭化物を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
6	極暗褐色	焼土粒子を中量，ローム粒子・炭化物・炭化粒子・焼土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
7	暗赤褐色	焼土大ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を多量含み，粘性は弱く，締まっている。
8	にぶい褐色	灰を多量含み，粘性は弱く，締まりはない。灰を主体とした層と思われる。
9	にぶい褐色	灰を多量，焼土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。灰を主体とした層と思われる。
10	にぶい褐色	灰を多量，焼土大ブロック・焼土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。灰を主体とした層と思われる。
11	赤　褐　色	焼土粒子・灰を中量，焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み，締まりはない。煙道部の崩落土と思われる。
12	明赤灰色	灰褐色粘土ブロックを含み，粘性を帯び，締まっている。一部被熱している。天井部の崩落土と思われる。
13	灰　褐　色	灰褐色粘土ブロックを中量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
14	灰　白　色	灰褐色粘土ブロックを中量，砂を少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
15	明褐灰色	灰褐色粘土ブロックを多量，砂を少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
16	褐　灰　色	灰褐色粘土ブロックを少量，ローム小ブロック・砂を微量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
17	褐　灰　色	灰褐色粘土ブロックを中量，ローム中ブロックを少量，砂を微量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
18	赤　褐　色	被熱した灰褐色粘土層で，粘性は弱く，硬く締まっている。
19	にぶい赤褐色	ローム小ブロック・焼土中・小ブロックを少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
20	にぶい褐色	灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
21	暗　褐　色	灰褐色粘土粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
22	暗　褐　色	灰褐色粘土粒子を中量，焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
23	暗　褐　色	灰褐色粘土粒子を中量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
24	暗　褐　色	焼土大ブロックを中量，ローム粒子・炭化物・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量を含み，粘性を帯び，締まっている。



第87図　第32号住居跡実測図（2）

第2号竈土層解説

1　暗　褐　色　　ローム粒子を中量，炭化粒子・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
2　暗　褐　色　　ローム粒子を中量，炭化粒子・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，硬く締まっている。
3　褐　　色　　ローム粒子を多量，炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，締まりはない。
4　褐　灰　色　　灰を多量，焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。灰を主体とした層と思われる。
5　暗 赤 褐 色　　焼土粒子を多量，焼土中ブロック・焼土小ブロックを中量，ローム粒子・炭化粒子を少量含み，締まりはない。

ピット　4か所（P1～P4）。P1とP2は長径29㎝，短径20～26㎝の楕円形で，深さ20～31㎝である。P3は径30㎝の円形で，深さ25㎝である。P1は北東コーナー部，P2は南東コーナー部，P3は北西コーナー部に位置し，主柱穴と考えられる。P4は長径28㎝，短径25㎝の楕円形で，深さ21㎝である。南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　5層からなり，自然堆積と思われる。

土層解説

1　暗　褐　色　　ローム粒子を中量，焼土粒子を少量，炭化粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
2　黒　褐　色　　ローム粒子を中量，炭化粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量，焼土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
3　黒　褐　色　　ローム粒子・焼土粒子を少量，ローム小ブロック・炭化物を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
4　褐　　色　　ローム粒子を中量，焼土粒子を微量含み，粘性はなく，締まっている。
5　灰　褐　色　　砂を中量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性はなく，締まりはない。

遺物　土師器片676点，須恵器片409点，石器1点（砥石），鉄製品4点（刀子），鉄滓1点，礫1点，炭化材2点，炭化米1点が出土している。遺物は，竈と住居跡全体の覆土中から出土しているが，特に東半分に約60％が集中している。竈内から出土したものは約5％，北東部から出土したものが約32％，南東部から出土したものが約28％，南西部から出土したものが約17％，北西部から出土したものが約11％で，P4の覆土中からの出土を含めてその他が約7％である。また，竈を除いた遺物の出土層位は，覆土上層が約32％，覆土中層が約41％，覆土下層，床面直上，P内と貼床内から出土したものが約27％である。第88図1の須恵器坏が北東コーナ